



始





聖
人
物
語

シルベン、ブスケ著



物語

五月之巻

大阪司教出版認可

大正
2. 9. 18
丙午

聖人物語 (五月之卷)

VIE DES SAINTS

目次 Table des matières du mois de Mai

五月一日…	(1)使徒聖ノキヤンズ及聖ヤコブ Saint Philippe et Saint Jacques, apôtres	一頁
	(2)聖マルクル修士 Saint Marcoul, abbé de Nanteuil	四頁
	(3)聖女トクタ童貞 Sainte Thorette, vierge et bergère	七頁
同日…	聖アタナシオ司教博士 Saint Athanase, docteur de l'Eglise.	一三頁
同日…	(1)聖十字架の発見 Invention de la Sainte Croix	二五頁
	(2)聖アレキサンδρο教皇並に聖エレンシオ司祭等六名殉教 Saint Alexandre, pape et six autres martyrs	二八頁
同日…	聖婦モニカ Sainte Monique, veuve.	三七頁
同日…	聖ピオ第五世教皇 Saint Pie V, pape	五〇頁
聖人物語 目次		一

聖人物語 目次

二

五月六日…	福聖ジャンタルク La bienheureuse Jeanne d'Arc, vierge.	五五頁
同日…	聖スタニスラオ司教殉教 Saint Stanislas, évêque de Cracovie, martyr.	六八頁
同日…	(1)大天使聖ミカハルの發願 L'apparition de Saint Michel, archange. (2)福者ベルナルド修士 Le bienheureux Bernard, dominicain.	七六頁 七七頁
同日…	ナゾレンスの聖グレゴリオ司教博士 Saint Grégoire de Nazianze, docteur de l'Eglise	八二頁
同日…	(1)聖アントニノ司教 Saint Antonin, archevêque de Florence (2)聖ハクトロ農夫 Saint Isidore, laboureur.	九五頁 九二頁
同日…	聖エピファニオ司教博士 Saint Epiphane, évêque et docteur	一〇〇頁
同日…	聖ネレエ、聖アキレオ、聖女マリア等殉教 Saint Nérée, Saint Achillée, frères martyrs, et Sainte Flavie Domitille, 福者ハトリオ修士 Le bienheureux Egidius (ou Gilles) de Portugal	一〇五頁 一一三頁

五月十四日…	聖ボニファシオ殉教、聖アトラエ痛悔女 Saint Boniface, martyr, et Sainte Aglaé, pénitente.	一一〇頁
同日…	聖パコーム修士 Saint Pacôme, (abbé)	一二八頁
同日…	聖シモン・スタニタ修士 Saint Simon Stock, général des Carmes.	一三六頁
同日…	聖パスカール・バヤロン Saint Pascal Baylon, religieux.	一四一頁
同日…	(1)聖クナンシオ少年殉教 Saint Venant de Camerino, martyr. (2)聖女テオドト並に童貞女七名の殉教 Saint Théodote, cabaretier et 7 vierges martyres.	一四八頁 一五一頁
同日…	聖ピエール・セレストノ第五世教皇 Saint Pierre Célestin V, pape.	一五六頁
同日…	シエナの聖バルナルヤノ修士 Saint Bernardin de Sienne, franciscain.	一六三頁
同日…	聖ジャン・ネポムセノ靈父殉教 Saint Jean Népomucène, prêtre, martyr du secret de la confession. (1)聖女リタ寡婦 Sainte Rite, veuve.	一六九頁 一七六頁

聖人物語 目次

三

聖人物語 目次

五月 廿二日… (2) 福者ヨハネ、バプチスタ、マチアド、聖父並に日本人の殉教
Les Bienheureux J. Baptiste Matiado, Pierre de l'Assomption, et,
Martyrs Japonais. 一七 八頁

同 廿三日… 聖女プデントienne 童貞、聖女プラクセデス 童貞
Sainte Pudentienne et Sainte Praxède, soeurs 一八 七頁

同 廿四日… 聖ロガシアン、聖ドナシアン兄弟殉教
Saint Rogatien et Saint Donatien. 一九 〇頁

同 廿五日… 聖グレゴリオ第七世教皇
Saint Grégoire VII, pape. 一九 四頁

同 廿六日… 聖フィリップ、チリオ修士
Saint Philippe de Néri, fondateur de l'Oratoire. 二〇 一頁

同 廿七日… 聖マリアの聖女マリヤ、パズザンナ童貞
Sainte Marie Madeleine de Pazzi, carmélite. 二〇 七頁

同 廿八日… カンツリアの聖オグスチノ司教
Saint Augustin de Cantorbéry, évêque. 二一 六頁

同 廿九日… 聖ウバート修士 (本文に「カメルム」あるは「カメル」の誤)
Saint Hubert, moine. 二二 一頁

同 三十日… 聖フェルナナド王
Saint Ferdinand III, roi de Castille. 二二 八頁

五月 卅一日… (1) 聖女ペトロナ、童貞
Sainte Pétronille, vierge à Rome. 二二 三頁
(2) 聖女アンゼラメリヤ、童貞
Sainte Angèle Merici, vierge, fondatrice des Ursulines. 二二 三頁

黙想目次 Méditations.

契約の櫃とエルサレムの聖殿とに就て (一) 二九

三位一體の玄義に就て (二) 二九

十字架に就て (三) 三〇

父母の龜鑑 (四) 三〇

十字架に就て (五) 三一

善き牧者 (六) 三一

天國の食卓に就て (七) 三二

良き友を擇べ (八) 三二

破門の罰 (九) 三三

清淨なる心情 (一〇) 三三

異教人と結婚させる事に就て (一一) 三三

契約の櫃とエルサレムの聖殿とに就て (一二) 三三

契約の櫃と云々 (一三) 三三

聖バコモオの夢 (一四) 三五

カルメル聖衣會 (一) 二九
カルメル聖衣會 (二) 二九
天主に對する内外の敬禮 (三) 二九
公教會の階級に就て (四) 二九
聖愛を心に養ふ事 (五) 三〇
カルメル聖衣會 (六) 三〇
火の籠より救はれし三少年の故事 (七) 三二
火の籠より救はれし三少年の故事 (八) 三二
公教會は磐の上に在ること (九) 三二
契約の櫃云々 (一〇) 三三
契約の櫃云々 (一一) 三三
契約の櫃云々 (一二) 三三
契約の櫃云々 (一三) 三三
契約の櫃云々 (一四) 三五

聖人物語 目次



聖人物語 (五月之卷)

五月一日 (1) (一世紀)

垂仁天皇時代

使徒聖ヤコボ

使徒聖ヤコボ

聖ヤコボはニアの國に生れ、幼き時より書を讀み、聖書を學んで居られた、御主耶穌基督が聖教を傳へ給ふ時、彼は逸早く其御側に近づき、目に奇しき聖蹟を視、耳に妙なる教理を聽いて大に感動して心の底より之に信じ従ふ事となつた。そして其後御主より親しく御招きを蒙つて使徒に選ばれ、常に主に跟らうて離れなかつた。

主耶穌が御昇天遊ばされて後、聖ヤコボは本國ニアを去り、北の方に聖教を弘め傳へんと旅立ち、歐羅巴の東北にして亞細亞の西境なるシシアに赴き、其地で永い年月傳道に努めたので、數多の洗禮者を得

聖人物語

使徒聖ヤコボ(五月一日)

て、聖教が盛んに行はれるやうになつた。斯くて其後亞細亞の内なるヒリネアに往つて熱心に布教して居られたが、遂に其地に於てエラポリ市の異教人に迫害せられ、種々の責苦を受けた上、十字架に釘附けられて立派な最後を遂げられたのである。その年月は確でない。

其後信徒等が此聖人の遺骸を得て、聖ヤコボの遺骸と共に之を羅馬の都に送り、使徒の聖堂に埋葬した。それで今に尙其儘保存されて在る。

使徒聖ヤコボ

聖母マリアの御同胞に今一人マリアと名づく方があつた。耶穌御降生前凡そ三十六年に全地のクレオファスと云ふ者に嫁ぎ、ヤコボ、ヨセフ、シモン、ユダと名づく四人の子を産んだ。孰れも皆主耶穌に招かれ、長するに及んで四人共使徒に選ばれたのである。

聖ヤコボは幼少の頃より至つて品行正しく、長するに従うて眼に悪さを看す、耳に悪さを聽かず、口に悪

きを言はず、舉止動作共に端正にして、總て君主の聖旨に適ひ、酒も飲まず肉も喰はずして、日々只麵包と清水とのみにて其身を養ひ、また晝夜沈黙して祈禱を爲し、久しく跪いて動かないといふ風であつたから、兩膝の皮が厚くなり、宛がら駱駝の膝に似て居つた。

(註に曰ふ、ユデア國の人民は常に貨物を運搬するに駱駝を用ゆる習慣があつた。此駱駝といふのは、生得脚長く身の丈が高いから、貨物を駱駝の背上に積み載せる時には、先づ駱駝を地上に跪かしめて居つた。それ故駱駝の兩脚の皮は之が爲に厚く且硬く、恰も木や石の如くなるので、彼の聖書に聖ヤコブの兩膝が駱駝に似たりとあるは、聖人が地に跪いて居ることの最も長きを謂ふたのである)。

さてまた聖ヤコブは時々匍匐うて頭を地に叩くことがあつた。それが爲の額も亦固きこと膝の如くであつた。特に此ヤコブ聖人は其徳至つて高き方であつたから、人々は孰れも皆聖人と稱し合うて居つた。當時エルサ

レム市の聖殿内に小なき聖堂があつて、之を至聖堂と名づけ、安りに他人の入ることを許さず、たゞユデア教の大司祭のみ毎年一回入つて居つたのであるが、聖ヤコブはその高德の爲め、特に此至聖堂の内に入つて祈禱を爲すことを許されて居つた。

御主耶穌基督は、御年三十歳に及んで始めて聖教を宣べ傳へ給ひしが、其時聖ヤコブは六十餘歳の身を以て主に従ふた。主は之を迎へて使徒と爲し給ふた。然し是よりも先に同じ名のヤコブといふ者があつて、既に使徒と爲つて居つたから、之を區別するため、長ヤコブ・小ヤコブと呼ぶこととなつた。今茲に記すのは即ち小ヤコブの事である。

主耶穌御昇天の後、使徒等は各自別れて諸國に布教せんとするに當り、聖ペテロは此小ヤコブをエルサレムの司教となし、以て同地の信者を保護させた。ヤコブは二十餘年の間此地に留まつて居つたが、その聖徳は愈々輝き、その聲名は益々榮々、朝に夕にユデア人

の時々給し殖を野の五鯨聖主
ボコヤ聖徒使。ボツラキフ聖徒使



に勤めて聖教を信じ守らしめんと、耶穌の眞の救世主なることを證明しつゝ説き論じて居られた。ユデア教の學士司祭等は、數多の男女が續々と猶太教を離れて基督教に赴くのを見て大に怒り、相俱に謀つてヤコボを害せんとした。が羅馬より派遣されて此エルザレムに駐まつて居る總督が、信仰の自由を妨げてはならぬと厳しく命じて居つたので、遂に手を下すことが出来なかつた。

所が或年「バスカ」の祝日に、之を拜觀せんとて四方より群り來た者が數萬人の多きに及んで、市中は大混雜を極めた上、當時羅馬總督の更代があり、舊總督が去つて新總督は未だ來任せないので、彼の學士司祭等は、此機に乗じて恨を報いんと圖り、絶えず聖ヤコボの舉動を窺うて居つた。

或日使徒聖ヤコボは聖堂に入り、高き説教臺に上つて教理を説いて居られた。時に群がれる人々が、聖堂の外に立つて靜に之を聽いて居るので、ヤコボは百々

として天主聖子が救世の功業を説き、續いて主耶穌は天に上つて天主聖父の右に坐し給ひ、世の終末に當つて、生ける人と死せる人を審かん爲に、再び此世に天降り給ふ云々と述べて居られた。所が猶太教の司祭等數人、之を聞くや否や、直に説教臺に飛上り、聖人を眞逆様に地上に突落した。聖人はそれが爲め重傷を負ひ、呼吸も絶へくとなつたが、少しも臆する色なく、大地に跪きながら「主よ彼等は其の爲す所を知らざる者なれば、願くは之を救し給へ」と祈つて居られた。

頃刻する中、共謀者等群り來て聖人を石撃にし、遂に一人の木匠が木杵を執り、力を極めて聖人の頭上を搥つたので、哀れ聖人の頭破れ、頭腦が流れ出で、其儘粹切れて、勇ましき靈魂は天に昇つた。時に降生後六十年、御年九十六歳であつた。

欽明天皇時代

聖マルクルフ修士

聖マルクルフは六世紀の始め頃、佛蘭西のノルマンデーに生れたが、父母は其地の貴族で、而も聖徳の聞か高き方であつたから、幼き時より両親に従うて善徳を學び、年二十にして全く世俗の務を棄て、家を出てクレータニスに赴き、其地の司教を師と仰いで十年の久しき間、刻苦勉強に身を委ねて居つた。

そして三十歳の時に及んで始めて靈父となり、命を奉じて遊説の爲め所々に赴き、熱心に聖教を宣へ傳へて居つたが、遂に二人の弟子を得て補助として居つた。其時聖人は、粗食を爲し水を飲んで纔に生命を繋ぎ、身には羊皮と破れた衣とを纏ひ、嚴しき苦業をして居られたので、之を見る者、恰も昔し洗者聖ヨハネが曠野に居られた時の光景を想ひ出さぬはなかつたさう

である。斯くて聖人は才學に長じ、殊に其辯舌は巧にして、一たび口を開いて教理を説く時には、聴く者感動せざるはなく、其上聖人は主の特別の恩恵を蒙つて奇蹟をも顯して居られたので、數年の間の布教に、數多の罪人を改心させたのである。

某年の事であつたが、マルクルフ聖人は天主の默示を領け、海濱なるナントイの地に修院を建つる爲め適當の地を賜はらんことを、佛蘭西皇帝に奏請せよと命せられたので、聖人は直に命を奉じて巴里の都に赴つた。斯くて日曜日を待つて居ると、當日皇帝は聖堂に參詣して、彌撒聖祭を拜聴し居給ひ、皇后陛下を始め、文武の群臣、數多の宮女等、其左右を圍んで附従うて居つた。マルクルフ聖人は、破れた衣服を纏ひ、如何にも見すばらしき風姿で、獨り聖堂の片隅に跪いて居つたが、何分にも皇帝の威嚴高きに引かへ、自分の姿態の卑しきに氣後れを爲し、皇帝に近づいて奏請する事難く、顛りに祈禱を凝して居つた。

命を承けたるの證しとせよ」と。

マルクルフ聖人は之を聞いて、一も二もなく畏み諾け、直様大地に跪き、深く謙遜しつゝ、主耶穌に祈つて其恩祐を願ひ、良久して身を起し、魔に魅かれし者の前に進み、手を舉げて十字架の聖號を其者の頭の上に描きつゝ、耶穌の聖名を呼び、惡魔に其身より離るゝやうにと、嚴しく命じた所が、奇妙にも魔鬼は此一言に驚き、大に叫び狂ひつゝ逃げ去つた。そして其時惡魔の奴隸と成り居りし者は、一時地に卒倒し、恰も死人の如くになつて居つたが、頓て身を起し、元の如く無事の人となつた。

皇帝と皇后とは、此奇蹟を見て大に感じ、聖人を宮中に導き、厚く款待して教訓を聴くこととなつた。そして其後間もなくナントイの地に修院を建つるの勅命を下し、土地若干を寄附するの約束を爲られ、尙心利きたる一人の侍臣を選んで、其工事を監督せしむる事となり、一先づ聖人を國に歸へらせられたが、以後何時に

聖人の此謙遜なる態度は、深く天主に嘉せられ、直に其祈禱が聽容られたのである。即ち群臣中の一人に、惡魔に魅れた者があつたが、此者は忽ち大聲を發して「耶穌の忠僕なるマルクルフよ、願くは我を憐み給へ。爾若し我に近づけば、我苦痛は倍々加はる」と叫んだ。人々は此言を聞いて大に不思議とし、彌撒が畢つて後、皇帝はマルクルフとは誰人なるかと問はれたが、衆臣等誰も知る者がなかつた。乃で皇帝は侍臣に命じて此事を調べさせた所が、幾もなく侍臣はマルクルフを連れ来て、皇帝に見せさせた。皇帝は聖人を側近く寄せ、先づ其出身、住所、履歴まで委しくお尋ねになると、聖人は恭しく之に答へ、續いて彼の默示の顛末を奏上した。スルと皇帝は「若し果して天主の命を奉じ、ナントイの地に修院を建てる爲めの土地を求むるならば、朕いかでか之を拒まん。されど奇蹟を顯して其證據と爲さんことを望む。幸ひ此處に、魔に魅れたる者あり、汝彼の魔鬼を除き、以て天主の

ても宮中に入り、皇帝に面調するの特権を與へられた。斯くて修院の工事畢つて後、マルクルフ聖人は、弟子等と共に其修院に住ひ、最も善く修道生活を勵んで居られた。そして毎年四旬節に入ると、聖人は船に乗つて近海の或離れ小島に行き、其島で御復活祭まで唯獨り厳しき苦業を爲しつゝ、熱心に祈禱默想を爲し、その滞在中は、數日間に只一回食事を爲すのみであつた。某年弟子の中に同行を願ふ者があつたので、聖人は此等を伴れてセルセイ島に赴き、其島で各自獨居して善業を勵んで居つた。所が或日海賊が岸に上り、民家に押寄せて、或は財物を奪ひ、或は人々を捕へ奴隷となさんと迫つたので、住民等大に驚き恐れ、逃れて聖人の許に行き、斯々と事情を述べて其保護を乞ふた。其時聖人は少しも躁ぐ色なく、人々に勧め云ふやう、「必ず畏懼てはならぬ。汝等力を協せ、大膽に抵抗せよ、必ず全勝を得ん」と。衆人之を開きて實にもと思ひ、直に引返し、一同力を協せて海賊と闘ひ、遂に難なく

之に打勝ち、九死に一生を得ることゝなつた。それで住民等益々聖人に尊敬を加へ、修士等に土地を寄附し、絶えず其轉達と保佑とを信頼したと云ふ。其後皇帝より度々金銀土地を下賜せられたので、聖人は之を以て尙も數ヶ所に修院を建造られた。斯くするうち聖人も漸々と年が老い、久しく世に存ふことが出来ぬと自ら覺つたので、一日も早く宮廷に入り、皇帝に面調して厚恩を謝せんと欲し、本國を出發した。途中某所に於て、其地の名高き一人の者が聖人に面會を求め「私方の幼兒が瘋狼に咬まれ、今日か明日かといふ位に危篤に陥つて居るから、何卒御身の御轉達を以て、天主に其生命を救はれんことを願うて下さい」と頼んだ。其時聖人は快く其求めを容れて熱心に祈願した所が、奇妙にも其幼童の大傷が忽にして癒れた。又一日の旅路に、某地方の富貴の人々數人が、騎馬にて獵を爲しつゝある所に出逢ふた。折柄一疋の兎が獵犬に逐ひ追められ、逃ぐるに路なく、遂に走つて聖

人の長き衣の下に藏れた。聖人は之を憐み、雙手を伸べて其兎を懐に抱くと、狩獲者等は聖人を能く識らなから、其兎を放つて呼ばつたが然し聖人は之に耳を藉さず、其儘行過ぎやうとするので、狩獲者は益々怒つて、口々に其兎を放せと叫んだ。乃で聖人は威儀を正して、兎を放ち自由に逃さんと懐より取出したから、兎は一生懸命に通じて行く、ソレと見て數多の獵犬と騎馬とは、勇み進んで之を逐駆けんとした所が、如何した譯か犬も馬も、立つたまゝで少しも動くことが出来ぬやうになり、其狀如何にも不思議に見えたので、衆人も始めて此旅客の尋常人にあらざるを知り、従者に何人なるかを問はしめ、マルクルフ聖人なる事を聞いて、扱ては一同馬より下り、地に跪つきて無禮の罪を深く詫びた、乃で聖人は直に十字の聖號をして降福したから、犬も馬も始めて動き走ることを得るやうになつたが、兎は既に遠くへ逃げ去つて捕はれなかつた。

マルクルフ聖人は、斯く途次數々の奇蹟を行ひながら、首都に行つて參内した所が、皇帝も皇后も大に歡んで聖人を謁見した、そして數日間滞在して訣別を告ぐる時、皇帝は太子を引き、皇后は數人の姫君を連れ、俱に聖人の前に跪づいて、祝福を求められた。恠くて聖人はナントイの修院に還つて來たが、幾もなく病氣に罹つて床に就いた。コンタンス市の司教は此通報に由つて來院し、聖人に聖體を授け、終油の秘蹟をも授け、親しく數日間其枕邊に在つて看護して居つたが、聖人は竟に此病氣の爲め、眠るが如く安らかに現世を去られた。時に降生後五百五十八年であつた。

五月一日 (3) (第十三世紀頃)

後嵯峨天皇時代

聖女トレタ童貞

聖女トレタ童貞は、何地に生れたか分らぬが、佛蘭西のプールズ近在に住居し、幼き時より其地の某主人

の家(いえ)に奉公(ほうこう)し、牧畜(ぼくちく)に従(したが)うて居(ゐ)つた。其(その)出身(しゅしん)はかく下賤(げせん)ではあるが、その心(こころ)情(じやう)と行(い)爲(ゐ)に至(いた)つては、實(じつ)に美(うつく)しく貴(たか)く、世(よ)の人(ひと)々の模範(もはん)とすべき点(てん)が多(おほ)かつた。

聖女(せいじよ)トレタは、主人(しゅじん)を愛(あい)すること肉親(にくしん)に事(こと)ふるが如(ごと)くにして、忻然(しんぜん)として其(その)命(いのち)に順(したが)ひ、力(ちから)を竭(つく)して自(じ)分の職務(しやくむ)を大(だい)切(せつ)に勤(つと)めて居(ゐ)つた。即(すなは)ち日(ひ)々(じつ)朝(あ)早く起(た)ちて祈(いの)禱(た)を爲(な)し、後(のち)羊(ひつじ)の群(ぐん)を率(ひき)ゐて家(いえ)を出(で)て、或(ある)は西(にし)東(とう)に、或(ある)は遠(とほ)近(ぢか)に草(くさ)のある地(ち)を尋(たず)ねて之(これ)を放(はな)ち置(お)き、番(ばん)を爲(な)しながら其(その)傍(そば)で麻(あし)を紡(紡)ぎ、少(すこ)しも遊(あそ)び怠(おろ)さぬやうな事(こと)がなかつた。また牧(ぼく)する所(ところ)の群(ぐん)羊(ひつじ)を愛(あい)すること深(ふか)く、狼(おおかみ)等(ら)が襲(おそ)うて來(き)れば、命(いのち)を捨(す)て、之(これ)を禦(まも)り、少(すこ)しも畏(おそ)る色(いろ)なく、疫(えき)病(びやう)の流(なが)る時(とき)には、藥(いす)を與(あた)へて之(これ)を癒(い)し、宛(ま)ら母(はは)が兒(こ)を憐(あは)れ愛(あい)するが如(ごと)くに爲(な)して居(ゐ)つた。

聖女(せいじよ)はまた萬物(ばんぶつ)の上(うへ)に超(こ)えて天主(てんしゆ)を深(ふか)く愛(あい)し、絶(た)えず心(こころ)を主(しゅ)に傾(かた)け、主(しゅ)日(にち)祝(しゆ)日(にち)には、歡(よろこ)び勇(ゆう)んで隣(りん)村(むら)の修(しゆ)院(いん)に往(い)き、彌撒(みさ)を拜(はい)聴(しやう)し、聖(せい)體(たい)を領(りやう)けて居(ゐ)つた。又(また)常(じやう)に願(ねが)ひし所(ところ)を避(さ)げ、靜(しず)かなる地(ち)を尋(たず)ねて好(よ)き思(おも)ひ念(ねん)を

凝(こ)らし、或(ある)時(とき)は聲(こゑ)を揚(あ)げて主(しゅ)を讚(さん)美(び)し、或(ある)時(とき)は沈(ちん)黙(もく)して主(しゅ)を仰(あや)ぎ慕(こ)ふの情(じやう)を顯(あらわ)して居(ゐ)つた。そして好(よ)き事(こと)あれば感(かん)謝(しゃ)し、苦(くる)き事(こと)あれば甘(あま)んじて之(これ)を忍(しの)び、飲(の)む水(みづ)は渴(か)きを止(と)めるに過(あ)ぎず、食(く)物(ぶつ)は饑(う)を充(み)たすに足(た)れりとし、絶(た)えず天主(てんしゆ)に、肉(にく)身(み)を生(せい)養(やう)し、靈(れい)魂(こん)を光(ひかり)照(て)らし給(たま)ふの御(おん)恩(おん)寵(ちやう)を感(かん)謝(しゃ)し、樹(じゆ)木(ぼく)は春(はる)に回(かへ)り、青(あお)草(くさ)萌(も)いで、思(おも)慮(りよ)も言(ご)語(ご)もなき群(ぐん)羊(ひつじ)の上(うへ)に與(あた)へらるゝ主(しゅ)の御(おん)慈(じ)恩(おん)をも、彼(かれ)等(ら)に代(か)つて感(かん)謝(しゃ)して居(ゐ)つた。

或(ある)日(ひ)廣(ひろ)き芝(しば)生(せい)に於(お)いて默(もく)想(しやう)して居(ゐ)つたが、忽(たち)ち心(こころ)の中(なか)に聖(せい)愛(あい)の至(いた)り情(じやう)が起(た)り、歡(よろこ)び樂(たの)しみ極(こ)まりなき程(ほど)の快(くわい)感(かん)を覺(あ)げ、靈(れい)魂(こん)が超(こ)え然(ぜん)として終(しゆ)日(にち)人(じん)事(じ)を知らなかつた。やがて覺(あ)醒(せい)して心(こころ)附(つ)き、我(われ)に還(かへ)つて見(み)ると、日(ひ)も早(はや)や西(にし)に傾(かた)いて居(ゐ)るので、驚(おどろ)きつゝ想(おも)ふやう、「我(われ)終(しゆ)日(にち)心(こころ)を聖(せい)事(じ)に留(とど)めながら何(なん)の默(もく)想(しやう)も出(で)來(き)ず、又(また)麻(あし)もまた紡(紡)がすに居(ゐ)つた。家(いえ)に歸(かへ)り何(なん)の面(めん)目(め)も以(もつ)て主(しゅ)婦(ふ)に見(み)やうぞ!」と驚(おどろ)き慌(あわ)て、持(も)つて來(き)た麻(あし)が何(なん)處(どこ)に在(あ)るかと思(おも)はると、不(ふ)思(し)議(ぎ)にも我(われ)身(み)の傍(そば)の草(くさ)の上(うへ)に、麻(あし)は既(すで)に立(た)派(は)

に紡(紡)がれて、細(こ)き糸(いと)となつて居(ゐ)つた。トレタは之(これ)を見(み)て吃(くつ)驚(しやう)し、殊(こと)に其(その)手(て)工(こう)が却(か)つ美(み)事(じ)に出(で)來(き)上(あ)つて居(ゐ)るので、さしてこそ覺(あ)り、急(いそ)ぎ其(その)地(ち)に跪(ひざま)り、主(しゅ)の御(おん)恩(おん)祐(すけ)によつて出(で)來(き)た事(こと)を厚(あつ)く感(かん)謝(しゃ)した。斯(か)様(やう)な事(こと)は唯(ただ)一回(いち)ばかりでなく、其(その)後(のち)もトレタの精(せい)神(しん)が、専(ま)ら主(しゅ)の方(かた)に向(む)ひ、全(ま)く世(よ)事(じ)を覺(あ)らぬやうな時(とき)には、毎(まい)も一(いち)守(しゆ)護(ご)の天使(てんし)が、聖(せい)女(じよ)に代(か)つて其(その)勞(らう)を執(と)つて下(くだ)されたと云(い)ふ。一日(いちにち)もトレタが群(ぐん)羊(ひつじ)を引(ひ)いて遠(とほ)方(かた)へ行(い)つた所(ところ)が、空(そら)摸(も)様(やう)が俄(い)かに變(かは)り、黒(くろ)雲(うん)が天(てん)に漲(あ)り渡(わた)つた。トレタは斯(か)く見(み)るや、急(いそ)ぎ群(ぐん)羊(ひつじ)を集(あ)め家(いえ)に還(かへ)らうとしたが、其(その)中(なか)に風(かぜ)が暴(あ)れ狂(くる)ひ、雨(あめ)が驟(すず)に降(ふ)り出した。乃(すなは)ちトレタは餘(あま)儀(ぎ)なく足(あし)を止(と)め、熱(あつ)考(こう)へて居(ゐ)ると、群(ぐん)羊(ひつじ)も其(その)意(い)を覺(あ)つた如(ごと)く、徐(じゆ)に聖(せい)女(じよ)の周(しゅう)圍(ゐ)に集(あ)り、身(み)動(どう)きも爲(な)なかつた。其(その)後(のち)雨(あめ)は益(ますます)々(々)盛(さか)んに、篠(しの)を亂(みだ)すが如(ごと)くに降(ふ)りしきり、見(み)るくうちに大(だい)地(ち)は河(か)を成(な)すが如(ごと)くになつた。が奇(あま)妙(めう)にもトレタと群(ぐん)羊(ひつじ)とは少(すこ)しも濡(ぬ)れなかつた。又(また)或(ある)時(とき)トレタは沈(ちん)黙(もく)して、特(とく)に聖(せい)事(じ)を想(おも)ひ考(こう)へて居(ゐ)

つた時(とき)、群(ぐん)羊(ひつじ)は之(これ)を覺(あ)り知(し)つて居(ゐ)るが如(ごと)く、其(その)間(ま)和(わ)順(じゆん)しくして荒(あ)地(ち)の草(くさ)を吃(く)ひ、少(すこ)しも田(た)畑(はた)の禾(こ)苗(めい)などを害(がい)し荒(あ)すやうな事(こと)がなかつた。また或(ある)時(とき)トレタが聖(せい)堂(だう)に入(い)つて聖(せい)體(たい)訪(ほう)問(もん)を爲(な)さんとし、手(て)にして居(ゐ)つた棍(こん)棒(ぼう)を地(ち)に投(な)げ棄(す)て、置(お)いた。所(ところ)が群(ぐん)羊(ひつじ)は其(その)棍(こん)棒(ぼう)を主(しゅ)人(にん)の如(ごと)くに見(み)做(し)し、其(その)近(ぢか)邊(へん)にのみ行(い)く程(ほど)遠(とほ)く離(はな)れないやうな事(こと)もあり、或(ある)は豺(さい)狼(らう)等(ら)顯(あらわ)はれ襲(おそ)ひ來(き)て、羊(ひつじ)を取(と)つて喰(く)はうとして、其(その)棍(こん)棒(ぼう)が人(ひと)の如(ごと)くに見(み)え、近(ぢか)づき寄(よ)らぬ事(こと)もあつた。是(こゝ)は全(ま)く天(てん)使(し)が顯(あらわ)れて群(ぐん)羊(ひつじ)を番(ばん)し、豺(さい)狼(らう)を禦(まも)いで下(くだ)さつたのであらうと思(おも)ふ。

一日(いちにち)又(また)トレタが例(れい)の如(ごと)く群(ぐん)羊(ひつじ)を引(ひ)いて小(こ)河(か)の邊(へん)に出(で)た所(ところ)が、此(こゝ)日(ひ)大(だい)水(みづ)が俄(い)かに漲(あ)り溢(あ)れ、通(とほ)ることも出(で)來(き)ねば、家(いえ)に歸(かへ)る路(みち)も無(な)くなつた。其(その)時(とき)地(ち)に脆(ひそ)き、祈(いの)禱(た)を爲(な)して後(のち)、手(て)にて十(じゆ)字(じ)の聖(せい)號(ごう)を爲(な)し、棍(こん)棒(ぼう)を以(もつ)て河(か)の水(みづ)を撃(う)つと、奇(あま)妙(めう)にも河(か)水(みづ)が左(ひだり)右(みぎ)に開(ひら)いて、無(む)事(じ)通(とほ)るすことが出(で)來(き)、後(のち)を振(ふ)返(かへ)つて見(み)ると、河(か)水(みづ)はまた前(まへ)の如(ごと)く、岸(き)に漲(あ)りつゝ流(なが)れて居(ゐ)つた。又(また)一日(いちにち)旅(りよ)客(かく)數(すう)人(にん)

が、或河邊に來た所が洪水で渡ることも出来ないで、心焦ち、口々に呟いて居つた。折柄身扮卑しき一人の女が、河流に沿うて羊を放つて居つたが、旅客の呟くのを聞き、「良久辛棒しなさい」と穩かに慰めた。旅客等は此言を聞いても、卑しき羊飼の女が、何を言ふ事ぞと一時は侮つて居つたが、然し彼女が如何なる者へがあつて、良久待てといふたのであらうぞと好奇心にかられつゝ何も答へずに居ると、件の女は頓て徐かに地に跪き、良久祈禱をなして後、起つて河邊に往き、手にせる棍棒を以て水を撃つと、不思議にも河水は二つに岐れ、上流は牆にでも堰き止められた如く高くなり、下流は飛ぶが如くに流れ、霎時の間に河底が現はれた。其時彼の女は旅客等に向ひ、「早く岸に下りて對岸に通じ給へ」と云ふので、旅客等少しも疑はず、一同駆足で無事對岸に渡つた。そして河水を見ると何時の間にか初めの如く滔々と流れて居るので、大に不思議の思ひを爲し、彼の女に厚く謝辭を述べたが

女は早や遠くに去つて影も見ぬので、其儘市に入り、此事を人々に語つた、之を聞いた人々は、その羊飼の女の様子を尋ね、左様の奇妙を顯す者はトレタ女に相違ないと語り合つて居つた。

且説人衆は已に以前よりトレタ女の功德非凡なるを知つて居つたが、此日の奇事を聴いてより益々厚く尊敬するやうになつた。トレタは家に歸つて後、尙種々の卑しき業を爲さんとした所が、主人は「卿は聖女であるから、斯様な卑しき業を爲るに及ばぬ」と云うて之を止めた。トレタは之を聞き、愧かしさうにして其場を退いたが、其夜自ら想ふやう「人々は誤つて我を聖女となし、斯く厚く尊敬せられるやうになつた。最早此地に長く留まる事が能ぬ」と。翌日主人に永き年月の恩を謝し、暇を乞うて此地を去つた。

聖女は豫て、某處の深林中に一の老いたる樹があり、其樹に大きな空洞があるといふ事を聞知つて居つたので、直に其處に往つて密に修造する事に決心した。そ

して數年の間、此樹の空洞を我身の室と爲し、樹の實、草の根を食して饑餓を凌ぎ、河水を飲んで渴きを止めつゝ、祈禱黙想に日も亦足らずとして勵んで居つた。かくて若し村人等が此林に來て薪を拾ひ芝を蒐める者があるのを見ると、聖女は人に知られぬやう例の空洞の内に藏れて居つた。

此深林から十里餘り離れて居る所に一の小邑があり、其邑に聖堂があつたが、一日の事、其近在の者等が、此聖堂の鐘が奇妙の響を爲しつゝ、自然に鳴つて居るので、人々は全く其故を知らぬが、孰も皆何か喜ぶべき事が出來したのであらうと、老幼男女も聖堂に馳せ集つた。其中に誰ともなく「トレタが住居する樹の上に當つて、大きな十字形の光が發した」と叫ぶ者があるので、人々はソレと許りに先を争うて彼の深林に行つて見ると、果して或大きな樹の上に十字形の光が耀いて居るので、奇妙の思ひをなしつゝ近づいて空洞の中を檢べると、聖女は既に穩かに此世を去つて居られた。

黙想

契約の櫃とエルサレムの聖殿に就て

今日使徒聖ヤコボの傳を読み、聖人がエルサレムの聖殿内に於て殉教せられたといふ事を知られたであらう。世間に在る書籍の中イスラエルの古教とか、契約の櫃とか、ソロモンが經營した聖殿の事を論じたものがあるから、茲に此等の事蹟に就て、其大略を述べやう。

却説昔時彼のイスラエル人は、四百餘年も長く埃及

に居つたが、當時埃及人は深く異端の宗教を信じ、人物や禽獸を尊敬して神と崇めて居つた。それで各町村には唯偶像のみで、或は人の面があり、或は鳥の頭があり、或は牛馬の形があり、而も其神を敬ふ祝日には、祭司がそれ／＼の偶像を持つて町村を練歩き、群衆も亦喜んで之に跟き従ふの習慣があつた。

イスラエル人も之を看、之に慣るゝに従うて愛するやうになり、天地の創造者たる唯一の天主のみを尊敬し、崇拜すべき事を識らないのではないが、然し既に早や幾分か異教に傾いて居る状であつた。斯くて彼等は埃及を出で、後、曠野を旅したが、日久しき間何の偶像をも見ぬので、心の中に何となく不安の念が起つて居つた。所がシナイ山の下に行つた時、天主は彼等の意を定めんと欲し給ひ、男女數十萬のイスラエル人に命じて齋戒をなさしめ、三日の後を約して誠命を授くべしと告げられた。それで衆人等安堵の思をなして其命に従ひ、山の下に野營を設けて之が準備をして居

つた。

三日目になると、果して其徴候が顯れて來た。即ち朝早くより雲霧が深く降つて山の巔を圍み、霧の罩めたる中より霹靂凄まじく起り、電火さへ閃き渡つて、天地も裂くるばかりに號び響く聲が息まなかつた。時に人々は身も縮むばかりに驚き畏れ、誰一人動く者もなかつたが、モイセスのみ天主の命を奉じて山上に登り、天主の律法を領けた。そして後山より下つて營所に歸り、人々に天主の命を傳へた所が、イスラエル人等皆畏みて其命を奉じ、敢て之に背かじと約した。天主は尙も言葉のみでは信頼するに足るまじと思召され十誠を二個の石版に鐫刻んで、之をモイセスにお交附になつた。初の三誠は、世人をして天主を尊敬すべき事を教へ給へるもの、餘の七誠は、人々相互に人倫の道を守るべき事を論し給へるものであつて、モイセスは再び命を奉じて山上に登り、此二個の石版を領けたのである。

五月二日 (降生後二九七年生)

仁徳天皇時代

聖アタナオ司教博士

此に由つても、我々が日々、口に誦へつゝある十誠は、寔に天主の律法にして、而も世の始め、既に人祖アダムの心の内に刻み込まれ、人々をして善惡の區別を辨へさせ、惡を避け善を爲すべくせられたものである。然るに其後人の性は原罪に汚されて昏迷となり、漸々と天主の律法を忘るゝやうになつたので、天主は十誠を石に刻み、之をモイセスに授け給ひ、世の人々に傳へしめられたのである。されば十誠の尊きことを考ふれば、坐ろに敬愛の念を起して、之を遵守せねばならぬといふ事を、充分に曉るであらう。

聖アタナジオは、埃及の有名なアレキサンドリア市に生れ、幼き時より書を讀んで智慧敏く、其德行は殊に勝れて居つた。二十歳の時、世俗を棄て、曠野に入り、聖アプトニオ(一月十七日)を師と仰いで、數年の間同居して隱修者となつて居つた。後アレキサンドリアに歸つた所が、時の司教聖アリーサンドは、アタナオの篤學雄辯にして善徳高きを見、之を招いて教役者となし、續いて正補祭に陞した。それでアタナオは其後此司教に従ひ、常に聖堂に於て聖職を勤め、説教を爲し、大に人々の尊敬を受けて居つた。

時に皇帝コンスタンチノ陛下(八月十八日)は既に數年前異端を棄て、聖教を奉じて以來専ら公教會を保護して太平の御代となし、靈父信者等互に和睦して、

協力一致して主に任へんことを望んで居られたが、不幸にも廢教者等が、屢々之を亂し騒がせて居つた。

其中最も惡むべき者はアリウスと云へる、元アレキサンドリア市の靈父であつた。彼は背高く威容具はりたる上、辯舌も亦却々に巧であつたが、聖職者の身にありながら、世にも稀なる程傲慢不遜にして邪智に長けた者で、常に名聲を得んと努めて大徳を假裝し、人に逢うては謙遜らしく従順らしく爲す等、實に人面獸心にして、天地にも容るゝ事の出來ない大逆徒であつたのである。

彼は前任の老司教の時、自ら教長の職を得ようと圖つた。(當時コンスタンチノーブル、アレキサンドリア、アンチオキア、エルザレムの四市に在る司教を尊びて教長と稱し、各々司教數十人を統轄し、此教長の下に大司教あつて、司教數人を管治して居つた)。

其時彼は心密に想ふやう、若し幸にして教長となるならば、位衆人の上に臨つて、意の如くに驕奢に耽

る事も出來、又如何に邪道を説き傳ふども、誰も異論を吐く者もなく、皆之に従ふならん。然し全能全善にして全智なる天主は、決して斯ることを准し給はず、

老司教が世を去りたる後、靈父信者等心を協せ、アレキサンドル市の德望ある某靈父を推して其後繼と定め、たので、アリウスは大に怒り怨み、頻りに新任の司教を讒言し攻撃した。が新司教の聖徳は益々光り輝き、其言行に少しの非難すべき瑕瑾もないので、アリウスは如何ともする事が出來なかつた。それで今度は手を替へ、人々に邪道を傳へて公教會を亂し、以て仇を復さんと務めた所が、教理に明かならず、信徳なき者等は、續々之に誘惑されるやうになつた。

司教は此事を聞き、屢々アリウスを戒飭めたが、彼は更に之を聽かないので、遂に罰して其職を剝ぎ、之を國境外に放逐した。アリウスはアレキサンドルを逐出されてよりセザリアに赴き、言葉巧にウセビオ司教(六月一日)を欺いて、其管轄内の靈父となり、

思ふまゝに謬説を四方に傳へて居つた。時にニコメデア市の司教も陽に公教を奉じて、陰に邪道を説いて居つたが、翌年アリウスが全ヒ管轄内に在りて款待せられて居る事を知り、數ヶ所の司教と約を結び、力を協せてアレキサンドリアの教長に迫り、アリウスを是非其原職に復させやうと運動した。乃で教長はアタナオと協議の上、各國の司教に通牒を發し、アリウスは正に背き邪を傳ふる者なれば、永く靈父の職に復さしむべからずと申遣はした。其後埃及や希臘の各地に於て、數人の司教の間に分裂が起り、靈父の中之を従ふ者と違ふ者が出來、上も下も亂れて種々の議論が喧

ましくなつた。皇帝は聖會内に紛亂が生じ、平和を失うて、異教人等天主を認識することに害を及ぼすを深く惜み、法を設けて此紛亂を治めんと欲し、司教靈父信者等力を協せて、異端者等が人々を欺き毒するに抵抗させ、以て國民に善き感化を興へんと熱心に望んで居られた。恰

も好し其時朝廷に教皇の使節オサウスといふ人があつた。此人元西班牙の司教にして、其才徳高く、各國に聞けた人物であつたから、皇帝は直様此人を召して、聖教を治むる方法を協議せられ、決議の後、皇帝は東方各市の司教をして、シリアとエセア市に聚らしめ、共に與に協議して公教の大切なる箇條を明かに定めさせることとした。

翌年即ち降生後三百二十五年、三百十八人の司教等命を受けて聚つた。其中十七人は明かにアリウスの邪道に従うて居る者であつた。アレキサンドリアの大司教はアタナオと俱に其會に臨み、皇帝も亦エセア市に行幸せられ、衆司教を皇室の大廣間に請じて議事を開かれた。その室内には皇帝の玉座を設け、其側には教皇の使節が控へ、議事堂の正面に聖書を臺の上に載せてある。是は聖書なるものは、信徳を保つての規模にして、司教等世に道を傳へ教を宣ふるには、事々に必ず此聖書に相合ふやうに爲ねばならぬからである。そ

して三百十八人の司教は分れて左右に席を列べた。最も敬ふべき公教會は、使徒等が宣教を始めて以來未だ曾て過失がなく、曩に二百五十餘年の間、絶えず迫害を受け、司教司祭信者等は言ふべからざる苦難を忍び、爲に千萬餘人の多き殉教者を出したが、當時天下太平にして、明君コンスタンチノ皇帝は已に公教を奉じ、異教者尙多きも、然し敢て信者等を亂すこともなかつた。それ故司教等數百人、揚々として令旨を奉じて宮中に集り、共に聖事を協議して居つた。其中には數多の徳高く功績の優れし聖人があり、或は曠野に於て多年隱居せし者もあり、或は昔日大迫害の際、監獄に繋がれて重き刑罰を受けし者もあつた。嗚呼實に不可思議な聖會ではなからうか？、今を距る千五百餘年、聖史を讀んで此所を考ふると、感慨自ら禁ずる事が出来ぬ。宜しく天主が聖教を保護し、之を世に發揚せらるゝ事を讚美せねばならぬ。

容を以て衆司教に對し、教理の中、爭論を惹起す所の各箇條を詳細に取調べて其實義を定め、世の信者をして、同心一致して従順の道を踏ましめ、敢て分裂させぬやうにと勸め説かれた。時にアンチオキアの司教が起立して衆司教を代表し、皇帝が聖教を愛惜し、各地の司教を招集せられた厚意を謝し、併せて衆司教が協心事理を辨じ、力を竭して聖旨を体し、以て正道を興し人々を誨へんことを、云々と述べた。

之が畢ると教皇の使節が起立して、アリウスが出席なし居るや否やを問ふと、在と應へる者があつたからさらば意見を陳ぶべしと命じた。此時アリウスは昂然として議席の中央に進み出で、「アレキサンドリアの大司教は不正を唱へ、聖父と聖子と聖靈は、全性にして位を分てども、体を分たすと訛傳し居る云々」と詰つた。使節は之に答へて「開は公教本來の正道なり、若し之を信すること能はずとせば、其理由を説明せよ」と云ふ。アリウスは少しも怯む色なく、自分の考へた

十 聖アタナシオの講壇



議論を、言を飾り巧みに述立て、正道を以て邪となし、其邪を以て正となさんと努めた。

アリウスの語りし要旨は、天主聖子は眞の子に非ず。乃ち天主は天地よりも先に之を造られ、然る後之を以て天地萬物を造らしめたのである。されば所謂天主の御子は、天地萬物に比ぶれば、愈々大にして愈々尊きものであるが、然し是も亦造られたものであるから、天地萬物と全一にして異なる所がないのである。聖靈も亦聖子と同一の理であるといふ意味で、其言ふ所至つて新奇なるのみならず、而もアリウスが殊更聖書に對する奇辯を弄し、強て之を曲解せんとしたのである。衆司教はアリウスの此曲論を聞き、耳を塞いで怨恨せられたが、惟彼ニコシアの司教等十七人のみは、アリウスの奇辯を理あるものとし、聖書を證據とするものであると辯護した。皇帝は之を傍聴して居られたが、進んで聖教内の事に隊を容れず、たゞ善言を以て司教等を慰撫せられ、之に向つて教理を彰かにし、之

を詳かに説いて邪を駁し、世の信者をして幸に據る所を審かにし、守る所を誤らしめぬやうにと希望せられた。司教等も亦アリウスが道を謬り、異端を生せんとするの記録を作り、祈禱黙想して後連日辯論したが、アリウスは極力巧言して譲らず、遂に一ヶ月餘に涉つても尙局を結ぶ事が能なかつた。

一日アナタナオは司教に願ひ、自分はアリウスと辯論して、是非正邪曲直を明かにせんことを請ふと、司教は直に之を准した。乃でアナタナオは謙遜しつゝ、始めに正道を明かに述べ、次でアリウスの謬れる議論を一々辯駁した。之を傍聴した司教等は、孰れもアナタナオの公明正義にして堂々たる大議論に感服したが、狡猾なるアリウスは、尙飽までもと種々に抗辯して居つた。然し到底アナタナオの條理正しくして一絲亂れざる辯駁に敵することが出来ないやうになり、果ては一言も發すること叶はぬやうになつたので、恨みつゝりつ議場より外に出た。其時邪道に従うて居つた十七

人の司教中十五人は、自分等の謬見なりしを覺り、直に聖教に立歸つたが、殘る二人の司教は尙も素志を翻へさず、竟にアリウスと共に立去つた。

八月廿五日、衆司教は相共に協議して、新たに信仰簡條を編制し、聖父も聖子も聖靈も共に一性一体、即ち三位一体なることを明かに確め、並に之に異議を唱ふる者は、嚴罰に處すといふ事をも定めた、それで信者中若し之に従はぬ者があれば、即ち其者を棄て、公教會外に放逐することとなつたのである。

斯くて逆徒アリウス、並にそれと同腹の二人の司教とは、遂に惡意を改めず、此簡條に服従せないので、衆司教は之を公教會より放逐し、此公會議の決議と、アリウスの所論、並に之を罰したる書類を纏めて羅馬に送り、教皇の准許を求めた。そして尙全様の書類を作つて、之を皇帝に呈上した所が、皇帝は大に歎かれ、一面アリウス等三人を國境外に放逐し、一面此顛末を國中に公示して、ニセアの公會議にて決定せる信仰

簡條に従ふべき事と、アリウス等が傳へた害ある書物を焼き棄つべき事とを命じ、若し故と之を存する者は死罪に問ふべしと嚴命を下した。そして皇帝は宮殿内に宴を張り、衆司教を厚く款待して後、各々其所屬教區に歸らさせたが、其後人心が漸く定まるやうになつた。

然し昔日アリウス等に従うて居つた者等の多くは、尙邪を棄てず此命令に信服せないが、皇帝の命令が嚴しいので、表面には事を荒立てず、陽に命を奉じ、陰に之に違ひ、密かに謬説を傳へて正道を攻撃しつゝあつた。そして彼等は何れも皆アタナシオを恨み、日夜事を構へて之を害せんと謀つて居つた。

習年アレキサンドリアの大司教が逝去せられたので衆人はアタナシオを推して、其位を繼がせた。所が背教人等を知つて大に怒り、益々謬言誹謗して害せんと企てた。新任大司教のアタナシオは此時三十歳ばかりであつたが、仇敵の無理なるを顧はず、只管自分の

勤務の重きを辨へ、筆に寫し口に論じて信者を教へ導き、力を竭して聖教を外に傳へ、尙一人の司教を選抜し、ニセアの地に往つて、人々を勸化するやうにと委任せられた。そして自分は曠野に於て苦業する隱遁者と全じ善功を樹て居つたから、靈父聖者等は孰れも皆其徳を讃め頌へて居つた、然し彼の背教人等は、兎角聖人を妬んで息まず、絶えず皇帝に奏上して「アタナシオは傲慢不遜にして、諸方の司教司祭信者等が相争ひ、不和を生ずるは、全く此者の過失なり。彼が大司教の位に居る間は、公教會内は必ず太平になる事が出来ない」等と讒言して居つた。

皇帝の希望せらるる所は、惟聖職者等一同心を協せて教會を保護し統治し、異教人の感化に努むるやうにどの一事であつた、それで始めアタナシオの功績を知つて居られたから、彼に對する妄言偽證等を信せなかつたが、數年の間背教人等の訴訟が引續くので、皇帝も漸々疑惑が生じ、遂には如何にせば宜きかと、兎角

の思案に暮れて居る所へ、ニコメディアの司教が巧に讒言したので、皇帝は竟に之を信じ、意を決してアタナシオ司教に佛蘭西に赴かんことを命じた。(時に佛蘭西もたつ) つまりアレキサンドリアの大司教が、遠くに離れば、或は公教會内が太平となり、聖職者と信者との間、睦じく和合するならんと思されたからである。後幾もなく皇帝は又背教者の巨魁なるアリウスが、惡を改め邪を棄てたと告ぐる者があつたのを輕々しく信じ、直に之を赦してアレキサンドリア市に歸らさせた。

却説アタナシオ司教は、命を奉じてアレキサンドリアを離れ、遠く佛蘭西に赴いた。所が全地の人々は先を争うて之を歡び迎へ、當時全地に駐まつて居られた太子ユノスタヌスも亦聖人を正道の礎の如くに見做し、誠意を以て尊敬して居つた。

逆徒アリウスは、其後皇帝の赦免を得てアレキサンドリアに歸つたが、全地の信者等は堅く拒んで之を容れず、加ふるに不隱の様が見えたので、全市を離れて

船に乗り、海を航つて首都に行く、背教人等大に喜び、直様其地の大司教に請うて、アリウスを聖堂に入れ、都ての聖父等と全じく聖事に與らしむるやうにと強ひたが、大司教は之を准さないので、彼等は不服を唱へ、此上は主日の集會の時、是非共アリウスを聖堂に入れて、聖事に與らしめんと互に約した。大司教は止を得ず、信者等を諭し、共に祈つて天主に悪人等の奸謀を阻め給はんことを求めて居つた。そして愈々主日が來ると、背教の人々等は、約の如くアリウスを擁して、堂々と市の大道を通り、聖堂に向つて進み來た。時に大司教は聖堂の中に在つて、祭壇の前に平伏し、頻りに祈禱を籠め、信者等も亦哀み號びの聲を絶たなかつた。

背教人等は、アリウスを取圍み、喜び勇みつゝ歩を進め、頓て聖堂に入らうとする時、アリウスは忽ち堪へ難き程痛く腹痛を覺たので、人々に離れて厠に入つたが、良久しても出て來ないから、人々は怪み、厠に

を辯じ、以て異教に當り、信者を保護して居つたので、數年の後には、其名四方に揚り、教皇を始め聖職者信者等、之を稱して聖教の保障者と呼んで居つた。時に聖イテリヨ(一月十三日)司教も此聖アタナシオと俱共力を協せ心を全ふして、主の榮光を顯はし、民を訓へ救ふ爲め、常に苦みを辭せず、朝夕力を盡して居つた。

降生後三百五十年、皇帝命令を下して、アタナシオを國境より放逐した。背教人等大に歡び、手に手に兇器を執つて聖堂に亂入し、聖人を刺殺さんとした。が信者等死力を盡して之を防ぎ、幸に聖人を聖堂より救ひ出した。アタナシオは市を離れて埃及に往き、深く曠野に入つたが、當時埃及に居つた隠遁者は、其數幾萬とも知れぬ位で、彼等は孰れもアタナシオの才徳を愛し慕ひ、先を争うて歡迎した。然し聖人は或は此所に潜み彼處に逃れて身を隠し、時には水なき井戸の中に藏れつゝも、尙絶えず一人の修士をアレキサンドリ

行つて聲を掛けたが、何の答へもなかつた。乃て人々は益々不審に思ひ、厠の戸を開いて見ると、これは什麼に、アリウスの腹が破れ裂けて俯伏せとなり、其儘呼吸が絶えて居つた。爲に市中の騒ぎ大方ならず、遂に背教人等も此不吉の椿事に驚き、改心して正道に立歸る者も少なくなかつた。が餘の者等は尙も改心せず、固く邪道を執つて、初めの如く横暴を極めて居つた。(アリウスの邪道行はれて毒を流すこと三百年、茲に滅亡した)

越へて二年、皇帝は自らアリウス等に欺かれしことを覺り、直に命令を下して、アタナシオに、アレキサンドリア市に歸り來て復任せんことを求められた。時に降生後三百三十七年であつたが、幾もなく皇帝崩御せられ、太子コンスタンチヌが位を繼がれた。が早くも背教人等に騙されて邪教を奉じ正道を禁するやうになつた。アタナシオは患難の身に及ぼうとするのをも懼れず、努めて聖事を理めつゝ民を訓へ、書を著して正邪

ア市に遣はして、背教者等の消息を探り、且書簡を認めて全地の信者等の信仰を堅めて居つた。十一年後の三百六十一年に、皇帝が崩御し、ヤヌリノが位を繼いだ。新帝は幼き時洗禮を仰けたが、名ばかりの信者で、常に異端を信じ、私に偶像を崇拜して居つた。然し即位の日、假に民情を察して、先帝が國境外に放逐した司教等を、各々其所屬に立歸る事を准したので、アタナシオも曠野を出てアレキサンドリア市に歸つた。此時聖人を歡迎迎へた數萬の群衆は、踴躍しつゝ聖堂に入つて主恩を謝し、夜に入つて各戸の内外に燈火を點けて之を祝した。それで其夜全市は白晝の如くに光り輝き、歡び祝ふ聲が地も震ふばかりで、其後暫くの間市民は皆此アタナシオ聖人を迎へた吉日を語り草となし、稱賛の談話のみ行はれて居つたさうである。

翌年に至つて皇帝は公に背教して偶像を崇拜するやうになつた(三月十八日)。此時異教人等勢に乗じ、某

大臣をして「衆人が偶像を信じ敬ふ事を妨ぐる者は、獨り彼のアタナシオのみである。若し此者が長く市中に住居して布教するならば、士庶は早晚必ず皆天主教を信するやうになるであらう」と上奏させた。皇帝は是を聞き、即時アタナシオに死刑の宣告を與へた。之を知つた某信者は、夜密に使を遣つて聖人に此事を報せたので、聖人は慌て急いで市を出で、或河岸に行つて舟に乗り、上流に棹さすやうにと命じ、數里も溯つた時、復た下流に船を遣ることを命じた。偶々兵士等の追駈け來る船に出遇ふたが、兵士等誰一人聖人を識る者もないので、アタナシオの乗り居る船は何處に在るかど問ふた。が聖人は素知らぬ振をなし、其船は遠くも隔たつて居るまいと答へると、兵士等大に憤り聖人の面前に飛乗らんとした。然し司教の船は流れに隨ひ、矢の如くに去つた。そして此夜聖人は岸に上り、良久身を藏して居られた。

ヨビアノが位を繼いだ。此皇帝は人と爲り正直にして、深く天主を信じて居つたが、不幸にも在位僅かに一年にして病に罹り、竟に世を去つたので、續いてパレンスが位に即いた。然し彼は前のコンスタンチノ皇帝の如く異教を信じ、正を禁じ邪を護りつゝ國事を治めて居つた。それで是非共アタナシオの所任を探り、之を死刑に處せんと圖つて居つたので、聖人は其間四ヶ月餘も父親の墓中(埃及の墓は高く大きくして殆ど小屋に似て居る)に、隠れ避けて居つた。市中の人民は絶えず聖人の爲に無實なることを訴へ、聖人を市に歸らせるやうにと請願して息まないもので、皇帝も民心を失はんことを恐れ、遂に其請願を容れた。

アタナシオ聖人は、斯く種々の苦難を嘗め、言ふべからざる侮辱にも遭はされたが其後尙九年の間生存せられ、徳を積み功を樹て、七十六歳の時身體衰弱し力竭きて竟に善き終を遂げられた。時に降生後三百七十三年であつた。

黙想

三位一体の教義に就て

主耶穌宣はく「我は聖父と唯一なり」と。然るに背教者の巨魁たる彼のアリウス及び其黨等は、「天主聖子は、天主聖父と全性全体ならずして、天主聖父より造り出され、天主聖父の委任を奉じ、之に代つて天地萬物人間を造りたるものである。されば天主聖子は、天主萬物人間に比ぶれば、則ち大にして先であるが、天主聖父に較ぶると小さくして後である。聖靈も又全じ理であるから、天主は一でなくして其實三である。そして其大小前後を分つこと、各國の偶像と少しも異なる所がない」と云うて居る。此等の説は道理に悖戻して居ること勿論であるが、然も當時の司教司祭中之に信從する者があり、信者中にも亦到る所此説に従ひ、世々相傳へて三百年の久しに及んだが、遂に其邪が廢れて正善に歸つたといふのは、實に不思議と云はねばならぬ。

も盛んに行はれ、國王も憐れながら天主を認めて居つたので、上の行ふ所下もまた之に倣ふの勢であつたが、異教人等臨機應變の所置を執つて、陽に之を信じ、陰に之に違ひ、公教會に入つて洗禮を領けし者も亦數多く、名は信者なれども、實際は之を信仰せず、新しき教が人に利ありと思ひ、絶えず之に従はんとしてあつたのである。其中には司教司祭の地位に在る者もあつて、口には三位一体の天主を崇拜すると云うて居つたが、其實心の中に疑惑を抱いて定まらず、知らず識らずの中に、天主の三位を三つの神の如くに見做し、大小前後の別あつて一ならずとの邪道を説傳するやうになつたので、新しき信者等の五里霧中に迷ひ其邪を覺らずして之を信するやうになつたのは、決して無理からぬ次第である。

聖ポーロが聖書中に述べて云ふには「新に教を奉ずる者は、司教に墜すべからず、そは恐らく彼は殆り傲つて魔鬼の網の中に陥らん」と。今日背教の司教司祭等

が、聖教を毒害するのを見るに及んで、即ち聖ポールの此言の故あることが分る。埃及や希臘の人民は、天性虚偽詐術を弄し、多辯にして争を好むの弊があつたが、然し若し幸にも聖ポールの此言に従ひ、新しき奉教者を司教に陞さなかつたならば、是の如く多くの背教者を出さなかつたであらう。のみならず皇帝も亦聖教に入つたであらう。實際道理明かならずして、快よく聖教の内事に係ることを愛するといふ事が出来やうか……、少しも謬らして、奸人等に乘する隙を與へぬといふ事は出来やうか？。吾等の深く慮からねばならぬことである。

然しながら是れ皆人事のみで、毫も信徳の碍げとならず、反つて公教が天主より出でたる事を、明かに證據するものである。曩に三百年間、迫害に迫害を重ね、司教信者等死刑に處せられた者千萬人の多きに及んだが、然も公教會は益々發展して少しも衰へず、國王が天主を認識してより後、外患が息んだが、續いて内亂が

起り、絶えず背教者が出で、百方抵抗したが、然し聖道は毫も之が爲に變らず、反つて背教者中相繼いで異端が生じ、漸次またそれが滅び没したのである。是れ實に此公教會が、天主の黙示として保存さるゝことを證據立つるもので、さもなければ己に早く滅んだ筈である。されば吾等は天主が世の人々を光り照し給ふの恩恵を感謝し、尙世々の聖師にして、天主の代理者となられた方々の中、眞偽を明かに辯じ、信者を能く導いて、代々正を崇び邪を棄てさせた方々に深く感謝せねばならぬ。

そして聖師の中にも、今日のアナナオより大なる者はあるまい。師は聖教の爲に五十年間辯論を戦はし、其著す所の書籍は博く深く、其傳ふる所の道は穩にして正しく甘じて敵の攻撃を受け、奸策兇行も畏れず、悪王にも懼れなかつた。眞に是こそ聖人中の英雄である。宜しく之を敬ひ、之に従はねばならぬ。

ふには一公に信すべき事は惟之あるのみである。宜しく一天主の三位を尊み、併せて三位一体を崇むべし。其位を紊さず、其体を分つてはならぬ。蓋は聖父も聖子も聖靈も一位にして、然も聖父と聖子と聖靈とは、共に天主の性を一にし、其榮光が平均し、其威儀が永遠に同じである。是れ即ち正道にして、吾主耶穌が宣ひし所の彼の「我と聖父とは惟一なり」といふ聖言に合ふのである」と之を信じ、之を信せねばならぬ。

されば我等今より後、此天主の三位一体は、信すべくして究む事の出来ない玄義であるから、徒に世の愚なる者等と全じく、之に疑惑を懷き、永遠の罰を受くるやうな事を爲す、飽迄も此玄義を確信し、以て靈魂を救ふやうに努めんと決心せねばならぬ。

五月三日 (1) (降生後三百廿五年)

仁徳天皇時代

聖十字架の發見

聖人物語

聖十字架の發見(五月三日)

吾主耶穌基督は、救世の大功徳を遺してカルワリオン山に釘死せられて後、御弟子等は主の聖屍を請ひ受け、十字架より取下し、ヨセフ、アリマタの園に行つて、新しき石の墓の内に埋め奉つたことは、三月十五日聖ロンゾの傳中に記したが、其翌日吾主の聖十字架と、全時に釘附られた左右二賊の十字架とは、猶其儘山上に置かれてあつた。然し刑吏等時の風習に依り、其日主耶穌の石墓の側に坑穴を堀り、三個の十字架をば其内に埋め去つたのである。

吾主耶穌が御復活御昇天後、信者等は常に此聖墓に参拜し、往來が絶えなかつたので、異教人等此体を見て深く妬み、力めて之を妨げ禁めんとしたが、一向其効果がなかつた。乃で市民に命じ、小石や灰滓や塵埃等の廢物を集めて此處に運び棄てさせた所が、人民は命令の如くに爲し、數年も経たぬ中、聖墓の上は石や芥が堆く積み重なり、恰も小山の如くになつた。それ故信者等は、明かに聖墓を見る事が出来ないやうにな

つたが、然し尙絶せず此處に來て地に跪き、熱心に拜禮して居つたので、異教人等復もや一策を案じ、偶像の廟祠を此上に造り建てた。則ち斯くすれば信者等は必ず此前に跪つくやうな事はあるまいと思ふたからである。所が果して案に違はず、カルワリオ山上に大なる偶像が安置せられてからは、聖墓に參拜する者の影が絶へた。

其後二百年を経て、羅馬皇帝コンスタンチノは天主を深く崇拜し、命を國中に下して聖堂を造營らしめ、大に公教會を盛んならしめた。又皇太后聖ヘレナ(八月十九日)も何卒して吾主の聖墓と聖十字架とを尋ね獲、以て愛敬の誠意を顯はさんと深く望まれた。

逾へて百餘年の後、即ち降生後三百廿五年、皇帝がエルザレムの司教に旨を傳へて、聖堂を吾主耶穌の聖墓の上に建つるやうにと望まれ、全時に其地の總督に諭して云ふ「朕は吾主の聖墓の地に聖堂を建つる一事を總て卿の盡力經營に任す、されば聖堂の圖面より、内

外の粧飾に至るまで、卿深く熟慮し、脱漏なく之を造營すべし、朕は必ず卿の意の如く、金銀木石等の材料を一も惜まらず給與す云々」と。

皇太后は之を聞いて大に歡び、自ら海を航つてエルザレムに行き、親しく此工事を監督せられた。此時カルワリオの山上には、大偶像が尙は存し、吾主の聖墓の上にも猶ほ異教の廟祠が建て、あつたので、皇太后は之を見るなり大に怒り、早々命を下して廟祠を取毀ち、偶像を悉く打碎かした。そして工事を起す爲めに、地を開き土を運ばしむる傍ら、二百年の間堆積なつて居る瓦礫や塵芥の廢物を取除かせ、吾主の聖墓を發見するやうにと命せられた。官吏等命を奉じ、數日間かゝつて此大掃除に着手したが、其功空しからず、漸くにして汚物が全く取除かれ、茲に復び吾主の聖墓が現はるゝやうになつた。

皇太后ヘレナは大に歡び、直様其處に跪いて、涙ながらに聖墓を拜禮した。然し聖十字架は猶ほ未だ尋

見發の架字十聖



皇太后聖ヘレナ並にエルザレムの司教の面前にて病婦聖架に觸るゝ所……(二七頁)

ね當らないので、是非とも是をも尋ね出すべしと命じ、
墓側の土を掘返して居つたが、五月三日に至つて、三
個の十字架と、碎かれてある木牌一箇とを發見した。
此木牌には紅字にて横書し、「耶穌はナザレトの人に
てユデアの民の王なり」と。此乃ち昔日ピラトが命じ
て、吾主の十字架の尖頭に附けた木牌であつた。そし
て其木牌の側に長く大きな鐵釘が三つ四つあつたが、
何れが吾主のか明かでない。皇太后は此碎かれてある
木牌を見て、此三個の十字架の中一個は、確に吾主の
聖十字架であると知つたが、然し果して何れが眞の聖
架であるか分らないから、取あへず此三個の十字架と、
木牌並に鐵釘とをエルザレムの聖堂に運び送らせ、司
教に之が鑑定を求められた。時の司教マカリオは、直
に全市の信者に命じて聖堂に集らしめ、熱心に天主に
祈つて、眞の聖架を明かに示されんことを願ふた。
そして翌日司教は一人の病婦に命じて、聖堂に入ら
しめた。此病婦は餘程の病人で、久しく病褥に就き、

聖人物語

聖十字架の發見(五月三日)

服藥等怠りなく療養に手を盡して居るが、一向に効な
く、日々衰弱するのみで、遠からず死せん許に見えて
居つた時に皇太后は文武の諸官を従へて聖堂に在り、
多くの信者も參拜して居つたが、司教は頓て彼の三箇
の十字架の中一個を取出し、之を其病婦の身に觸れさ
せた。病婦は其十字架に手を觸れたが、何の効もない。
司教は又も第二の十字架を取つて、全しく手を觸れさ
せたが、是亦一向に靈驗が見えない。乃で此二箇の十
字架は二人の盜賊の處刑せられたものであるといふ事
が分つた。
次に残る一箇の十字架を取り、前と全様に試みた。
病婦は、やをら手を其上に置くど、不思議にも即時に
さしもの大病が癒はたので、之を見た皇太后を始め、
數多の人々驚いて、狂ふばかりに喜び騒ぎ、始めて其
十字架は、天主聖子が世を救ひ、身死し給へる聖架な
る事を知り、今更の如く嬉し涙を流して尊敬した。そ
して其翌日も、市内の某家の葬式があつて、死者の禮

が聖堂の門前を通り過ぎやうとする時、司教は之を呼止め、死者の棺の蓋を開かせ置き、靈父等に命じて、彼の聖十字架を取出し、之を死者の身に觸れさせた所が、不思議にも其死者は蘇生り、ムク／＼と身を起して棺内より飛出し、健全な人の如く、走りつゝ言ひながら大に歡んだ。市民等も亦此体を見て踴躍しつゝ善び、直に聖堂に入つて、天主の特恩を感謝した。が其後、此聖架に依つて、斯の如き奇蹟は數限りもなく行はれたのである。

其後各國の信者等は、此種々の喜ぶべき事を聞くを得、何れも皆歡び樂んで天主の御恩寵を感謝せざるはなく、公教會も亦特に此五月三日を以て聖十字架發見の祝日と定め、以て萬國萬代に亘つて、信者の忘れざる記念として居る。而して一方に於ては、皇太后が圖を引いて土工を起し、以て一大聖堂をカルワリオ山の側に造營し、主耶穌の聖墓を其境内に收めた。

また往古の國法では、凡て死罪を犯す者は、多くは

皆十字架に釘附けて殺して居つたが、此聖十字架を發見して以來、皇帝は新に條例を定め、各地の官吏に命じて、犯人を十字架の刑に處することを禁せられた。意ふに天主聖子が甘んじて此十字架に刑死せられた所の深き愛を敬ふと共に、亦人民をして十字架の尊ぶべきことを訓へ知らしめんが爲である。實に天主は之を以て靈魂の永生を施し給ひしものであるから、吾等怎で之を以て人を殺すの用に使ふべきぞ。公教信者等特に此十字架の形像に對して敬虔の情を起し、之を愛し慕ふの念が起るのは實に故あることである。

五月三日(2) (第二世紀)

景行天皇時代

聖アレキサンドロ教皇

並に聖エメンシオ司祭等六名殉教

歴代教皇の中、アレキサンドロと名づくる御方が六人あるが今日祝ふ聖アレキサンドロは、降生後百九年

羅馬皇帝トラチヤンの時代に在した御方で、信仰厚く徳高く、深く人心を歸服させ、數多の官吏を感化して偉功を樹てられたのである。其多くの官吏中、羅馬總督たりしヘルメスと云ふ者があつて、妻子及び妹のテオドロ等と共に公教信者となり、其召使の男女千二百餘人も、皆主人に従つて洗禮を領けた。

古き書籍に據ると、某年トラチヤン皇帝は某都督に命じて、天主公教を信する男女等捕へ、嚴重に之を處分するの權を委ねた。乃で都督は先づアレキサンドロ教皇と、前任總督ヘルメスとを捕へ、之を將軍クライノに交與し、嚴しく其罪を糾べさせた。

クライノ將軍は、先づヘルメスに向つて、「卿は素と賢智の聞え高き方なるに、何故皇帝の怒りに觸れ、職を奪はれて、斯く捕縛の身となられしか」とヘルメス答へて云ふ「我現世の富貴を甘んじて棄てしは、惟死後無窮の福樂を受けんが爲めである」と。クライノ云ふ「卿は天主公教の妄言を迷信し、死後永遠の幸福ありと

云はれるが、然し世の賢人等は、人死すれば其靈は散じ、屍は灰となると云ひ居れり」と。ヘルメス之に答へて「我も亦數年前までは、人の生死に就て左様の如く考へ、他人が永生の福樂を説いて居つても、之を譏り笑つて居つた。然し今日其心意が全く一變した」と。

クライノ云ふ「そも卿を欺き騙かして茲に至らしめたる者は、誰人なるか」と。ヘルメス云ふ「我を訓へ誨せし者は、現に今此處に居られる聖師アレキサンドロである」と。

茲に於てクライノは少しく言葉を嚴かにし、「此人は素と邪術を以て民を害せりと聞く、それ故賊と共に酷刑を受くるので、卿は斯の如き悪人の言葉に従はず、宜しく邪道を棄て、皇帝の命に服せよ」と云ひ、更に語を繼いで「卿今より後國神に事へ、之に拜禮を爲すならば、以前の如く富貴安樂の身となるべし。アレキサンドロが假令如何に天地を覆へすの術ありとも、彼は現に我手に捕はれありて脱れ去る事が出來ず、而も

数日の後必ず法に照して斬罪に處せられん」と斯くと聞いたヘルメスは、微笑みながら云ふには「我等が信じ敬ふ所の主耶穌は、ユデア人の爲に十字架の上に釘付けられ給ふ時、悪黨等は之を譏り笑ひつゝ「汝果して天主の子ならば、今十字架より下りて見よ、さすれば我等信せん(マテオ二)」と云ふたが、其時主耶穌は十字架より下りなかつたのは、決して能はぬのではなく、ただ悪黨等の罪を罰するが爲め、屑よく此奇蹟を顯はさなかつたのである」と。スルとクイリノは「若し卿の云ふが如くであれば、アレキサンドロは監獄を逃れ出づるか」と問ふので、ヘルメスは「天主は全能にて在すから、教皇を助くる聖意ならば、斯かる奇蹟を行ひ給ふこと疑ひなし」と答へると、クイリノは暫時黙然として居つたが、頓て何か決心せるものゝ如く「然らば我此事を試みん」と云棄て、席を立去つた。

クイリノは其足で監獄に往き、獄卒に命じてアレキサンドロ教皇を獄舎に入れ、嚴しく其戸を鎖さしめたる

ろして自ら其入口に於て教皇を譏り嘲りつゝ「汝若し我をして公教信者たらしめんと望まば、そは別に難かしき事ではない。只汝が今日晚餐の頃、此監獄を脱出せよヘルメス總督の監禁され居る所に行つて見よ、我若し此奇蹟を目撃するならば、必ず公教信者とならん」と。斯く云ひ了つて外に出で、數人の番卒をして嚴重に監獄の門を守らしめた。

アレキサンドロ教皇は、クイリノの去りたる後、獄内に於て恭しく跪き、熱心に祈願を籠めて天主の默示を求めて居つた。所が日もやがて暮れんとする頃、何處からともなく美しく光り輝いて居る一人の幼き童子が此獄舎に入り來り、一言の語も發せず、教皇の手を執つて監獄内より外に導き、同行してヘルメスの繋かれて居る所に往き、堅く鎖されてある中に入つて其儘姿を消した。其時は恰度晚餐の頃であつたから、彼のクイリノは、時分は宜しと密にヘルメス總督の監禁されて居る所に往つて見ると、よもやと思つて居つた教

皇は、早くも此室に於て、ヘルメスと共に跪いて祈願をして居るので、クイリノは大に駭き「是は邪術の所爲である」と叫んだ。之を聞いたヘルメスは「何故に邪術なりと叫ぶか、是れ明かに天主の顯はし給ふ奇蹟にして、邪術は嚴重なる鐵鎖を斷ち、堅固な鐵門を破り得るか?」と云ふと、クイリノは實にもと思ふたのか、片時思案して後言葉を低うし「如何にも教皇は能く奇蹟を顯し給ふ。就ては今一つの願ひあり、何卒之を聽容れて下さるやう。實は我家にバルピナと申す娘あり、既に一旦縁附きたる者なるが、不幸にも頸部に大なる瘤を生じ、それが爲め今我家に歸つて居るが、若し教皇に、今日其瘤を治して頂くことが出来るならば、最早私は剛情を棄て、立所に天主の聖教を信じます」と嘆願した。ヘルメスは之を聞いて、然らば教皇を縛つてある鐵鎖を解き、其を以て家に歸り、汝の娘の頸部に纏へよさすれば瘤は全く痕方もなく消ぬると云ひ、其時教皇も亦「我今此所に居る事に就て少し

も心配を爲すな、我は主の御恩寵を蒙り、明日早朝門を開けず、此儘再び以前の房室に歸るべし」と云うて安心させた。

其夜クイリノは、ヘルメスの言葉の通り、教皇の鐵鎖を携へて歸り、娘の頸部に纏はせると、奇妙にも即座に瘤が治つたので大に喜び感じ、翌日朝早く娘を伴うて監獄に行つた所が、教皇も亦其言葉の通り早くも歸つて居られたので、クイリノは益々驚き、直に聖人の足下に平伏して「是なるは私の娘であります、幸にも教皇の功德を蒙り、病氣全快して元の如くになりました。我等其洪恩に感じ、以後公教信者となりませう」と云ふた。教皇は大に歡ばれ、即時に二人の者に聖教を訓へ、之に洗禮を授けた。其時全獄内に居つた他の多くの罪人等も改心して天主を認識るやうになつた。

さる程に、此事早くも漏れて都督の耳に入つたから、都督は大に怒り、直にクイリノを呼寄せて其不都合を

詰つたが、クイリノは「拙者、已に眞の天主を認め、洗禮まで傾けた者であるから、今更之に背く事が出来ぬ」と斷然答へたので、都督はクイリノを十字形の柱に縛り、其舌を割切つた。然しクイリノは尙も其志を變へないので、復も命じて其手足を斬放させた。が聖人は斯る慘酷の責苦をも克く耐へ忍び、倍々其信仰を燃して甘んじ受け、竟に首を斬られて昇天せられた。

都督は更にヘルメスを引出して審問したが、是も亦堅く其志を守り、如何なる責苦に遭はせても信仰を棄てぬので、遂に市外に於て斬首の刑に處せしめた。聖人の妹、聖テオドラは人を遣はして其死骸を乞受け、叮嚀に之を葬つた。

都督は更に又續いて、獄内に於て洗禮を受けし多くの罪人も引出し、之を悉く一艘の破れ船に乗せて、海の沖遠く流し棄てたから、彼等は皆波浪に捲込まれて殉教した。

茲に於て都督は、教皇を十字形の柱に縛り、處刑すべし旨を命じた。獄吏等命に應じ、鐵の熊手を以て聖人の身體を搔き撚り、紅鐵を以て其傷痕を焼き爛らせた。之を見て都督は聖人に向ひ「汝年未だ四十に過ぎない、何ぞ自愛して其生命を救ふことを爲さないのか」と、聖人々に答へて曰ふ「我が爲に心を煩はすに及ばぬ。唯汝自ら心を慎み、永遠地獄に苦死せざるやう注意すべし」と。

時に都督の妻(此人は早く既に公教を信じ、洗禮を領けて居つたが、都督は之を知らなかつたのである)は人を遣して良人に勸め曰ふには「アレキサンドロ教皇は聖人であるから、早く之を放免して再び侮辱を加へぬやうに、さもなければ必ず天罰を蒙らん」と。然し都督は之を聴かなかつた。のみならず彼は教皇を柱より下さしめ、エベンシオとテオツールの前に引据ゑ、教皇に向つて「此二人の者は何人なるか」と訊ねた。教皇は一人は司祭にして一人は補祭なる旨を答へると

時に獄内には猶ほ教皇と、聖エベンシオ司祭、聖テオツール補祭等が残つて居つたが、都督は此等の人々を引出し、先づアレキサンドロ教皇に向つて「天主公教には如何なる奥義があるか、今我に對して之を説け」と。教皇之に答へて曰ふには「世の人々は皆卑賤なれども、若し謙遜して教理に耳を傾けるならば、信者等は喜んで之を説き訓へるのである。が卿は世の權勢に依り、傲然として聖教の教理如何を詰問し、尙且つ害を加ふるにより、信者等苦痛を忍び生命を棄つとも言はないのである」と。都督は之を聞いて大に怒り「汝は我れ國王の全權大臣なれば、我命に背くこと能はざるを知るならん」と云ふたので、教皇は直に「然し君臣の權は只此世限りにて、久しからずして必ず没するものである」と云ふと、都督は益々怒り「汝を今日死刑に處すべし」と云ふた。教皇は尙も怯まず欣然として「そは我望む所である。若しさうなれば我は今日直に聖ヘルメス聖クイリノに従うて天國に昇るべし」と。

都督はエベンシオに向つて其姓名を問ひ、何時頃より公教を奉じて居るかと訊ねた。聖人は「自分はエベンシオなる者にて、洗禮を領けて已に七十年になれり。即ち十一歳にして洗禮を領け、三十餘歳の時司祭となり、今滿八十一歳となれり。そして主を愛するが爲に獄舎に繋がる、こと約そ一年なり。本年は我平安を得、福樂を享るの年なりと思ふ」と。都督は故と言葉を和げ「汝今より身を憐みて公教に背くべし。左すれば國王は必ず汝を重く賞せん。能く思慮して其短き晩年を富貴安樂の中に送るやう圖れよ」と勸めた。がエベンシオは斯る言葉には耳をも藉さず、却て都督に勸めて云ふやう「我は汝に向つて切に悔悛めんことを勸む。若し誠意を以て主耶穌を認め、謹んで公教を信じ之に従ふならば、天主は必ず寛仁大度を以て汝の罪を赦し給ひ、終りなき福樂を與へて下さる」と。

然し都督は口を噤みて之に答へず、更にテオツールに向ひ「汝も亦國王の令旨に背かば、嚴しき處刑を免

「かれないぞ」と威嚇した。ガテオツールは「汝は何の権利を以て敢て天主の僕等を責め嘖めんとするか、而も教皇は聖人なるに何の罪ありとして重き刑を處するか……我は只主耶穌の恩祐を蒙り、聖人等と共に殉教せんことをのみ望む」と断然答へたので、都督も今は早急な決断を以て決心し、終に孰れも火刑に處せんと、先づ教皇とエベンシオの二聖人を背合せに細りつけて火中に投じ、テオツールに其惨酷の光景を見せて心を翻へさせんとした。然るに二聖人は猛り狂ふ火焰の中に投入せられると、直様其火中に起ち、不思議にも少しも身體が焼け傷つくやうなことがなく、少時して教皇は火炎の中より聲を擧げ、「テオツールよ、早く此處に來たれ、昔日イスラエルの三少年を、火の窟より救へる天使が顯はれて(本月二十三、四)此處に在し給ふ」と。テオツール斯くと聞くや直ちに進んで火の窟に入つたが、是も亦二人と全様少しも身を焼かれず、三聖人聲を合せつゝ、「主よ、主は火を以て我を煉り、我罪を消

し給ふ云々」と聖歌を唱へて居つた。都督は此体を見て、這は邪法を行ふが爲めなりと思ひ、大に怒つて三聖人を火中より引出し、之を市外に於て斬首の刑に處せん事を命じた。斯くて三聖人は刑場に往き、地に跪きて祈りつゝ、遂に殉教の榮冠を得て天に昇られた。其時都督の心中に、忽ち奇異の聲が響いて「三聖人は已に永福の國に入つた。惟汝は日ならずして地獄に下さるゝ者なり」と。流石の都督も大に駭き恐れ、急き我家に歸つて妻女に此事を告げたが、暫くする中苦痛の呻きを發して「呀、我腹の内は火にて焼かるゝ如し」と叫び狂ふた。妻女は之を慰めながら「妾は今より往つて三聖人の死骸を收め、厚く之を葬つて聖人等のお轉達を乞ひ、良人の爲に祈り願ひませう」と云ひ、直ちに三聖人の殉教せられし場所に往つて、首と身體とを恭しく拾ひ、之を叮嚀に棺に納め市外のメノタナといふ地に禮送して厚く埋葬した。そして事果てゝ急ぎ我家に還つて見ると、良人の苦悶は益々劇しく、全

身すべて火に焼かれつゝある如くに見ゆ、呼吸も絶へなく「我は故なくして聖人を殺したから、斯かる苦痛を受けるのである」と叫んで居つた。妻女は其傍に坐つたが、如何とも手の着けやうがないので、涙を流し嘆きながら「妾け異に、天主の僕を殺すならば、必ず天罰を蒙ると申上げたが、其時早く妾の言を信じて下さつたならば、斯様な惨狀に遭はぬものを」と掻き口説いた。が幾もなく都督は其苦惱の爲め、竟に非業の死を遂げた。妻女は其屍體を埋葬して後家を出で、聖アレキサンドロ教皇の墳墓の側に小さき菴を結び、其處で破れ衣を身に纏ひ、一生祈禱黙想に耽りつゝ善き終を遂げた。

又聖クイリノの女バルピナは、其後貞潔の徳を守り、自ら甘んじて貧しき生活を爲しつゝ他の窮乏を濟ひ、東西に奔走して信者の迫害に遭ひし者等を慰め、頗る聖徳の聞は高くなり、死後父の墓側に葬られた。また聖ヘルメスの妹聖女テオドラも家財を傾けて貧

しき者等を濟ひ善事を助けて居つた。其終りに就ては或は殉教せしとも云ひ、或は病死したりとも傳へて居る。然し此等各聖人の墳墓は、今日も尙其儘に遺つて居る。

黙想

十字架に就て

「榮譽は我之を他に求めず、惟主イエズスの十字架に求むるのみ」と(聖パウロ、ガラチア)

聖體を始め、聖十字架に至つて聖なる御物である。開闢の時人祖アダムが罪を犯したるに依り、天主は其御仁慈を以て聖子を此世に天降らしめ、將來其身を十字架の上に磔死せしめんと豫め定められた。が、時期が來ると果して聖子は童貞女聖マリアの胎内に孕らせられて人と成り給ふたのである。

天主はまた主耶穌の御降生前後に於て、何地とも知ることが能ないが一の樹を造り生じしめ、此樹を以て

救世主の聖架となすべきことを豫定せられたのであ
る。斯くて日を經るまゝに、聖母マリアの御子は漸々
と成長せられたが、人々は是を普通の人の如くに見做
し、此聖子が天下萬民の爲に、其罪惡を補贖ひ給ふの
恩主とは識らず、惟天主聖父は之を萬有の上に愛し給
ひ、天使は之を天地の主宰者と尊び崇めて居つた。
また天主の特に造り生じ給ふた所の樹も、或る山
上に於て日々々々長大なつたが、往來の人之を見ても、
他の樹木と異なることがないので、別に意にも留めな
かつた。然し天主は之を山中の萬木の上に愛し給ひ、
天使は之を敬うて至つて貴き物として居つた。
愆くて主耶穌は三十三歳の時、其身を犠牲として甘
んじて天主に獻げ、天下の萬民を救ひ贖ふの價となし
給ふた。然るにユデア人は全く主耶穌の御苦難の神益
を悟らず、只怒り且つ恨んで之を殺さんと圖つた。其
時或人は山に上つて彼の大木を伐り、之をエルザレム
に運んで、大工をして十字架を作らしめたのである。

蓋し之を以て罪人を釘附にするの刑具であるとは知つ
て居つたが、此十字架上に死する者が、天下萬民の罪
を贖ひ、地獄を免れしめて、永遠の生命を享けしめ給
ふの御方であるとは、さら々思ひ料らなかつたので
ある。
吾主耶穌は纏うたれ、茨の冠を押し加ふせられて後、
ピラトの法廷より曳出されし狀は、恰度羊が犠牲とな
つて祭壇に向つて行くが如くであつた。愆くて獄吏は
彼の十字架を取つて主の前に近づき、其御肩に懸け之
を背負はせた。茲に於て犠牲は其祭壇を得、祭壇は其
犠牲を得た形となり、少頃せば天下萬世に涉る人靈の
不可思議な祭を成すに至らんとするのであつた。
主耶穌は全身重き傷を蒙り、言ふべからざる疼痛を
覺せさせられたが、然し忻然として十字架を抱き、之
を負うて徐々と山上に向つて、登られたのである。斯
の如く此十字架は、初め救世主の艱難に伴うて至つて
尊き木と成り、後吾主の御手御足の鐵釘が、此十字架

に釘附けられるやうになつてからは、則ち此十字架は
救世主と合して一と成つたのである。實に此聖架は木
にして主耶穌は其葉である。開關の時一の木の葉が
人祖及び世々の萬靈を傷つけたが、今日一の木の葉
が、人類の惡しき傷を治し、之に永生を賜ふたのであ
る。宜なるかな善き樹は善き葉を結ぶと。其葉の價は
限りなきにより、其木をして至つて尊からしめ、世々
に至るまで之を愛し之を敬ひ、恰も天主聖子が其上に
釘附き懸り、我等を永遠の死より贖ひ給ふを見るが如
くに之を視せしむるのである。

されば聖人等も深く此無限の恩澤を知つて、身を終
るまで其聖愛に感佩し、一人として此聖十字架を愛し
慕はぬはなく、一人として聖パウロの説と全じからぬ
はない。曰く「榮譽は我之を他に求めず、惟主イエズス
の十字架に求むるのみ」と。
之を約めて云へば、聖十字架の木は、天主が豫め祭
壇を作り給はんが爲にとて選ばせられ、救世主が之を

以て其生命を犠牲となし、萬民の罪を贖はんことを求
め給ひしものである。されば此聖架は至つて貴きもの
にして、天主は之を見て悦び給ひ、主耶穌は聖母マリア
と共に之を愛し給ひ、天使聖人等は之を尊敬して居ら
れるのである。我等も今より後宜しく此聖架を見る毎
に、縱令其れが至つて微小なものであつても、必ず心
を盡して之を愛し敬ひ、主恩を感佩するの意を顯はす
やうに爲ねばならぬ。(未完)(五日に續く)

五月四日 (降生後三三三二年生
三八七年死)

仁徳天皇時代

聖婦モニカ

聖婦モニカは、降生後三百三十二年に、羅馬國の
ガスト市に於て生れたのである。時にコマスタチヌ
皇帝は公教信者となられて已に二十年にもなり、聖教
は大に振興つて、背教人等時々亂を起して居つたが、
然し異教人の多くは、皇帝が偶像を棄て、眞の神を拜

んで居られるのを知つて之に倣うて居つた。

モニカの祖先は數代皆公教信者で、中には世に名の聞いた者もあつた。父母は生計饒富でなかつたが、然し熱心に主を敬ひ愛し、子女の教育に力を竭し、自ら善き模範を示して居つた。モニカは天性伶俐の上、此善き薫陶を受けたので、常に徳を愛し學を好み、七八歳の頃より喜んで聖堂に詣り、久しく跪いて祈禱をして居つた。又全生涯の子女等と共に遊ぶやうの事があつても、いつの間にか離れて唯獨り静かな所を尋ね、其處で跪いて祈禱を爲し、夜間目覺ゆるやうな事があつた場合にも、直に床より起出て祈禱を爲し、終つて又も眠ると云ふ風であつた。そして貧しき者が、破れ服を纏ひ、哀れな姿をして哀れを乞ふやうな事があれば、深く同情を寄せ、喜んで金銭を與へ食を施し、其上優しき言葉をかけて其心を慰むるなど、實に殊勝な心懸を以て自分の爲め、他人の爲に盡して居つた。それで人々も此少女を見て、將來必ず普通の人の子

れた者となるであらうと噂して居つた。

數年の後のこと、モニカは益々主を敬ひ、他人を愛して居つたが、然し自分に一の過失があつた。それは絶えず酒を偷み飲みすることであつて、數ヶ月もそれを續けて居つた。そして此事は唯一人の下婢のみ知つて居つたのであるが、或日の事、モニカは此下婢に粗忽のことがあつたので、痛く之を責め叱つた所が、下婢は之に服せず、却て怒りながら口答へをなし、モニカの日頃酒を偷み飲みすることを罵つた。モニカは此言を聞いて太く心に耻ぢ、忽ち夢の醒めた如く是までの非行を覺り、面を眞紅にしながら下婢に向つて「能くも妾に其事を云うて呉れた、有がたう、今漸く夢が醒めた」と深く禮を述べ、夫より一室に入つて大に痛悔し、罪を嘆き泣いた。以來モニカは倍々私慾に打克ち、心を清めることに努め、絶えず我身の非行を査べて之を改むることに力を竭して居つた。此方法は大善美徳に進むの路で、如何なる聖人聖女も悉く皆アダムの子

孫であるから、原罪に汚されぬ者は一人もない。されば誰人でも不幸にして過ちに陥つたならば、直に之を痛悔し、以來力を竭して心を矯め、過ちを改めつゝ大徳に進むやう之を練り懲らすやうに爲ねばならぬ。

斯くてモニカは日増に徳かがやき、學廣くなり、十八歳の頃には、身秀で言柔かに、行ひ和しく、女の中の花の蕾と讃められて居つた。そして自分は生涯童貞を守り、身も心も清ふして一心に天主に仕へんと望んで居つたが、父母の命には背かれず、終に心ならずも某顯官の方に嫁いで妻となつた。此良人といふのは其名をバトリシオと云ひ、其時はまだ天主を認めぬ異教人であつて、輕薄な言や疎暴の行ひを爲すことが間々あつた(當時公教會では信者と異教人の結婚を准してあつたが、其後兎角信仰を碍げる弊があるので、遂に之を禁するやうになつた)。モニカは良人の素行を見て、常に心を痛めて居つたが、然し縱令無理な仕向けをされても、飽までも謙遜して之を耐へ忍び、少し

も怒み怒るやうなことがなかつた。のみならず自分は倍々其行爲を善くし、柔順に仕へて漸々と良人を導いて眞の信仰を爲せんものと勉めて居つた。

善き行を以て人を感化するのは、天主の聖意に適ふ事であるから、モニカは故ら良人と道の眞偽なを言ひ争ふこともなく、又天主を尊敬すべきことなども強ひて勧めず、只事毎に良人の命に順うて逆らはず、言葉遣ひも温和にし、いつも顔に喜びの色を呈し、堅く貞操を守り、熱心に祈禱を爲しつゝ、良人が自ら公教の眞なることを曉り、天主の聖寵を蒙つて一日も早く信者とならんことを望んで居つたのである。

其後モニカは二男と一女を産んだ。長子をオグスチノ(即ち後に聖オグスチノ博士と名られた方)と云ひ、次男をナビオ、女をベルベチニアと名けた。此三人の子女は、幼き時より慈母の教訓に従ひ、教理を學んで天主を愛することを知つたが、異教者なる父親が准さないので、三人とも早く洗禮を領けることが出来な

かつたのである。モニカは之を憂ひ悲んで居つたが、顔には露はとも其氣色を見せず、尙益々正しく教へ諭し、蔭ながら子女等に主を愛し善を行ふの習慣を作らせ、心の中に將來成長の後、自然と公教會に入つて洗禮を領けるやうにと望んで居つた。

三人の子女の中でも、長子のオグスチノは格別に聰明であつた。彼が八歳の時重き病氣に罹り、危篤に迫つたが、更に死を懼れず、また生を求むる色もなく、只々頻りに靈父より洗禮を領けんことをのみ願うて居つた。モニカは母の情として胸も張り裂けんばかりの思ひをなし、朝夕病兒の枕邊に在つて介抱しながら一心に祈禱をして居つたが、病兒の益々悶々苦しむ様子を見て、良人のバトリシオに向ひ、我兒に洗禮を授けることについて相談をした。良人のバトリシオは、たいさへ憂へて居るのに、今又妻のモニカが痛く心を苦めて居るのを見るに忍びず、遂に靈父に洗禮を願ふことを准した。所が不思議にも此日になつて病兒の疾病が

急に痊れたので、父親は大に歡び、爲に洗禮を領くることを准さないやうになつた。モニカは良人の氣質として、斯やうに言出せば容易に後へ退かぬといふことを能く知つて居つたから、不本意ながらも良人の命に従うて其儘にして置いたが、絶えず天主の名前に出て跪きつゝ、恩祐を感謝し、尙小兒の肉身を救はれし如くに其靈魂をも救ひ給ふやうにと祈り願うて居つた。

其後モニカは心中樂み少なくて憂ふべき事が多かつた。良人のバトリシオは官吏の身分であつたが、改心して公教を奉せざるのみならず、反て益々輕薄に流れ、正しからぬ行ひのみ振舞ひ、日々酒色に溺れて改心の萌しもなく、長子のオグスチノも父の所業を見倣うて、其後は正しき書物には見向きもせず、惡しき小説類を耽讀するといふ有様であつた。母のモニカは人知れず心を傷め、良人の改心は勿論、長男の爲に只管天主に祈り、機會ある毎に良き教訓を與へ、切々我兒を誠め諭して居つた所が、流石のオグスチノも心を改

めて學問に志し、數年の後には全職を渡ぐばかりの良き成績を挙げたが、主を愛し之に事ふるの道が漸々と弛み、驕奢の風が次第に増長して來たので、母親は又殊の外之を心配して居つた。

かくてオグスチノが十三歳になつた時、父は之を二十里許り距つて居るマドロ市の學校に入學せんと、其事を話し聞かせた所が、オグスチノは大に喜び、直に其命に従ふた。母のモニカは、我兒が遠く家郷を離れて往くならば、必ず徳を敗り善を損ふならんと察し、一時之を憂ひたが、然し我兒の爲に身き教師がないのと、良人の決心が容易に翻させることの出来ないことを想ひ合はせ、如何ともすることが出来ないから、兎も角も自身にオグスチノを伴つてマドロ市の學校に行く事を良人に乞うて准されたから、モニカは途々オグスチノに向つて、尊々と將來を戒飭し、以後惡を避け善を踏み、學問を勵むと共に善徳を練り、ゆめ／＼己が靈魂を滅すやうな所業をしてはならぬと教へ諭した。

オグスチノも日頃心より母親を愛し慕うて居つたから、今から久しく別れて居らねばならぬ事を思うて悲みながらも、此善き勸奨を聴き、以後決して御心配を懸けるやうの事を爲さないから、御安心して下さいと答へ、母子は互に膝を抱き合つて良久涙を流しながら別離を惜んだ。斯くてオグスチノは早々に入學して、一心に學業を勵み、母は我家に歸つて、次男と娘との愛に自ら慰めて居つた。

家に残つて居る二人の同胞は、性來善良にして、常に互に相愛し相親み、少しの言争ひもなく、天主を深く敬ひ、両親に孝養を盡し、毎時母親と共に善業をなし祈禱つゝあつた。そして數ヶ月の後奇妙にも父バトリシオは天主の聖寵を蒙り、恰も生れ變つた如く操行が良くなり、自ら進んで洗禮を領けんと望むやうになつたので、此機を外さず先づ次男と娘が洗禮を領けて信者となつた。母親モニカの歡びは譬ふるに物なく、涙ながらに厚く主恩を感謝した。

現世の人事は實に測りがたく、憂に次いで樂が生じ、喜びに續いて悲みが起つて來るもので、聖婦モニカも其人が改心し、二人の子女が洗禮を領けたので、心中に大方ならず喜び樂んで居つた所が明け暮れ氣遣ふて居つた長子のオグスチノは、其後學問が餘程上達したが、信徳は日々に衰へて悪業に荒み、不長の徒輩と交りて結んで居るといふ噂を耳にしたので、モニカは居ても起つても心穩かならず、急ぎマドロ市に赴いてオグスチノに逢ひ、涙ながらに其不心得を誠め責めた。オグスチノは母の顔を見、其情を察し、今後屹度心を改めませうと誓ふたが、母が歸つて後復もや漸々と行狀が亂れ、最早信仰も美德も哀へ失せて了ふたのである。昔し幼き時母親に從うて善を學び、後父親の惡しき感化を受けて墮落の淵に彷徨ふ身となつた。然し學業のみは特に優れ、三年の後マドロ市を去りカルタゴ市の大學に入つた。

四十二
 兩親に事へ、父のバトリシオは引續いて教理を研究し、母は躬ら善徳を行ひつゝ家族等の爲に熱心に祈り、殊にオグスチノの爲には、大齋を守り苦業をなしつゝ其改心の續かんことを祈つて居つた。愆くて數年の後、良人のバトリシオは重き病氣に罹り、藥石も其効が見ぬので、聖婦は晝夜其側に侍つて看護に力を竭し、尙此際是非其洗禮の恩寵を得て善き終を遂げさせんと準備して居つた。それでバトリシオも心の底より前の罪を痛悔して立派な覺悟を以て竟に洗禮の祕蹟を領けた。そして尙數日の間病床に臥して居つたが、聖婦の愛情深く怠りなき看護を深く謝し、我若し主の恩恵を蒙つて天國の福樂を享くるやうになれば、御身の爲に必ず天主に祈らんと述べつゝ、心靜かに主の懷の中に死した。時にモニカは四十歳の頃であつた。

數千人中一人も彼に及ぶ者がなく、多くの教師生徒等に親愛せられ、全市の人一人として彼を稱讃せぬ者がない位であつた。然し不幸にも自分の心靈上に就ての修養を怠りしばかりでなく、早くも天主を忘れ、専ら世の逸樂を逐ひ、聲望のみ事として居つたので、遂に邪慾の奴隸となり、妓女の手落ち、無賴漢の仲間に入り、彼等の邪教を信仰するやうになつたのである。そして二十一歳の時大學を卒業したので、教師に謝辭を述べ、朋友に訣別を告げ、カルタゴを離れて我故郷に歸つて來た。

母モニカは早くも、長男が天主の聖教に悖り、邪教に從うて居る様子を見て、或日其故を問ねると、オグスチノは更に包み隠さず、幼き弟妹の前をも注意せず、滔々と天主の聖教を墮んじ邪道を稱頌へた。母親は斯く聞いて大に怒り、威儀を正し聲を厲しながら責めて云ふには、「汝は能くも左様な暴言を吐いた、最早母子の縁も是迄である、一時も我家に置くことが出來

ないから、早々何所へか立去れ、以後再び此頃の面を見るな」と。オグスチノは大に駭き畏れ、母親の顔を見上ぐることも得せず、頭を垂れたまゝ悄然と家を出で何地にか立去つた。聖婦はあまりの情なきに良久茫然として居つたが、やがて其所に跪き、偏に我兒の罪を免されんことを天主に願うて居つた。所が其時主の默示を蒙り、夢幻の間に美しき一少年が笑を含みつゝ、晃々と光り輝きたる姿にて立現はれ、聖婦に向つて事の仔細を詳に尋ねるので、聖婦は逐一之に答へると、其少年は慈悲深き言葉を以て頻りに聖婦を慰め、オグスチノは將來必ず改心して正道に歸正るべしと告げた。聖婦は心に深く喜び、猶も主に祈つて居つたが、奇妙にも翌日オグスチノは歸り來て、母親に前の罪を深く詫びた。然し聖婦は、今直に家に入れては却て弟や妹の爲めに害を及ぼさんことを慮れ、懇々將來を戒めた上、今暫く改悔の實を擧ぐべしと諭して家に入れなかつた。

其後間もなく、徳高き某司教が此地に滞在して居ることを耳にし、尙其司教が奇蹟を行ひ、豫言をも爲すといふ噂が高かつたので、聖婦は早速其司教に面會を乞ひ、長子オグスチノが兎角正道に侍り、身を放埒に持ち崩して居る一伍一什を涙ながらに訴へて其意見を尋ねた。スルど其司教は之を慰めつ、「決して心配するには及ばぬ、母として斯くばかり深く我子の罪を哭き且つ祈るならば、其兒は必ず永く亡ぶやうな事がない、即ち其子が罪惡の爲に地獄に墮さるゝことがない」と云はれた。聖婦は之を聞いて少しく心を安んじ、禮を述べて後家に歸り、猶も熱心に我子の爲に祈つて居つた。

かくてオグスチノは二十五歳の時、此地を離れて再びカルタゴ市に行き、其地で學生を集めて教授して居つたが、五ヶ年の間に才學の譽が高くなつた。然し其精神は相變らず腐敗して居つた。或日聖婦はオグスチノより一通の書翰を受けたが、其文に「カルタゴ市は

大なる都であるが、然し羅馬の如く、人才が多くない。それ故不日船にて羅馬市に赴き、全地に於て一心に勉學し、以て身の榮達を圖り天下に名聲を揚ぐる覺悟である云々」と認めてある。聖婦は此手紙を讀み了つて後、斯かる事は佳ない、さらでも心淨きたる者が、此上花の都なる羅馬に赴かば、獨身の境遇の事とて其靈魂は益々危険に陥り、遂に救ふことも出来ぬやうになるに相違ない、是非とも之を思ひ止まらせねばならぬと考へ、急ぎ車に乗つてカルタゴに赴つた。そしてオグスチノに會ひ、始めは此地を去つてはならぬと説き勧めたが、彼の決心の堅き様子を見て取り、終に「さらば此母も汝と共に羅馬に往くべし」と云ふた所が、オグスチノは母親と一緒に行くことを深く懼れ、遂に体よく遁辭を構へて「兎も角も明日決心を定めてお答へ致しませう」と約した。聖婦はそれも然るべしと信じ、其日は別れて夕刻より聖堂に入り、夜もすがら天主の尊前に哀願して出でず、翌朝早く我子に遇はんと

カニモ婦聖



※(我子の改心を望み嘆きながら主に祈る所……(四五頁))

其假寓を訪ねた所が、こはそも什麼にオグスチノは已に船に乗つて遠く去つた後であつた。聖婦は驚き呆れ良久海邊に立つたまゝ動がず、眼に熱き涙を浮かべながら嘆き泣いて居つたが、やがて心を取直して我家に歸り、次男と娘と共に甲斐なくしく勞り慰めるので、わづかに心の苦みを制へて居つた。

翌年になつて、オグスチノは羅馬に於て重病に罹つて居る、といふ報知があつた。聖婦は我子オグスチノの爲には、最早再三再四云ふべからざる心の痛みと憂き苦勞を嘗めたが、今また危篤の報を聞くや、若しも我子が此儘罪惡の中に死すならば、其靈魂は永遠に亡ぶに相違ない、這は棄て置く事が出来ぬと直様決心して、復も羅馬に行く事と一た。當時次男は已に妻を娶り居り、娘ベルベチユも能く貞操を守つて居るので、二人の身の上には就ては心配がない。それで聖婦は娘を次男に托し置き、自分は一人の婢女を従へ長き旅路に就いた。所が聖婦の乗つた船は時々故障が起つて船脚

が遅し、羅馬に着いた時には、オグスチノの病氣は疾く癒へて、彼は羅馬に居らず、ミラノといふ地に於て教師となつて居る由を聞いたので、聖婦は旅の疲勞も物ともせず、直様又もミラノに向つて出發し、全地に於て小さき家屋を借つて住居し、絶えず我子オグスチノと往來して居つた。

此時代に羅馬の地は東西の二大國に分たれ、西國の君王はミラノを京都として居つた。そして日頃よりオグスチノの優れた才學を愛し、厚く之を寵遇して居つた。オグスチノはまた當時非凡の才徳ある司教聖アンブロジオ(十二月七日)を慕ひ、常に聖堂に入つて司教の説教を聴いて居つたが、是が天主の寵恩であつたのか、オグスチノは其説教を聴くに從うて漸々と疑念が晴れ、暗中に一縷の光明を認むるやうになつたのである。モニカは此体を見て大に歡び、度々司教の許に行つて只管我子の救靈の爲に助力せられんことを願願して居つた。聖アンブロジオは聖婦の大徳とオグス

チノの博學を愛して快く之を承諾し、其後オグスチノが聖堂に参拜するのを見る毎に、特に教理の最も難しき所を擧げて之を詳細に辯明して聴かせ、或は時々オグスチノを特に招待し、心の中より喜びの色を顯して之に接し、恰も父が其子に教ゆるが如く丁寧親切に言ひ諭し、機會ある毎に彼の邪念を聞き疑惑を破つて居つた。聖婦も亦力を籠め心を碎きつゝ、熱心に我子の爲に祈つて居つた。斯の如く司教は表面よりオグスチノと戦ひ攻めて之を破り、聖婦は裏面より熱心に天祐を仰いで居つたので、流石のオグスチノも早かれ晩かれ必ず降参せねばならぬやうになつた。

夫より二年を経てオグスチノは果して邪を棄て聖教を奉ずるやうになつた。乃ち六ヶ月の久しき間深く前非を悔い、十二分の覺悟を爲して後、司教聖アンブロオより親しく洗禮を領けた。母のモニカは節婦の衣服を着け、跪いて其側に居つたが、其時の心の歡びは恐らく最早天國の永福を享けたやうな思ひであつた。

齋中に臥すことゝなつた。それで心算かに善終の覺悟をして居ると、オグスチノも慈母の枕邊を離れず、怠りなく之を看護して居つた。

かくて九日目になると、聖婦は急に不思議の姿を顯して眼を開きながら息を吐かず、脈も止まり、身も動かさないので、人々は之を見て死したものと、如くに思つて居つた。スルと其涼やかな眼でオグスチノを顧み、幽かな聲で「我身は何地に葬らるゝも都て汝の思ひに任すから宜きに計へよ、只汝が我が爲めに主の尊前に祈り呉れよ」と云ひ了り、眼を天上に向けて何物かを見つめて居るやうであつた。オグスチノは其側に跪きながら、頻りに祈願を凝らし、時々慈母を打成りながらハラ／＼と涙を流し、胸も張り裂くばかりであつた。暫く経つと聖婦モニカは、雙の眼に我子を視つめつゝ、顔に異常の樂みの色を顯しながら粹切れて相果つた。時に降生後三百八十七年五月、年五十六歳であつた。

あらう。其後聖婦は日頃の心願も届いて大に満足し、世間の人事に心を傾けず、益々善を勵み徳を積み、主の限りなき御恩寵を感謝して居つた。或時は餘りに祈禱のみして居つて人事を辨へぬやうな事もあり、或時は終日無言を守つて黙想し、其容貌に何とも云へぬ喜ばしい色を顯したまふ、恰も氣抜けして居るやうな事もあつた。人々は此体を見て感じ、聖婦は久しからぬ中必ず天國に昇られるであらう等と噂し合つて居つた。

數日の後、聖婦はオグスチノと共に司教に別辭を告げて歸路に就き、オスチアより船に乗り、アフリカを過ぎて故郷に歸らうと思つて居つたが、オスチアの埠頭で久して出帆を待つて居る中、我臨終の期も旦夕に迫つて來たと自ら覺つたので、オグスチノに向ひ「我は此世に於て無事に暮せるのみならず、願ふ所のものは皆既に叶ふたから、最早此世に生存へるの要もない」と云つて居つたが、夫より數日を経て遂に病に侵され、斯くて聖婦の遺骸はオスチアに葬られたが、其後聖骨が羅馬に送られ、聖オグスチノの聖堂内に保存されることゝなつた。

默想

父母の龜鑑

聖書に曰く「子不肖なれば、父は之を怒り母は之を痛む(箴言一七)と。

是は乃ち世間普通の事で、子が愚かなれば父は之を叱り、母は之を哀れむこと何地も全じことである。之は其子が改心して正しく賢くなるやうにと望む結果である。されば我子を善く成さんとせば、理に由つて能く諭さねばならず、尙之に善き模範を示して導く傍ら、絶えず主の恩祐を乞ふやうに爲ねばならぬ。人々の心は都て天主の御手の上にあるのであるから、天主の聖意次第で、之を如何様になし給ふも決して難きこと

どではない。特に其父母たる者が、主の尊前に祈禱をなして願ふといふ事は、最も靈妙なる効験のあるもので、而も熱心を罩めて祈り、一意専心主に依靠るならば、天主は遅かれ早かれ必ず其子の心を更めて善に向はしめ、父母の苦痛を變へて樂みに移し給ふこと疑ひがない。

オクスチノは極めて聰明にして、其學識は人々の驚く程であつたが、天主に對しては全く痴愚の舉動を爲して居つた。其父親は始め少しも信徳がなかつたので更に之に頓着しなかつたが、終に深く之を後悔するやうになつた。此後悔したといふのは、乃ち自分は日頃正しくない舉動を爲し、言行を慎まず、殊に長子の洗禮を准さなかつたばかりでなく、自ら長子に對して善き模範を示さなかつたことである。又オクスチノも或は幼き時に洗禮を領けるか、或は父親の放蕩無頼の行狀を見なかつたならば、恐らく彼の如くに善を棄て惡に偏らなかつたであらう。父親が主の恩恵を蒙り、

改心して後此事を深く痛悔したが、彼が日頃父たるの任務を缺くる所があつたから、天主はその生前に我子の改心を見せしめ給はず、子の爲に苦んだ事を樂みとなすに至り得なかつたのである。

聖婦モニカは之と異なり良人が天主を認めず、長子が亂雑な行動をなすを見て、胸も張り裂くばかりに悲み痛み、如何にもして之を善き道に導かんと種々様々に心を碎き力を竭し、尙日夜天主に祈つて其恩祐を願うて居つた、そして之が數月數年ではなかつたのである。聖婦が此正しき心盡しは天主の嘉する所となり、其聖徳は某司教の感激する所となり、遂に聖人を以て「母として斯くばかり深く我子の罪を嘆き且つ祈るならば、其子は必ず永遠に亡びず」といふ金言を叫ばしめたのである。世の父母たる者は宜しく之を肥臆せねばならぬ。

あゝ人事は實に畏るべきものである。オクスチノは公教會の大聖人であるが、其父は早く之に洗禮を領け味ふべき事を知るであらう。

信者諸子よ、願くは聖婦モニカが其子女等を導きて昇天したる事に學ばんことを。善き模範や善き言は、少しも損がなく、子女の不肖なるを見れば、即ち聖婦が天主に祈り、哀求して止まなかつた事を學べ。そして斯く行ふならば先づ汝を慰めて云はん「汝が斯くばかり深く我子の罪を嘆き且つ祈るならば、其子女は必ず永遠に亡びず」と。そして其子女は不日必ず改心し、相俱に永福を享くること疑ひない。

さらば今より以後、世の父母たる者は、其子女の訓誡を守らざるを見れば、心の中に深く之を悲み痛むや否や、之を悲む餘り自ら善き模範や善き言葉を以て之が改心に盡すや否や、彼等に教理を以て導き、熱心に天主に祈つて其恩祐を乞ふや否やを能く省み、父母たる者の職務は其子の救靈を圖るにある事を絶えず

させぬのみならず、輕薄に流れ放蕩に日を送り、幾んを靈魂の大事を誤らんとして居るのも顧みなかつたのである。が、幸にも賢母があつて、其命を惜まずして之を救ひ助けたので、遂に改心したのである。聖オクスチノは天國に在つても永く母の徳に感じ、「我を世に生める者は慈母である、我を天國に生みし者も亦賢明なる慈母である」と之を謝して居るであらう。且つ又聖婦はオクスチノが洗禮を領けて間もなく此世を去つて天國に昇られたのであるが、是れ即ち聖婦が終身の大事は、只我子の靈魂を救ふことのみであつたことを明かに示すのではなからうか？、先づ九ヶ月の辛苦を嘗めて其肉身を生み、後又辛苦すること二十餘年にして其靈魂を永世に産んだのである。聖婦モニカは妻となり母となつて斯の如くであつたから、遂に天主に寵愛せられ、來世に至らぬ中に賞せられたので、乃ち生前に良人と長子とを善に向はしめ、聖婦の窘苦を移して無上の福樂と變へて下さつたのである。あゝ眞に靈

黙想し、以て天主を榮ゆべく、自己を益すべく、子女と他人とを救ふやう堅く決心せねばならぬ。

五月五日 (降生後一五〇四年生)

正親町天皇時代

聖ヒオ第五世教皇

伊太利の北部にアレキサンドリアと云ふ都があり、其近郷にボスコと云ふ村がある。降生後千五百四年に此村の某貧しき夫婦暮しの家に、一人の児が産まれた。此子はミカエルと名づけられ、貧しき中にも大切に養ひ育てられて居つた。

ミカエルは十二歳の時ドミニコ會に入つて勉強し、十七歳の時會の服を着けて隠修士となり、二十四歳の時司祭の位に陞り、命を奉じて教理の書籍を著して居つたが、其後漸々と徳望が高くなり、終にドミニコ會の會長に推され、後教皇の使命を以て各地を視察し、到る處正道を楯として邪教を禦いで居られた。

らん」と。斯する中降生後千五百六十三年教皇ヒオ第四世陛下が崩御せられたので、衆人皆此ミカエル司教を推して其位を繼がしめた。是乃ちヒオ第五世陛下で、時に年六十一であつた。

新教皇は、國土が其民を治むるが如くに公教會を統治して居られたが、其才徳は其高き位に稱うて居つたので、天主は之に福を降し賜ひ、人々は悦び服して居つた。聖人は祈を爲し黙想をせらるゝ時、度々人事を覺らぬやうな事があり、絶えず吾主の御苦難を追想して、心の底より之に感じ之を慕うて居つた。また聖祭を献ぐる時には異常の熱心が顯はれ、四旬節、待降節を始め、聖母及び使徒等の祝日の前日には必ず大齋を守られ、尙此外毎週四日間只蔬菜のみ、食して居られた。そして信者を始め外國の君民より厚き尊敬を受けて居られたが、謙遜して少しも驕り傲ぶるやうの事なく、他人に對しては溫和にして貧富の別を立てず、若し細民にして冤を雪がんことを求むる者があれば、教

時に背教者の巨魁なるルーテルが獨逸國に顯はれたので、ミカエル靈父はドミニコ會の修士に命じ、力を竭して彼等の邪説が伊太利國に流布せぬやうにと努めさせて居つた。時の教皇は此靈父の才徳を愛し、間もなく之をアレキサンドリアの大司教に任じた。ミカエル司教は高き官職に陞られたが、然し衣服器具等すべてドミニコ會の修士と全様のものを用ひ、苦業大齋等修院の中に居つた時の如くに行うて居られた。かくて數年の後又も命を奉じて羅馬に赴き、教皇の補佐となつたが、事務を執ること敏捷で、教皇の前に出ても之を敬ふが、少しも諂ふやうなことがなかつた。側者の之を見て屢々諫め、もし諫めを須かぬと、恐らく教皇が悦び給はぬやうになり、將來必ず災禍あらんと直言した者もあつた。がミカエル司教は之に應へて云ふ「何を言はるゝぞ、余は決して不都合を爲す者ではない、若し教皇が悦び給はずして我を斥けられるならば、余は修院に歸つて隠修するのみ、何の懼るゝ所あ

皇は其煩しさを厭はず、一々其曲直を明かに處斷して居られた。

聖人はルーテルの邪教が公教會内に傳はることを阻めんとて、心腹の司教と數人の修士とを遣して外國に駐らしめ、以て嚴しく之を禦がさせ、尙各地の司教靈父に諭示して、誠律を嚴しく守り、善き勸諭を以て信者を導き護り、善き言を以て訓誨すべきことを命せられた。時にスコチアの皇后マリア、スツアアは、常に聖道に從うて居られたが、英國の背教者なる太后エリザベツトが之を監禁し攻撃して居る由を聞いたので、直に親翰を贈つて厚く之を慰め、恰も昔し大迫害の起つた際信者等の行ふた如くに、皇后が暗に聖體を保存し、監禁せられながらも之を拜領することを准した。(此マリア、スツアア聖后は、其後英后の爲に遂に虐殺せられたのである)又佛蘭西の王が兵を統べて背教人を攻めた時にも、教皇は親翰を贈つて之を慶び、尙力をつくして之に助力を與へられた。

降生後千五百七十一年、土耳其の回教王は屢々戦つて屢々勝ち、自ら稱して天下に敵なしとなし、頓て軍艦を以て海を渡り、伊太利を攻め奪はんと揚言して居つた。その目的は先づ羅馬を破り、然る後兵を諸國に進めて天主公教を滅ぼさんとするにあつたから、教皇は急ぎ各國の君王と協議を開き、兵を出して敵を迎ふることを圖つた。此年十月オースタリアの太子ヨハネは、信者より成る水軍を帥ひて順風に乗じ、東に向つて進んだ。そして其月七日に希臘のレバント灣まで進むと、早や無数の土耳其軍艦が隊を組んで来たに出會ふた。太子は衆寡敵しがたしと知つたが、然し少しも畏れ騒がず、即時に隊伍を整へて前進した。此日は恰もロザリオの祝日であつたから、羅馬全市の公教信者は、孰れも皆聖堂に入つてロザリオの祈禱を誦へ聖母に我兵を保護して回教教徒に勝たしめ、以て公教を救ひ給はんことを熱心に祈り求め、教皇も亦聖殿内に跪き、只管主の聖前に哀願して居られたのである。

かくて兩軍は益々接近した。回教軍は順風を追うて飛ぶが如くに快走し來り、今や一擧にして我軍を壓殺にせんとの氣勢を示して居るが、我軍は逆風に惱まされて一擧一動意の如くならず、勝敗の數已に定まつたと思ふまもなく、不思議にも瞬く間に東西の風向が一變し、回教軍は忽にして逆風に襲はれ、兵士等面を向けることも出来ないやうになつた。太子ヨハネは此奇蹟を見て心中大に樂み歡び、主の洪恩を感謝して後、總軍を勵まし指揮して進み攻めた。兵士の勇氣も此時日頃に百倍し、各々玫瑰の念珠を頸項に掛けつゝ、或は砲を放つて戦ひ、或は手に及矛を執つて代り合ひ、大に敵軍を攻め惱ました。又此時羅馬に於ても教皇は主の默示を蒙つて、數百里を隔てながらも、今兩軍が已に戦を交へ居る事を知つたので、衆人に此事を告げ知らせ、益々熱心に祈禱をなすべき事をすゝめ、御自身も其處に平伏して主の恩祐を願うて居られた。兩軍の戦ひ酣はなること半日にして、遂に公教軍は

大勝利を得た。即ち我軍は士卒七千五百人を失ふたが、敵の死者三萬餘人に及び、尙破壊や沈没せし船八十艘にして、我軍は捕虜一萬人、船百九十隻を捕獲し、敵の奴隸となつた船の運轉に従事さされて居つた信者一萬五千人を救ひ助ける事が出来たのである。教皇は主の默示により、已に我軍の全勝を知つたので、直に全市の人民に命じて主の洪恩を感謝せしめ、且つ各國の信者にも之を報らせて主を讃美せしめ、併せて此時聖マリアの連禱中に「基督信者の扶助、我等の爲に祈り給へ」といふ一句を加へて誦ふべき事を命せられたのである。

ヒオ第五世陛下は已に數年前より病氣であつたが、其後次第に重くなり、服藥醫療も其効なく疼痛が殊に甚だしかつた。が聖人は毫も之を憂へず、いつも主の御苦像を抱きながら之を默想し讚美して居つた。そして聖き金曜日には病苦を忍んで床より出で、恭しく御苦像に向つて拜禮をして居られた。所が此日市中では

教皇が崩御せられたと誤り傳へ、數萬の衆人は宮殿前に聚り寄り、聲を揚げて大に哭き悲んで居つた。聖ヒオ教皇は斯くと聞いて大に感動せられ、自ら出で、彼等に祝福せんと望まれたので、一人の侍従が教皇を扶け、聖ペトロの聖堂内の説教臺に伴ふた。衆人は親しく之を仰ぎ見て歡喜に堪へず、萬歳を叫んで後、一同地に跪いて靜かに首を垂れた。教皇は此体を見澄し、聲朗かに祝福の祈禱を唱へられたが、遠近にかゝはらず其聲が能く聞けたさうである。

斯くて教皇は宮殿に還御せられ、衆人は亦散じ去つたが、人々は教皇の御聲を聞き、其元氣の昂り居給ひしを察し、未だ御死去にはなるまじと互に嘔き合つて居つた。教皇は其後數日を経て病氣が少しく輕快を覺ねられたので、宮殿を出て七ヶ所の大聖堂を巡拜せられたが聖ヨハネの聖堂に入られ、膝行しつゝ主耶穌御受難の階段を上られた時には、氣力弱くなり喘ぎ／＼の有様で、宮殿に還られると間もなく頓に病勢が重く

なられた。乃で教皇は終油の秘蹟を領け、終ると數人の樞機官を召し、公教會内外の事務に就いて其後事を托し、やがて雙手に恭しく主の苦像を抱き、黙想しつゝ死を待つて居られたが、遂に其日の黄昏頃いとも静かに御息を引取らせられた。時に降生後千五百七十二年、御年六十八歳であつた。

全時刻に數千里を隔つ西班牙國に居られた聖女テレシアが、天主の黙示を蒙つて聖ピオ陛下の御最後の有様を知つたので、之を同居の衆女等に知らせたさうである。又御墓に於ても其後數多の奇蹟が顯れたのである。

黙想

十字架に就て 二

吾主耶穌の懸り給ふた聖架は、松の木にて作られ、長さ凡そ一丈五尺、横木八尺、二本共其幅凡そ七寸厚さ六寸であつた。そして吾主を釘附けて後、壁に聖架

を立て真直に地下に押すこと約三尺五寸、地上より一尺二寸許の上の所に、吾主の兩足を釘附けた痕があり、夫より上七尺の所が即ち吾主の兩手を釘附けた横木で横木より以上凡そ三尺五寸の所に所謂罪標なるものが釘附られたので、其文は横書で「耶穌はナザレトの人にして猶太人の王」と。

皇太后(レナ(四月三日))は、吾主の聖架を尋ね獲て後、之を三箇に分ち、一はエルザレムに、一は羅馬に、一はコンスタンチノールの都に保存することゝなつた。越へて降生後六百餘年、波斯國の軍が羅馬國に侵入した時、エルザレム市を破り、一部の聖架を奪うて國に還つたので、君民共に大に憂ひて居つた。が夫より十四年を経て羅馬軍が波斯を伐ち、終にその聖架を取返した。其後聖架の失火に因つて、聖架は幾んど焼失せやうとしたので、エルザレムの大司教は其聖架を更に十九箇に分ち、之を著名な各地の聖堂に送つて之を恭しく保存させることゝした。蓋は一朝兵亂等

の災禍に遭つて、何地にかその一箇を失ふことがあつても、其他の聖堂の分は無事なるべしと考へたからである。

其後羅馬とコンスタンチノールの都に在つた聖十字架の一部も、更に適宜に之を分つて各地に送ることとなつた。乃で今日では八十ヶ所の聖堂に聖架の大小の片塊が保存されて居る。其中尤も大いものは羅馬に在つて、長さ凡そ二尺、幅一寸七分、厚さ三分五厘で、八十ヶ所に保存されて居る聖架の片塊を合せて見ても吾主の聖架の十分の一にも過ぎず、此外世界各國の司教司祭信者等にして、眞の聖架の一片を有つて居る者も數多あるが、其小さきものに至つては灰の如きもので、若し此等を悉く聚め量つても僅か數百匁に過ぎないものである。あゝ世々主耶穌の聖架を敬ひ愛し、大切に之を保存して居るが、歲月久しきに涉り、加ふるに幾多の災害に罹り、今日にては只纔に聖十字架の一小半を保存するのみである。

聖人等は常に絶えず吾主耶穌御受難の光景を、親しく見るが如く聞くが如くに黙想して、精神上大いなる益を得たのである。されば我等も今より以後此聖十字架の略歴を能く辨へ、常に自ら主の御苦難を視、親しく之を聴くが如き熱心を以て之を黙想し、之を追念するやうに爲ねばならぬ。(未完(六日に續く))

五月六日

(降生後一四二一年生)

稱光 天皇時代

福者ジャンマルク童貞

最も纖弱き少女の身を以て、祖國の危急を救ひし彼の有名な福者ジャンマルクは、降生後千四百十二年の一月六日、佛蘭西國ローレン州のドノレミーといふ小邑に於て生れたのである。貧しき農夫の娘で、眼に一寸の文字もないが、幼き時より敬神の心厚く、常に信仰深き母の教訓に従つて祈禱善業を爲し、彌撒に與り黙想を努め、特に初聖體拜領後は必ず毎週聖體を領け

主の御苦難御死去に就て思念を寄せて居つた。そして日々質朴と柔和の性を發揮し、或は父に従うて牧場に往き羊の看守を爲し、或は母を助けて裁縫とか糸紡などの業をなし、無邪氣なる田舎娘となつて清く安らかに日を送つて居つた。

所が彼女が十三歳の春であつた。四旬節の一日曜日、例の如く彌撒に與り聖體を領け、やがて聖堂を出でんとする時、奇妙にも天上より聲がして「ジャンマルクよ、汝赴つて帝王を救ひ、佛蘭西を其手に恢復せよ」と云ふ、ジャンマルクは駭き怪みながら「私は何して左様の事が出来ませうぞ」と云ふと、再び天上より聲がして、天に在す御父は汝を助け給はん」と。此天上の聲は即ち佛國の守護者なる大天使聖ミカエルであつた。其後此大天使は屢々ジャンに顯はれ、聖女カタリナ、聖女マルガリタも亦度々ジャンに現はれて其都度彼女を指して「神の女」と呼び、自分等に倣うて童貞を守れよと諭して其つたのである。

英軍も必死となつて戦ひ、七ヶ月の間互に奮戦して居つた。が勝誇つた英軍の鋭き攻撃に、佛軍も終に力盡き、眞に孤城落日の慘な様となり、到底恢復の見込もなく此上は唯主の恩祐を求むるより外に道がないので佛國氏は老幼貴賤の別なく、皆一心に祈願を籠めて天祐を祈つて居つた。所が此危急存亡の際に當り、世にも不思議の妙手があつて、突如として單身身を起し、この敗殘の佛國を滅亡の淵より救ふたのである。妙手とは何者であらうぞ！そは纖弱き田舎娘なるジャンマルクであつた。

彼女は屢々大天使の顯はれによつて、自分の使命が佛國を累卵の危ふきより救ふのであることを知つたが其時には何分にも十三歳の少女で、寒村僻地に育ち、弓取る業も馬に跨る術も知らず、唯祖國の危急を聞いて小さき心にも愛國の念を燃しつゝ、只管天主に之を救ひ給はんことを祈つて居つたのみで、到底自分が手を下して之を救ふ等といふことは思ひも寄らず、天來

當時佛蘭西國は彼の有名な百年戦争とて、永く英國と戦ひを交へて居つたが、漸々敗北を重ね、國は亂れ土地は荒れ、其大部分は英王ヘンリー第五世の所領となり、佛國の領土は僅かに西南の一隅に限られ、而も其領土さへ旦夕に迫つて今は早や滅亡の日を待つの外なき場合となつて居つた。

國王チャール第七世は、先例に依りレイムに於て戴冠式を行ふ事も出来ず、哀れにも退いてロワール河の南、ブルゴニといふ地に隠れて居られた。然るに母公イサポを始め佛國の攝政たるベッドフォールド等英王の爲に謀り、勢に乗じて佛國全土を占領せんと、大軍を率ゐてロワール河の畔なるオルレアン城を取圍んだのである。此オルレアン城は佛軍唯一の根據地、若し此城が敵の手に陥るならば、佛國の運命もそれまでである。故にどうしても此城を枕に討死するか、さもなくば千載の恨をのんで城下の盟をなすか、孰れか其一を選ばねばならぬやうになるので、佛軍は素より

の聲を聞くたびに夢か現かの如く全く五里霧中に迷ふて居つたのである。そして此事に就ては一切沈黙を守り、父母にも告げ知らさず居つた。かくして三年の月日は過ぎ去つた。其間ジャンは度々天來の聲を耳にし、その小さき胸の中に右左躊躇して居つたが、又も「乙女ジャンよ、汝は邑を去つて佛蘭西を救へ、神の哀憐は佛國に下れり」といふ默示を得たので、最早猶豫すべき時期ではないと深く決心し、燃ゆるが如き信頼心を以て主の攝理に委ね、其地の奉行なるボードリクールの許に行つて「妾は佛國の王を救はんが爲めに今日出發するから、何卒軍兵を借し賜はれ」と云ふた。奉行は之を聞いてジャンを發狂者と見做し、其叔父に命じてジャンの頬を撃たせ「早く家に連れ歸れ」と叱つた。之は尤もの事で、僅か十六才の少女が國王の難を救ふなぞとは誰しも信ずることが出来ない。ジャンは己を得ず叔父と共に一先づ家に歸つたが、其確信は少しも動かす、人々より狂と罵られ

痴愚と嘲られても頓着せず、却てますます信念が燃え、勇氣が増し、女徳が顯はれ、遂には邑の人々をしてジャンの使命を信せしめ、奉行をして其出發を許さしめるやうになつたのである。

此時幸にも二人の武士は彼女と偕に往かんことを請ひ、村民は馬具と乗馬とを贈り、奉行は一振の劍と一隊の兵とを興へたので、ジャンは大に歡び、女徳を傷つけん事を恐れて身を男の如くに装ひ、いよく佛國救済の大使命を果たさんと出發した。時は降生後千四百二十九年二月三日で、ジャンはこの日を以て身命を國家の爲に捧げんことを天主に誓ひ、全時に其貞操をも主に献げたのである。

かくてジャンは故郷を後にし、天來の聲の導くまゝにオルレアン指して馳けること十一日、早くも百五十里の道を踏んでギエンといふ地に到いた。彼はこゝより人を遣はして太子の許に送り「少女はオルレアンより英人を撃ち退け、太子をしてレイムに導き奉り、其

地に於て即位式を擧げさせ奉らんが爲め、天の命を受けて來た者である」旨を傳へさせた。近侍の者等日夜額を鳩めて謀議を凝らして居る際であつたので、半信半疑の裡にジャンを招き、彼が果して天來の使命を帯べる者なるや否やを查べんと、先づ一人の侍臣を假の太子に装はせ、太子は平服をつけて近侍と居並び、一同は威儀を正して居る處へ導いた。然しジャンは恰も多年宮中に奉仕して居る者の如くに、少しも作法を違へずして敬禮をなし、直に變装して居られる太子の前に跪いて「殿下よ、天主は殿下に大なる祝福を降し給ふ」と述べ、太子を始め並居る一同が驚きと怪異の念に打たれて居る上、彼女は續いて己が使命を告げ、尚太子に一の祕密を告げたのである。それで太子も獨り深き信念を置めて天主に祈り、此少女を天來の使者と目するやうになつた。

然し彼女が使命を萬人の前に立證することが困難であつて、侍臣の中にも、ジャンを以て或は發狂者とな

し、或は魔法遣ひなりと云ひ、衆議紛々として決する事が出来ないので、遂にボアチエ大學の博士數名と、一三の司教に依頼して之が眞偽を試むることとなつた。博士等は彼に向つて「汝は神より遣はされたりと云ふも、全能なる神には兵士を要し給はぬではないか」と問ふと彼は答へて「神は吾に、往きて救へと命じ給ふ、戦ひは兵士なれども勝利を興へ給ふ者は神である」と。尚司教博士等の前に於ても、自分はオルレア

ンを救ひ、太子をしてレイムに即位式を行はせるの使命を帯びたる者なることを告げ、今後英國兵は全く佛國以外に驅逐さるべき旨をも豫言した。司教博士等もジャンの正直と質朴と其言行の天來的なるに心動かされ、徳操高く、熱誠厚く、而も彼女の博學にして名將も及ばぬ智謀あるに驚嘆し、遂に彼女の使命を信するやうになつた。

斯くする中に何時しか一ヶ月も経つて、オルレアンは益々急を告げ、落城が旦夕に迫つて來た。乃でジャン

ンは自ら請うて一隊の指揮者となり、若干の軍屬と糧食とを興へられ、太子より賜ひし眞白の甲冑を纏ひ、自ら作りし旌旗(此旌旗は白絹にして上部に救世主が雲に乗じ、左右の天使が白百合の花を捧げ居るを祝し給ふの圖を書き、其下に耶穌、マリアの聖名が記されてある。そして此旌旗は今日現にオルレアン府に保存され、毎年ジャンが凱旋の紀念日に行はるゝ祭式に掲げ出されて居る)を手にし、昨日の田舎娘が、今日馬上に跨り威風堂々として一部隊を率ひ、オルレアン指して進軍した。

途中彼は郊野に於て彌撒を拜し聖體を領け、ロツル河の流れに沿うて進み、遂に千四百二十九年四月二十九日、勇ましくオルレアン城中に入つた。其時の市民や兵士の歡喜は如何ばかりであつたであらうぞ!、彼等は喜び泣いて之を迎へ、熱き信頼と感謝とを以て天主を讚美した。ジャンは勢に乗じて直に英軍を攻め神出鬼没の如き動作を以て所々の要塞を取戻し遂に五

月八日に至つて英軍を全く潰走させ、オルレアンを窮地より救ふたのである。此時ジャンの年は纔に十七歳五ヶ月であつた。

此戦争中彼は一日最も大切な要塞を攻撃中、自ら其城壁の下より攀ち登つて居つた所が、敵の矢にて胸部を射られ、其場に絶息して地上に眞逆様に倒れ落ちた。やがて正氣に歸りしとき自分の血の痕を見て涙を流して居つたが、聖女カタリナが現はれて之を慰め勵ましたので、彼女は勃々として勇氣が起り、自ら矢を抜き、又戦ひを續けたのであつた。寔に彼女は戦場以外に於ては粗朴な田舎娘であるが、一度彼の白絹の旗を捧げて陣頭に起つたときには、唯一念天來の大使命を果さんとの深き信念と、何事をも犠牲にせんとの觀念とを以て戦ふたので、英雄も及ばぬ立派な功績を樹てたのである。其容貌と眼眸には犯すことの出来ない威嚴と温愛とが湛はられてゐるので、見る者悉く尊敬と崇拜の念が禁せず、知らず識らず彼女に服従して

居つたのである。彼女はまた何事をか爲さんとする時には、先づ天主の尊前に平伏し、聖慮を伺うて後其恩祐を乞ひ、戦ひの最中は勿論、片時も天主に對する信頼を念頭より離さなかつたのである。向また彼女は清潔潔白にして全情の念深く、三軍を指揮して戦場に向ふも、白絹の旗旗を手にする外、劍を閃かし、血を流したることなく、屢々戦死者の上に涙を垂れて「佛蘭西人の血を見る毎に、覺ゆる我髮の毛が逆立つ」と云ひ、敵の負傷者を治療しながら泣き、殊に彼等の靈魂の永遠の亡びを見て大に悲み、常に部下の兵士に向つて「告解をせよ、聖體を領けよ」と勧め、臨終に迫つて居る者には、司祭をして終油の秘蹟を授くるやう願うて居つた。要するに彼はかく獅子の如く猛く雄々しく、一面また羊の如く温和して熱情深く、加ふるに其崇高き性格と、烈火の如く燃ゆる信仰とを以て事に當つたので、稀世の大使命を遂げ得たのも當然である。女傑ヤンマルクは、斯して重圍の中よりオルレア

クルダンヤ者福



ヲを救ひ重なる城砦をも取戻したので、佛人は始めて
ジャンダルクの使命を認め、神の力に因るとを信じ、英
人は魔法によつて敗られたと悔んで居つた。ジャンは
尙も進んで、太子をしてレイムに於て即位式を擧げさ
せんが爲、破竹の勢ひを以て英國軍を撃ち退け、瞬く間
に八十里の間に横たはつて居る都市を悉く占領した。
乃で太子は一萬二千の精兵を率ゐて無事レイムに着し
直に司教より祝福を受け、人々の歡び叫ぶ裡に目出度
即位式を擧げ、シャルル第七世として王冠を戴かれた
のである。時は千四百廿九年七月十七日であつた。此
日ジャンも彼の名譽ある白絹の旗旗を手にして式に參
列し、親しく王の膝下に伏して其足に接吻し、感慨の
餘り嬉し涙に咽んだ。そして式が終つて後、彼女は王
に請願して、「自分は最早天主の使命を全ふし、茲に王
の即位式を見ました。此上は速に我家に歸り、前の如
く羊を牧うて日を送らん」との希望を述べたが、王は
彼女の功績を徳とし、佛軍に取りては一萬の兵よりも

貴き價値ある者とし、其願を容れなかつた。其時ジャン
は王に奏上して「私も現世に生存するのは今後僅に
一年許りであるから、王にして若し英國と戦を交へん
どの思召なれば、願くは我生命のある間に於てせらる
べし」と豫言した、が果して其豫言が事實となつて現
はれて來た。

この絶代の功績を樹てしジャンダルクも、月に雲霧
花に嵐の譬にもれず、彼女が謙遜し卑下し、美德を行
ふ程ますます、嫉妬者が多くなり、進むも退くも唯天主
より外、地上一切のもの一つとして彼に慰めを與ふる
者がなく、其後は一兵卒となつて王に隨うて居つた。
が國を憂ふるの念が止まず、四方よりジャンの救助を
求め來るので、遂に千四百三十年、再び彼の白絹の旗
旗を五月の風に翻へし、コンヒエン城に向つて進軍し
た。彼女は其途中、身は捕虜となつて火刑に處せられ
るといふ默示を天より受けたが、少しも落膽失望せず、
萬事を天主の攝理に委ね、唯一身を犠牲として國に獻

げんどの外何物をも顧みず、コンピエン城に着いて後、雲霞の如く寄せ来る英軍と戦ひ、必死の勇を振うて之を撃ち退けんと努めたが、如何した機会か城の門扉は忽ち鎖され、唯一人マヤンダルクのみ城外に取残され、遂に淺猿しくも捕虜の身となつて、敵の手に監禁されるやうになつた。

が幽閉されて居る間も味方の安否が氣に懸り、今一度此處を逃れ出で、コンピエンを救はんものと、一日六丈餘の高き窓より身を現はし、細き草紐に縋つて地上に降りやうとしたが、不幸にも中途にして其頼みの綱が断れ、數丈の高さより墜落し、纔に一命を取止めたのみで、再び監禁され、遂に一萬磅の代價を以て全く英人の手に渡り、其年の十一月の末ルアンといふ地に護送されたのである。

かくて乙女マヤンダルクは、鐵窓の下に繋がれ、あらゆる苦問と拷問を受け、一ヶ月餘り病苦に悩み、翌年一月の十日より五月の末まで、或は茫然、或は秘言も的中し千四百三十六年に至つて英兵は悉くパリ市より逐出されたのである。

判官等は遂に無法にも、雪よりも潔き此乙女の上に彼は魔法道なり、彼は迷信的の豫言をなせり、彼は男装し、彼は神の名を濫用して神を潰せるものなりと言し、竟に火灸の刑に處すべき旨の宣告を與へた。之を聞いたマヤンは已に我身の運命の斯くあるべしと期して居つたので、神の聖旨をかしこみ、怨みも憎みも悲みもなく、靜に其宣告を受けた。

降生後千四百三十一年五月三十日、愈々刑を執行せらるゝ日となつた。マヤンは告白と聖體の兩秘蹟を領けて後、車に封じられ數百の兵士に衛られて刑場に向つた。民衆はマヤンの最後を見んとて道の兩側に牆をなし、刑場は人を以て埋れて居る、がいづれも悲痛の色が現れ、水を打つたる如く寂として居る。彼女は刑場に着くと先づ跪いて天主に祈り、人に赦す如く己

密に審問を受けること十六回、此時の記録によれば、「彼女は僅かに十九歳の田舎娘とは思はれざる程の賢明と、崇高き精神とを發揮し、法廷は彼を目して偽の豫言者、魔法道、妄言者となさんとて様々に工夫を凝らしたが、彼の辯明は正確にして一絲も紊れなかつた」と。

判官等は如何にもして此聖女を罪人となさんと努め法學、神學の大博士等七十四人を陪席させて種々と訊問した。彼等は試みにマヤンに向つて「汝は神の聖寵を蒙り居る者と自ら信するか」と、曰く「我れ若し之を蒙り居らずとせば、天主之を與へ給はん事を、若しまた其責を蒙り居るとせば、天主之を保たしめ給はん事を」と。又「大天使ミカエルが度々汝に現はれしといふが、其時彼は衣を着け居りしか」と問ふと、答へて云ふ「神は彼に衣を被せ得ぬと思ふか」と。又問ふ「神は英人を惡むか」と「神が英人を愛するか否かは、私の知る所ではない、が今より七ヶ年を経たぬ中、英

の罪をも赦されんことを願ひ、自分を焼き盡す爲にとて高く積重ねてある薪の許に起つた。スルと宣告文は朗讀された。

やがて彼女は火灸臺に登り、肌身離さず携へて居つた小さき十字架を手に執つて接吻した。其時一人の修士が近くの聖堂より行列用の大きな十字架を持つて來たのを見て、彼女は「死の門に至るまで」絶えず目の前に之を眺め得るやうにと願ふた。其中に火は既に薪につけられ、紅の焔は次第に彼女の足を嘗め始めた時、聲を上げて「聖ミカエルよ！、御身が我に告げ給ひし聲は我を欺かず、我が使命は天主の使命であつた」と叫び、炎々たる猛火は聖女の全身に及びたる頃、一段高き聲にて「耶穌！耶穌！マリアよ！」と叫び、最後に「耶穌！」と叫び、其清く健氣なる靈魂は再び還らぬ神の御國を指して飛び去つたのである。時に十九歳六ヶ月であつた。耶穌！マリア！と叫んだ其聲は、實にマヤンが凱旋の叫びで、彼女は此聖名の力

によつて總てのものに打克ち、遂に永遠の勝利の冠を得られたのである。此女傑の最後を見た人々は敵味方の區別なく「今日一人の聖女が焼かれた」と云はぬ者がなかつた。そして其全身は焼き盡され、刑吏等其遺骨と灰とをセーヌ河に流し棄てた。

が以來四百五十年、人變り物移つたがシャマダルクの名聲は永遠不朽にして、彼女の愛國の熱情と、烈しい犠牲の精神と、敬虔にして潔白なる徳行とは、世の婦女子の模範と仰がれるやうになり、彼女に關する著述、肖像、繪畫の類は其數實に夥しく、約六千餘種の多きに上り、其他演劇、詩歌等數ふるに遑がない程多數で、我邦に於ても既に雜誌に單行本に彼女の悲壯にして波瀾に富める生涯を寫し、其偉大なる功績を賞讃して居る。

千四百五十六年七月、時の法皇カリクスト第三世はレイムに於て、委員を選び、曩にルアンに於てなせる判決を破棄してジャンダルクの爲に冤を雪ぎ、千九百

架の形像を主耶穌の旗號として敬び愛するのである、各國の軍隊には皆旗あり、出陣して敵と戦ふ場合には、兵士等必ず其旗を圍んで力戦し、旗進めば進み、旗退けば退くのである。公教信者も亦之と全しく現世に在るは恰も戰場に臨める如き覺悟で、主耶穌を以て將帥となし、十字架を以て旗として居る。それで奉教の地には、處々に此十字架があり、市町村落、人家稠密の地には必ず高き塔上に十字架のある一大家屋がある。是は天主の聖堂にして、此十字架を以て明かに其地の人々の天主を敬び信じて居る者の有ることを示すのである。又田舎を歩いても時々墓地等に、或は石、或は木、或は鐵にて作られたる大きな十字架があるが、信者等其前に行つた時には、男子は帽を脱ぎ女子は跪き、各々十字の聖號をして敬禮するのである。又信者の家に入つて見ると、壁か柱に必ず十字架が懸けられてあつて、男女老幼が祈禱を爲す時には先づ必ず此十字架に向つて跪くのである。是れ其十字架

九年四月日オ第十世教皇は、精密の調査を命じて後、彼女に天堂の福者なる尊號を諡つたので、彼女の徳行は益々輝き、世界數億の公教信者に仰ぎ慕はれるやうになつたのである。

* * * * *

默想

十字架に就て 三

「福なるかな聖き十字架よ、爾は吾の獨り望む所のものなり」と。(聖歌)

或人問うて曰ふには、公教會にては世々聖十字架を以て最も貴き聖物となし。信者等救世主の死を追念し、敬愛仰慕せざるはなし。これは自然の理にして別に説明を作り、居常之を敬ふに至つては其意を解する能はずと。

答へて云ふ、主耶穌は實に十字架上の死を以て、萬民の靈魂を救ひ給ふたのであるから、公教會は其十字架に靈性あるが爲に敬ひ跪くのではなく、十字架は主耶穌の旗號であるから、敬愛を發する所の情が、たゞ十字架の形像に止まらずして、救世主たる其御者に對して注がれるのである。

且つ十字架は、唯主耶穌の旗號たるのみならず、猶また天主が奇蹟を顯し給ふの器として用ひ給ふものであるから、信者等は専ら之に望みを屬するのである。往古イスラエルの民が、モイセスに従うて天主の許し給へる地に到つた事がある。其時衆人が路に難むことがあつて、天主を怨み、怒りの言語を放つた所が、天主は彼等の罪を罰するため、無数の毒蛇を放つて、イスラエル人の屯營に入り、人を傷つけしめ給ふたので、彼等毒蛇に傷つけられし者は、いづれも大に痛み苦み身を焼かるゝ思ひをして死んだのである。乃でイスラエル人等太く痛悔して恩赦を求めると、天主はモイセスに命じて銅の蛇を鑄らしめ、之を高き柱の上に懸けさせられた。それで毒蛇に傷つけられし者が、此銅製

の蛇を視ると忽にして癒ゆ、其後モイゼスは傷を受けたる者をして目に此銅製の蛇を視せしめると、疼痛が即座に止んで生命を救はれたと云ふ。

天主が此毒蛇を放たれたのは、魔鬼が罪惡を以て人を傷つけ害し、之を永遠の死に投入れるものなることを像られ、銅製の蛇が高き柱に懸けられたのは、主耶穌が十字架に懸り給ふたことを表したものである。それで之を信じ従ふ者は能く罪を免かれ、永遠の死を避けて天國の福樂を享くるのである。又十字架を表する意は、信者が之を見て用心し、救世主の慘死を追想して罪を悔ひ、聖愛を起して靈魂に受けたる傷が癒さるるを獲、魔鬼は之を見てカルワリヨ山の失敗を念ひ、驚き畏れて人を害するの力が無くなることを示すので、信者は家に十字架を掛け、身に十字架を帯び、額に十字架を畫くは、恰も兵士の武裝したるに比ぶべく、以て戰場に臨んで能く敵を禦ぎ、重傷を免かることを得るのである。

降生後三百十一年、我仁徳天皇の御即位の頃、羅馬皇帝は嚴しく公教を迫害し、多數の信者を殺戮して居つた。時にコンスタンチヌス王は佛蘭西の兵を率ゐて之を攻めた。然し皇帝の兵は其數多く、王の兵が寡ないので、恐らく勝算がないであらうと心配して居つた。

此コンスタンチヌス王は、聖婦エレナの子で、其時未だ公教を奉じて居らなかつたが、然し質性純良にして正義を好み、異教人が信者を害することを准さなかつた。乃で天主は奇蹟を顯して之を助け給ふの思召があつた。即ち某日王が兵を率ゐる羅馬に向つて進んで居つた所が、忽ち空中高く大なる十字形が、日の光りよりも強く耀き照り、其下に火の如き形で「汝此旗を以てすれば必ず勝つ」と記されてあつた。そして全夜復た十字形の光が顯はれ、吾王耶穌其側に在つて、コンスタンチヌス王をして此の如き旗號を造るやうにとの默示を與へられたので、王は大に歡び勇んで直に其命に従ひ、金の布を以て略ぼ十字に似たる一大旗を造り、其

縁に寶石を嵌め、之を田軍中の名將五十人をして堅く守らせた。所が其後王の軍は百戰百勝の勢ひで、遂に惡帝を攻め滅ぼし、後公教を信奉して明君となり、世世稱讃せらるゝやうになつたのである。此事は最も確實で疑ふことが出来ぬ。即ち天主が十字架を用ひて奇蹟を顯し給ふことを明かに示されたものであるから、信者は飽迄も之に對して最も深く敬愛の誠を盡さねばならぬ。

あゝ信者等よ、我等は此世に在つて日夜魔鬼を敵として戦ひつゝあり、而も魔鬼の力強くして我等の方が弱い。然し主耶穌は十字架を指し、我等を勵して仰せられるには「汝此旗を以てせば必ず勝たん」と。勉めよや信者等、汝等コンスタンチヌス王が主の命に従ふた事を學び倣ひ、敵と戦ふ時に當つて、十字の聖號を汝の前に置けば必ず勝つことが出来る。汝家に在る時も戸外に出づる時も、常に之を放さず之に従ふ、旗號となすならば、善き情が必ず生じ、惡き意が必ず退いて

大事確に成就せん。又聖十字架を愛すれば、世間の浮きたる榮や、暫しの福を輕じて罪を避くるを得、尙主耶穌を眷戀して天國を仰ぎ慕ひ、而も膽力益々強くなり、銳氣愈々生じ、容易に仇敵を敗り得るやうになる。また世事の順境の時に十字架を愛すれば、邪惡の樂みを逃れて恒に善き志を守るやうになり、之を世事の逆境の時に愛すれば、心に迷ひ悶へ、失望するやうな事がなく、此十字架を平素憂ひの時も喜びの日にも愛するならば、臨終の際に當つて一層深く之を愛するやうになる。

其時聖十字架は汝の爲に日夜の好き伴侶となるのである。即ち之を看れば愉快の情が起り、之を抱けば大なる慰藉を得、十字架に向つて汝が心の苦悶を訴ふれば、密やかなる聲が汝の心の中に響くであらう。是れ十字架其ものが聲を發するのではなく、十字架に釘附けられたる聖主の感應の聲である。

信者等よ、我等は現世に在りて身を勞し心を苦め、

惟死去を待つのみである。されば平素臨終の憂ひと、其時家財や親友と別るゝの愁ひを思ひ、毎日十字架を愛し慕ふの情を起しつゝ、次の如くに叫べ。

「福なるかな聖き十字架よ、汝は吾の獨り望み靠る所のものである。十字架よ、願くは汝、世の萬物が我を離るゝの時に我を伴ひ給へ。我は慈悲深き主耶穌を見るが如くに汝を見、救世主が柔和の御聲を以て我の希望を喚起し給ふを聞くが如くに汝に聽かん。あゝ十字架よ、汝は天主の愛する所にして罪人のかり托む所である。天主聖子は汝を抱いて致命し、天國の門を開き給ふた。冀くは我汝を抱いて死し、主に従うて天に昇らんことを。

あゝ十字架よ、世の終に當つて日月は熄み、星辰光りなく、獨り汝のみ主耶穌は旗號となりて空中に照り輝き、先んじて救世主の天降りて善惡を審判かんことを報ず、其時善人は汝を見るや踊躍して歡び樂み、悪人は汝を見るや驚き呆れて號び哭かん。あゝ

十字架よ、我は堪へざれども、願くは御惠を蒙りて主の右に立ちながら、汝が普く地上を照し給ふを見んことを。あゝ十字架よ、汝は常に世の人々の爲に輕んじられ、悪人の爲に忌み嫌はる、されど世の終りに於て、汝はいとも貴き姿を以て顯はれ、汝の光榮は彰揚せらる。汝を愛する者は喜び、汝を恨む者は苦み、汝に従ふ者は生き、汝に背く者は亡びん。惟願くは汝を愛すること眞の實の如くにし、汝に従ふこと賢き師の如くにし、永遠天國に在りて汝の光輝を望み見、世々永遠に汝の死し給へる愛主を讃め頌へしめ給はんことを。亞孟(完)

五月七日(降生後一〇三〇年生)

白河天皇時代

聖スタニスラオ司教殉教

降生後一千年、ポロニア國にヴェリスタスと云ふ大將があつた。數世名ある人の後裔で、其妻も亦良家の

女であつた。家計饒富なる上、君に仕へて忠に、人に對して愛が深かつたので人々の評判が宜かつた、が三十年も永く連添うて居るが一人の小兒も無いので、日頃天主に祈つて兒女の授かるやうにと願うて居つた。ところが千三十年に至つて一子が生まれた。是が即ち聖スタニスラオで、父母の歡び限りなく、大切に養ひ育てつゝ、日々主の恩惠を感謝して居つた。

儲このスタニスラオは幼き頃より遊び戯るゝことを好まず、暑さ寒さにも小言を云はず、飲食を節し、饑渴をも能く忍んで居つた、そして日中は祈禱黙想に勤め夜間眠つた時でも若し眼覺めた時には、直に寢床より下りて祈り、或は板の上に臥したまふ夜を明かすこともあつた。父母は早くも此感すべき行爲を見て、將來此子は世間の富貴を慕はず、萬事をすてゝ天主に歸依するといふことを知つた。

又彼は幼き時より讀書を好み、十五歳の時巴里市の大學院に入つたが、七年の間に學問に精通し、德行優

れ、名望が高くなつた。そして二十二歳の時家に歸つたが、其時は一箇の好青年にして、其言行正しく義を好み、兩親をして其心目を悦ばしめ樂ましめて居つた。然し世俗的の樂みは長くなく、翌年兩親は相次いで此世を去つたので、スタニスラオは喪を果たして後、家財を賣拂うて悉く之を貧民に施與し、其身は巴里市の司教に從ひ、續いて品級の祕蹟を領けて司祭となり、四十二歳の時遂に司教に陞られた。

スタニスラオ司教は、其後徳を積むこと倍々多く、自ら嚴しき苦業を爲しつゝ、貧民を救ひ窮民を助けて居られたので、其徳望は愈々顯はれて来た。時にポロニア國王は、天主を認めて聖教に從ひ居るとは云へ、其素行は異教人にも劣り、暴虐にして邪慾を好み惡を肆にして憚る所がなかつた。そこで臣下の者等打揃ひ、司教に之を諫めて貴はんことを願ふた。因て聖人は祈禱大齋を爲して後王に見せ、其行ひを改め善表を立て、臣民に悦服させるやうにと勸め諫めた所が國王は勃然

として大に怒り、直に内殿に入つて出す、以来聖人を深く恨み悪み、隙を見て之を害せんと謀つて居つた。茲に奸臣某なる者があつて國王と心を協せ、共に聖人を苦めんと日々其事を謀つて居つた。一日奸臣が國王に向ひ「日前司教が某所の土地を購求め、其代價は既に拂ふたが、唯仲介人の周旋したのみで未だ領收證を受取つてないさうである。そして今や其賣主なるペトロは死し、其姪と孫とが遺産を相続して居るさうであるから、陛下は此時に乘じ、人を以て其姪と孫とを教唆して、司教が死者の所有地を奪ひ取つたを誣ひさせ、全時に一方に於ても其時の證人を威嚇し、法廷に偽證させたならば如何であらうか、斯くすれば司教は如何ともすることが出來ず、遂に名譽を失ひ信用が落ち、自然陛下の御恨みを雪ぐこととなる」と言葉巧みに説き勧めた。

國王は是を聞いて大に歎び、直に其計略に取掛からせ、數日後ペトロの孫等に此訴訟を提起させた。司教

は之を聞いて大に驚いたが、然し土地賣買に就ては證人もあることであるから、其證人が一言事實を陳べて呉れるならば、是非曲直が立所に判明すると思つて居つた、所が其證人は法廷に於て眞實を陳べず、曖昧な言葉を以て司教の爲に不利なる證言をしたので、司教は是には何か仔細のあることであらうと察し、暫し黙然として居つたが、頓て判事に向ひ「三日の内に確たる證人を出して辯明をするから、何卒此事の曲直に就ては今暫く猶豫を願ひたい。若し其證人を信するに足らずとせば、其時我は買求めた土地を其相續者に返還しやう」と述べて判事の同意を得た。然し國王と奸臣等は之を聞いて、謀事が圖に當つたと喜び「三日の内証據を出すといふが、縱令三年経つとも出す事が出来るものか」と嘲り笑つて居つた。

聖スタニスラオ司教は、三日の猶豫を乞うて後、靈父や信者輩に事の由を告げて、主の尊前に祈らんとてを依頼し、自分も祈禱苦業大奮をして主の恩祐を願ひ

三日目の朝ミサ聖祭が終ると、司教は短き白衣を着け領帯を掛け、權帽を戴き、手に牧杖を握り、衆多の靈父を率ゐて聖堂より出で、徒歩のまゝ墓地に向つて行かれた。信者等も亦司教等が何の爲に斯ることを爲られるのであらうかと、不審に想ひながら列を爲しつゝ跟從うて行つた。やがて墓地に着くと、司教は彼の土地の賣主なるペトロの墓前に進み、其墓を開かせて後主耶穌の聖名を唱へながら、死者に向つて「復活せよ」と命じた。所が奇妙にも死者は、急に身を起して墓より出で、司教は更に、是より全行して法廷に行かんことを命ずると、死者は首肯きつ、司教に從うて行つた。信者等此体を見、愕然として驚きつゝ後より跟いて行つた。また此事が早くも市中に知れ渡つたから、許多の人々は吾もくど駈けて來、爲に往來も出來ぬ迄に群々と集り、死者が死人の裝束のまま歩んで居る姿を見て、孰れも驚きの目を見張らぬはなく、法廷に入れば已に大小の官吏が居並び待受けて居つた。

愚くて死者は法廷に入り、裁判官の面前に立つた。司教は手に牧杖を執り、威儀正しく其側に立ち、死者を指しながら判事に向ひ「此者は即ち土地を我に賣渡したるペトロにして、市民の多くは此者を知つて居る今日天主の奇蹟を蒙つて復活し、墓より出で、此處に來たのである。就ては土地買上代を拂はざりしか否やを訊問ありたし」と、裁判官は心の中に大に驚き、良久語も出なかつたが、漸くにして「死者よ、右の事件を詳細に述べよ」と訊ねた。此時滿堂の人々は片唾を呑んで靜かに耳を傾けた。やがて死者は朗かな聲を以て徐々と説き出し「土地は我れ甘んじて賣りたるに相違なく、其代價は司教より悉く支拂はれ、我は之を不足なく領收したのである。そして此賣買については、始めより二人の證人があつて能く之を知つて居る」と云ひ、更に頭を轉じて姪と孫とに向ひ「汝等兩人は司教が代價を支拂はれた事を能く知つて居るのではないか。然るに何故良心にも羞ぢずして此不義不正の訴訟を起

したるか、其罪最も重ければ、痛悔して之を補償ふべし」と責めた。

前代未聞の此不思議な證人の立證により、裁判官は判断を下すまでもなく、原告たる姪と孫とは深く恐れ入つて頻に謝罪をなし、偽證人は満面に愧色を顯し、この体でコソコソと法廷を去り、此一件は却て司教の爲に大なる利益となつて落着いたのである。

其時司教は衆人の面前に於て死者に向ひ「汝は此儘復活して尙數年の間此世に在らんことを願ふならば、我天主に其允諾を求むるが如何にや」と尋ねた所が、死者は之に應へて「私は主の御哀憐を蒙つて今煉獄に居りますが、再び其儘世に出で、暫しの安樂を願ふも宜いが、若し大罪に陥つて地獄に下さるゝよりも、寧ろ矢張煉獄に於て苦罰を受け、補償を爲し、永福を享くる方が遙に優つて居る。それ故司教よ、希くは我が爲に天主に轉達ぎ、一日も早く煉獄の補償を果して天国に昇るやうに計ひ給はんことを」と云ひ了つて、靜

に法廷を出で、元來し路を踏んで墓地に行くので、司教を始め衆多の人々は之を送りつゝ共に墓地に着くと死者は其儘墓の内に入り、身を臥して動かぬやうになり、近づき看ると元の如く早や全く死人となつて居つた。

流石の國王も、此聖き奇蹟を聞いて心動き、一時改心して善に立歸つて居つたが、一二年の後またもや悪心が萌し、終に以前よりも甚しい放肆の舉動をなすやうになつた。司教は之を見て大に悲み、屢々諫め説いたが、國王は之を聴かぬばかりでなく、却て怒り恨み尚も司教を害せんとした。乃で司教も最早改心の見込なしと斷念し、聖堂に入つて秘蹟を領くることを差止めた。

國王は之を聞いて益々怒り、某日司教が市外の聖ミカエルの聖堂に於て彌撒を行ふ由を知つたので、密に兵士數十名を遣はして全所に往かしめ、司教を殺害せよと命じた。兵士等王の命により聖堂に亂入すると、纏めにするど、奇妙にも寸多くに斬り放された聖屍が元の如く人の形となつたので、靈父等は恭しく埋葬の禮を行はれた。

多くの信者等此体を見て、急ぎ司教に逃げ去らんことを勧めたが、司教は祭壇の前に端坐して動かぬ。兵士等兇器を執つて進み、アハヤ司教を刺殺さんとする刹那、忽ち強き光が發して司教を取圍んだので、兵士等一時一齊に其處に仆れ、やがてコソコソと一人去り二人去り、遂に悉く逃げ歸つた。國王は之を聞いて益々怒り、兵士の意氣地なきを責め、今度は自ら、聖堂に行つて祭壇に近づき、双手に長き劍を執り、司教の背後より力を極めて其頭を斬つたので、何かは堪るべき聖人は頭破た腦砕け、終に其場に於て絶命せられた。

斯くて國王は、尙も聖人の屍體を寸斷し、野獸の餌にさせんとて之を荒野に棄てさせた。其時四羽の大鷹が何處よりか飛び来て其聖屍を守り、何物も之に近づけさせなかつた。そして夜間になると其聖屍より強き光を發し、遠くまでも照して居つた。三日の後數人の靈父が密に其聖屍を他に持運び、寸斷された部分を一

後教皇グレゴリオ第七世陛下は此事を聞かれ、ボロニア國の君民に聖事に與ることを禁じた。また市民等の中には、非道なる國王を憎み、良民を害せるを痛く罵り、四方に義軍が起つて國王に背いた。流石の國王も外には人民の怒に觸れ、内には良心の呵責に惱まれ、朝夕安き心もないので、遂に自ら宮殿を出で、國境を去り、羅馬に向つて行つた。這是親しく教皇の前に行つて罪を悔い、其赦宥を求めん爲めであつたのである。然し途次深く前非を悔い、償罪の爲に餘生を獻げんと決心し、某夜從者にも告げず、獨り密かにオースタリアのオツシアに往つて、其處の修道院に入り、自分も姓名も明かさずして使用人となつた。そして此院で七ヶ年の間、飯焚を爲し、土堀を爲し、水汲み掃除等の卑しき業を勵んで居つた。院内の修道士等は、其

容貌動作を見て、此人は普通の者でないぞ知つたが、すべて秘密にして居る其情緒を察し、強て之を問はず陰ながら之を敬ひ愛して居つた。かくて七年の後、國王は病氣に罹り、次第に重くなつて、逆も全快せぬといふことを悟つたので、告解を爲し、聖體を領け、終油の秘蹟を領けて後、長上の人に枕邊に來られんことを乞ひ、始めて其名を明かに告げ知らせ、頓て靜かに此世を去つた。修道士等は此大なる奇事を見聞して彼の爲に祈り、其屍体を聖堂内に埋葬したが、其墳墓は今日も尙保存されてある。是れ全く天主が此國王の切實なる痛悔を嘉みせられ、其罪を赦して善き最後を遂げさせ給ふたのである。

黙想

善き牧者

「善き牧者は羊の爲に命を捨つ」(ヨハネ一)と。吾主耶穌は乃ち善き牧者の頭目で、天下萬民の靈魂を

羊と爲し、自ら命を捨て、之を救ひ給ふのである。且つ主の救ひ給ふ者は、只善人の靈魂のみならず、罪人の靈魂も亦其御恩恵に浴するのである。往古主が十字架に釘附けられし時、悪人等を憐み聖父天主に向ひ哀み號んで「父よ、彼等は其爲す所を知らざる者なれば之を赦し給へ」(ルカ二三)と仰せられ、尙甘んじて仇敵の罪を赦し、全身の血を傾け盡して之を永遠の苦罰より救ひ給ふたのである。それ故聖父天主も之を允さるを得ず、遂に彼等の中の數人は、痛悔して善を行ひ芽出度天國の福樂を享け得るやうになつたのである。今日公教會の司教司祭は、主耶穌に代つて靈魂の牧者となり、信者を羊となし、聖道を守り力を竭して其靈を養ひ、一朝危きに遇へば、生命をも捨て、之を顧みるものであるから、之を善き牧者と謂ふべき者である。そして主耶穌より以來、萬國萬代に互つて善き牧者は數限りなく、之が爲に公教會は日に月に進歩發展し、常に邪教に打勝ちつゝ世界の隅々にまでも行はれ

るやうになつたのである。

今日の聖スタニスラオ司教も、實に善き牧者であつた。彼は平素我身の安否をも顧みずして、唯信者の靈魂の益のみを圖つて居つた。そして國王は信者の頭であるから、靈魂の牧者たる司教は特に之を愛して居つた。が其國王は漸々と放縱に陥り、邪慾を肆にし、下人民の靈魂肉身に、少からぬ害を與へるやうになつたので、聖人は之を見るに忍びず、深く心を痛めつゝ之を諫めたのである。所が國王は却て之を怒り、淺猿しくも聖人を害せんとした。が聖人は毫も懼れず、尙再三再四諫めるので、國王も遂に之を殺害した。聖人は甘んじて其性命を主に獻ぐる時、主耶穌の祈り給ひし如く「聖父よ、彼等は其爲す所を知らざる者なれば、之を赦し給へ」と祈り、刃の下に脆きながら、實に怨根を懐かぬばかりでなく、反つて天主に向ひ、君を救ひ民を護らんことを懇請せられたのであつた。聖書にも、聖人の祈禱は天に通すと。善き牧者なる

スタニスラオ司教の殉教せられたる後、暴逆の王は國境より逃れ奔つて、人民は平安を得るやうになり、國王は國を失ひしも其心を改めて善道に進むやうになつた。是れ皆善き牧者の祈禱殉教の結果で、善を以て惡を贖ひ、愛を以て仇に謝し、善き牧者は羊の爲に命を捨つ」といふ主の聖言を成し遂げたのである。

又國王は其後七年間も長く修院に隠れて卑しき勤務を爲し、而も謙遜、忍耐して其罪を痛悔したのである。人々は之を視て輕んじ賤しむであらうが、天主の裏前にては、却て昔日の地位よりも遙に貴く優れた者となり、幸にも善き臨終を得、永遠の福樂を享くるの身となつたのである。彼が天に昇るの日、天主に見えて特恩を謝した後、聖スタニスラオに向つて、必ずかく感謝したであらう。即ち「我は昔し君王の位に在りし時には、常に罪を犯して其心實に卑しき者であつた。が幸にも卿は善く我を導き、尙ほ我が殺害の惡に報復せざるばかりでなく、反つて卿の慈悲深き心を以て我

の救はれんことを祈られたのである。我は司教の此大恩は永世忘るゝこと能はず云々」と。

あ、許多の世の善牧者は、常に信者が誠命を守らな
いのを見て、何れも皆な心を痛め主の御前に哀願せざ
る者がない。然るに信者等、或は全く之を知らず、或
は知るも、之を知らざるもの、如くに装うて居る者が
あるのは實に遺憾である。主の赦罪を蒙つて天に昇る
死者の靈魂の中には、生前幾多の惡を改め善に立歸つ
た者もあるが、是れ皆善き牧者が聖祭を献げ、祈禱を
せらるゝの結果で、昇天後此等の事實はすべて明瞭と
なり、茲に始めて皆其恩に感じ、永遠に之を感謝する
やうになるのである。

仍で我等信者は今日以後、靈魂上の牧者なる司教司
祭に對しては、忠實に其命に従ひ、身を慎み、行を善
くして心を痛ましめず、常に此善牧者が我等の靈魂の
爲に聖祭を献げ、祈禱を唱へ、以て之を救ひ助くるに努
めて居らるゝ事を深く感謝するやうに爲ねばならぬ。

此不思議に怖れて皆山を下つた。そして家に歸つて斯
くと主人に委細語り告げた所が、主人も并ば尋常事
はないと思ひ、直様司教の許に往つて之を物語つた。
司教も其奇異に感じ、數多の信者をして三日の間齋
を守り、主の黙示を蒙るやう懇ろに祈り求めさせた。

斯して第三日目に至ると、大天使聖ミカエルが司教
に顯はれ「牛の藏れて居る巖洞は、乃ち我の看守して
居る地である。天主は汝に聖堂を造らせ、彼所に在る
衆くの天使を敬禮すべきを命じ給ふ」と告げた。司教
は斯くと聞いて早速所屬の靈父信者を率ゐて山に上り
彼の巖洞に到り見ると、件の牛は已に洞内より出で、
外に在つた。因て司教は巖洞に入つて檢べ見ると、洞
内は高く深く、恰も聖堂に似た形状をして居るので、
禮を行ひ之を祝して主に献げ、其内に入つて彌撒を献
ぐることを靈父に命じた。

其後此巖洞に一の聖堂を建て、特に聖ミカエルと衆
天使とを敬ひ、主の尊前に轉達を求めて居つた。以來

大天使聖ミカエルの發顯
降生後四百九十二年、伊太利國のシ、リア州なるシ
ーポルト市の近在に、一富豪があつた。先祖代々富裕
にして多くの園や山林を有ち、多勢の雇人を召使うて
牧畜を業として居つた。

某日の事一頭の雄牛が行衛不明となつたので、雇人
等驚き騒いで所々方々を探し索ねたが、更に踪跡が分
らなかつた。然し數日の後アルシャヤ山の巖洞に於て、
其雄牛が眠り隠れて居るのを發見したので、雇人等駈
附け之を外に曳出さんとしたが、其時牛は己に野獸の
性となつて人に慣れず、少しも動かさないで、一人の
牧者は心を燥ち、弓を取り矢を番うて之を射た。箭が
飛んで狙ひ違はず牛に中つた、と思ふと忽ち其矢は彈
ね返り來て、矢を放ち、牧者を傷つけた。多くの牧者
等驚き懼れて、誰一人再び矢を放つ者もなく、何れも

四方より信者の來拜する者引きも切らず、時々天主は
奇蹟を顯し給うて、聖ミカエルと衆天使が奉教人を保
護し、且其轉達の靈効あることを明かに示され給ふた
のである。

福者ベルナルドは葡萄牙國に生れ、二十餘歳の時よ
りドミニコ會に入つて修道して居られた。天性純良
にして善徳を好み、實に信仰厚き方であつた。數年の
後會長より聖堂の内務を掌るべき事を命ぜられ、夜
夜として怠りなく勤められたので、凡そ聖公會の儀式
に關することは大小となく通曉して居つた。

また此修院には修士の司祭が多いので、毎日早朝よ
り、十餘歳の兒童等數名が、近村より通ひ來て彌撒香
へを爲し、彌撒が了るとベルナルド靈父は此等の兒童

を集めて讀書を授け、教理を學ばせて居つた。其兒童の中に氣質の善き二少年があつて、十餘歳ではあるが、恰も三才か五才の幼兒の如く無邪氣で、愛すべき者であつた。毎日修院に来る時には、片手に書物を抱へ片手に辨當箱を提げ、正午學科が了つて後、家に歸らず、別室に入つて兩人共肩を並べて復習し、或は食事をなし、或は嬉々として笑ひ語つて居つた。それで數ヶ月の後には、此兩人の少年は嘗に人々に愛せられるばかりでなく、天主も亦彼等の純善を愛し、深く之を慈み給ふたのである。

此二少年が復習する室に、幼き耶穌を抱いて居られる聖母の大きな木像があつた。二少年は食事の際には、毎々必ず先づ此御像に向つて恭しく帽を擧げ、聖號をなして祈禱を爲し、食事を了つて後、亦全しく感謝の祈禱をして居つた。

某日の正午、學科の教授を受けたつて後、此室に入り、例の如く帽子を擧げ聖像に向つて祈禱をして居つた。

御像を見ると、幼き耶穌は早や聖母の懷に抱かれ、今しがた見まわらせし御姿と毫も異つて居らなかつた。

翌日の正午にも、二少年は例の如く稽古が了つて食事を爲さうとする時、幼き耶穌は復た其處に來られて、共に食事を爲し、種々の物語を爲さるゝ等、前日の通りで、それより數日の間引續いた。二少年は始め此事を誰にも語らなかつたが、竟にベルナルド師に向つて、逐一事實を物語つた。老師は素より二少年の誠實なるを知つて居るので、心中に毫も之を疑はず、二少年に向つて益々熱心に主を愛し、且つ主の洪恩を感謝すべきことを勧め、尙又深く想ひ考へて後、尙し幼き耶穌が再び現はれ給ふ事があれば、汝等斯く求めて云へ、乃ち「慈愛深き主が斯く私共と食事を爲し給はること、此上もなき難有き事ながら、願くは私共の老師とも與にお食事を爲し給はらんことを」と。二少年は之を承諾して去つた。

其頃は主耶穌御昇天の祝日前であつた。翌日幼き耶穌

耶穌は又も二少年に現はれ給うて、例の如く俱に食事を爲され、終つて後別辭を告げて去らうとし給ふ時、二少年は直様老師の命令通り、一語も漏らさず申上げる。幼き耶穌は微笑みながら、「それは尤もの事である。我は汝等兩人と老師とを、昇天の祝日に我家の宴席に招くべし」と宣ひ、其まゝ見ぬやうになつた。

二少年は斯くと聞いて大に喜び、直様此事を老師に告げると、ベルナルド師は心の中に「二少年の語は眞實で、少しも疑ふ所がない、御昇天の祝日には必ず何か異つた事があるに相違ない」と想ひ、密に心を盡して其準備をして居つた。

其うちに愈々御昇天の祝日が來た。ベルナルド師は修院長に今迄の一伍一什を告げて、朝早くより聖堂に入り、彼の二少年も此日は特に衣服を改めて待ち構へながら想ふやう、今日こそ老師に従うて主耶穌の御家に往き、御馳走に與るのだ。何よりも歡ばしい事である」と喜んで居つた。やがて老師は祭服を着け、祭壇

に上つて彌撒聖祭を献げるので、二少年は之が輔祭を勤めたが、其時修院長は、此三人の容貌は平日と異り如何にも幸福に充たされて居ることを覺り知つた。かくて彌撒が終ると、老師は祭服を脱いで香臺の前に跪き、二少年も亦其側に跪いた。其時此師弟三人の顔は神々しく光り輝き、喜ばし氣に天上を仰いで居る狀、如何にも奇妙の様で、良久しても三人とも少しも動かないので、修院長は近づいてベルナルド靈父の名を呼んだが、靈父を始め二少年とも何の返詞もしないので、修院長は怪みながら傍に寄り、能く見ると、三人とも早や死して身體が冷たうなつて居つた。これは師弟三人が主に招かれ、主の宴席即ち天國の福樂を享けに往つたのであつた。

修院長は此不思議の出來事を見て大に驚き感じ、直様修士等に之を告げた。ヌルと修士等もまた之を他の者等に傳へたから、我もくと四方より集り來て之を見た。三人は死して後數時間を経ても、其精神の樂し

腹を覺ゆることがあるのであらう。さすれば天國には憂も悲みもなしとは決して云ふ事が出來ぬと思ふ者もあるであらう。

然し、聖人の肉身が復活し、天國に於て永く天主の榮福を享くる時、果して世の常の如く飲食を用ゆる事があるか否かに就ては、聖人等は未だ曾て明言せられた事がない。聖書には吾主耶穌基督が御復活の後、使徒等と共に飲食せられた事を載せてあるから、聖人が復活して後飲食することなしとも説くことが出來ぬ。それかといふて、復活して後の人身には、死も痛みもなきことを能く辨ふれば、聖人等は天國に於て饑渴に迫り、飲食を取るといふ事が絶対にない。要するに天國は萬善萬福の全く備つて居る所で、靈魂を悦び樂ませる奇異あり、肉身を歡ばせ樂ませる花卉草木もあるであらう。それで聖人等は或は其樹の葉を取り、或は其花の汁を吸ふかも知れぬ。がそれは口渴き腹饑ゑて飲食するのではなく、世の人々が間食の樂をなす如きも

さは明々とその面に顯はれ居り、見る者皆大に感動して、涙ながらに主に感謝した。そして數日の後禮を厚ふして之を墓に葬つた。時に降生後千二百六十五年五月八日で、其後墳墓に葬つた聖骨を聖堂内に遷し、全時に一の銅像を其處に建て、此奇蹟を紀念することゝなつた。

默想

天國の食卓に就て

吾主耶穌人々に訓へて宜はく、「我父の我に備へ給ひし如く、我も汝等の爲に國を備へんとす、是汝等をして、我國に於て我食卓に飲食せしめ、又高座に坐してイフラエルの十二族を審判せしめん爲なり(二九、三〇)」

或者の中には福音書の此處を讀んで、聖人等天に昇つて後にも猶ほ此世にて飲食を用ゆるが如く、時に空

のであらう。

又吾主耶穌が使徒等と共に、天國の宴席に就くことを許されたといふ意を不審に想ふ者もある。が聖書には、人を訓ふるに時々人事を假に用ゆる事がある。即ち天國の福樂を説く爲に、此世の福樂を以て比べ、善人が天國に於て福樂を享け、少しの憂ひ悲みのなき事を表し示す爲に、此世間に於て時々催される宴席の樂しさを假用したので、吾主耶穌が使徒に教へ給ふ金言の意も之に外ならず、此金言は、言を換へて云へば、未來の富貴福樂は世間に行はるゝ最上の好き宴席に於ける樂みよりも遙かに優るといふ意味である。

尚又吾主耶穌は、二少年の純樸なる性行を愛し、特に身を顯はし食事を共にし給ふと云ふことは、聖き奇蹟であつて、吾主が果して眞に食事をなし給ひしか、或は食事をなすが如くに装うて實際に食し給はなかつたのか、之は敢て深く穿鑿するの要もなく、且つ之を論定する事が出來ないのである。が只二少年が其老師

と僧に招かれて、主耶穌の宴席に列したといふ一事は、昔日耶穌が使徒等に訓へ給へる御言葉と全しく、吾主が老師と二少年の善き德行とを賞し、三人を天國に請じて永福を與へられたといふ事である。而も老師は此事を明かに知つて善終の準備をなし、惟天主の限りなき榮樂を望んで居つた。二少年も亦心を一にして効き耶穌の聖言を念ひ、其身の死するとも想はずして惟身を清め服を改め、主の宴席に待つて歸らんことを望んで居つた。そして三人共死して天國に昇るの恩恵を蒙り、老師は豫期の如く満足した。二少年は或は其儘天に居るといふ望みでなかつたかも知れぬが、然し主と偕に席に列なつて天上の美味に酔ひ、天使聖人等と共に永遠の福樂を享け、主耶穌に隨ひ、聖母に隨うて窮りなき歡樂に満たされる様得も云はれず、是を望外の幸福として感謝せざるを得ないであらう。

之に由つて吾等信者は、常に此二少年の純善に倣ひ心を清くし力を竭して誠律を守り、吾主の聖心を悦ば

せるやうに努むるならば、必ず主の聖愛を蒙り、天國の宴席に請じ招いて下さるであらう。若しも此世の虚しき歡樂をも慕ふの心が起るならば、寧ろ進んで天上に於て受くる永遠無窮にして最上の富貴榮福を享けんと心懸け、之が準備に努むるやうに爲ねばならぬ。

五月九日 (降生後三二七年生)

仁徳天皇時代

ナリアンズの聖グレゴリオ司教博士

降生後二百二十七年、羅馬の東なるシリア國ナリアンズの太守に、有名なグレゴリオといふ人があつた。人と爲り清廉潔白にして義を好み、夫人ノナも柔和にして才徳備はり、上は天主を愛し、祈禱善業をなすことを樂みとし、下貧民を愛し、之に訓へ施與をなすことを厭はず、良人に仕へて柔順に、家政を操ること巧みであつた。此年一子を生んで、其名をグレゴリオと命づけ、續いてセザリオと云ふ子を擧げ、ゴルゴニア

と云ふ女を産んだ。此三人の兒女は幼き時より能く父母に事へ、書を読み善を行ひ、相愛し相依りつ、常に祈禱をなし互に好き念を通して仲睦じかつた。其中に二人の子が十五六才になつたので、父親はグレゴリオをセザン市に居らしめ、セザリオをアレキサンドリアに住はせ、有名な教師に就いて學問を勵むべきことを命じた。(此一家族五人は何れも皆聖人となつたのである。)

兄のグレゴリオは特に聰明にして善を好み、讀書の傍ら力を竭して徳を修めて居つた。丁度其頃セザン市の名家の子弟にパオリオと云ふ者があつた。六月十四日、此人も亦明敏にして善徳厚く、グレゴリオとは年紀も全しく學識も等しかつたので、二人共に親しく交際し、俱共に心を合せ力を協せて學を研ぎ徳を積んで居つた。また此年ナリアンズの司教が死去せられたので、グレゴリオの父親は衆人に推され、老体にもかゝはらず、妻と別居して、竟に同市の司教となつた。

此時代アテナネ市は、此セザン市よりも其文物の程度が遙かに優れ、學識高き者が多く集つて居つたので、グレゴリオは三年の後パシリオに別れ、獨り飄然として船上に上り、アテナネ市に行つた。見ると果して全地の文學がセザン市よりも旺盛にして、數千の學生は、朝夕に文を練り辯を揮ひ、天文地理音楽等の教授を受けつゝ、各々其才能を發揮して居つた。が惜しいことには其學生の多くは品行修まらず、狂亂の舉動を爲し、其徳風は其文物の盛んなるに伴うて居らない。グレゴリオは早くも此點を看破り、一面熱心に講義に耳を傾け、身を碎いて勉學しつゝ、一面彼等の素行修まらざるを惡み、つとめて之を避けて居つた。

數ヶ月の後パオリオも亦此地に遊學することとなつた。二人は大に喜び合ひ、直に一家を借受けて同棲することとなり、讀むには卓を共にし、食事には席を同じ、互に言行を端正にし、粗食に甘んじ、共に市中を遊歩しながら、貧しき者を勞り慰め、之に衣食を施

與すことを樂みとして居つた。グレゴリオの著書の中にも、自分に善き友と偕に善業を行ふたといふ概略を述べた一節に、我等二人のみ只兩筋の街道を識つて居る。其一條は聖堂に入つて聖事に與り聖道を學ぶこと、其二條は塾に入つて世の學問を勵むことである。彼の劇場等の在る街に往く事は、我等絶てなさず、唯一心に聖徳を習ふを以て志とし、主耶穌の眞の弟子と成るを目的として居つた。是は乃ち我等二人の幸福にして亦二人の榮光として居つた所である。

時にコンスタンチノポリの王子ユリアノも亦アテネに留學して居つた。表面より見れば王子でもあり公教信者でもあるが、然し心邪惡にして傲慢であつた。グレゴリオは其學動を見て早くも其陰險なるを知り、ユリアノを指して、彼は國を害する妖孽である云ひ、勉めて之を避けて居つた。果して其通りで數年の後皇帝が崩御せられ、ユリアノが位を繼いだるが、グレゴリオの云ひし如く公教に背き、甚しく人を害した

のである。(日參照)

さてグレゴリオはバチリオと偕に、三年間一心に學徳を研いて居つたが、其中に聲名が遠く傳はり、人々は皆此二人の才學博く友情篤きを稱賛して居つた。そして二年の後二人は、詩賦、算數、音樂、辯舌等の學を卒へ、更に實地に就て研鑽し、何れも其淵奥を極めたので、全市を去つて各々故郷に歸らんとした。所が市の有志の者等之を開き、今暫く此市に留まつて講師を務められたしと懇々依頼するので、グレゴリオは強ひて之を斷るわけにも行かず、一二年ばかり講師を勤むることとなり、バチリオを送つて海邊に行き、互に手を執り、涙を流して別れ、バチリオはセザレに向つて歸り、グレゴリオは心樂ますして留まつた。

斯くてグレゴリオは獨りアテネ市に留まり、數百の學生に算數、辯舌、詩賦の學を教授して居つた。が絶えず寂しみを感じて樂まず、久しく留まるに忍びぬやうになつたので三年の後、父の年老いたるに口託け、業を開き、益々名聲を擧げつゝ人を利し己を益して居つた。又グレゴリオは父親の許に居つて洗禮を領け、其後父親の司教を輔けて内外の事務を執り、日夕天主を愛して善事を行ふことを樂み、如何なる苦楚にも耐へ忍びつゝ、祈禱苦業黙想を勵で居つた。

故郷に歸つて親しく孝養を盡さねばならぬ義務あればと云うて、永年交を結んだ師友や學生に別辭を告げ全市を去つてコンスタンチノポリの都に到つた。所が恰も好く弟のセザリオがアレキサンドリアから來て居つたのに出逢つた。其時セザリオは文筆辯舌等兄に及ばないが、學びし所の醫術に於ては弱年ではあるが、當時の名醫も及ばぬ手腕を持つて居つた。それで皇帝も其才を認め、大典醫として採用し、宮中及び皇族方の診察治療を托すこととなつた。がグレゴリオは、兄弟が斯く都に獨居しては、惡を避け徳を修めがたきを恐れ、弟にも勸めて共に故郷に歸らんことを圖つた所が、セザリオも實にもと思つて兄の勸めに従ひ、遂に官を辭し、兄に隨つて家に歸つた。

時に父親は猶ほナヴァンズの司教を勤め居り、母親は別居し、心靜かに善徳を積み居り、妹のオルオニアは某名家に嫁ぎ、力を竭して母親の善行を效うて居つた。それでセザリオも家に歸つて後は、市中に於て醫

ぬので、グレゴリオは「卿等は何人にして、又何の用向があつて此室に來たか」と尋ねた所が、二人は涼しき聲にて「吾は賢徳なり」と云ひ、他の女は「吾は貞徳なり」と云ひ、次に異口同音にて「天主は我等二人を汝の許に遣はし給ひしにより、終身汝の側を離れず」と述べたり、全時に其姿を攝消して了ふた。グレゴリオは之を聞いて大に喜び、其後此二天使の相貌は

深く心の中に刻まれ、絶えず之を追念しつゝ、天主に感謝し、益々私慾に克たんと努め、毎日の飲食もわづかに麵包と鹽と水とのみを用ひて居つた。

廿九歳の頃、世を避けて修道士たらんと望み、時にバツリオはアルメニアに於て隠修士となつて居る由を聞いたので、父の許可を得て故郷を去り、友人バツリオの許に往つた。二人は相見て歡喜の涙を流し、良久言葉も出なかつたが、やがてグレゴリオは己が意中を語り、共にまた同棲することとなつた。其友情は以前アテネ市に居つた時と少しも變る所なく、互に相慰め勵まし、苦業大齋を爲して罪惡を避け、聖詠を歌うて天主を讚美し、詩を賦し、教理を研究しつゝ、身は窮屈に、住居は粗末ではあるが、心の中にはいつも歡び樂みが満ちて居つた。

それより二年許にして、父親なるナヴァンズの司教は年老い、獨力にて内外の事務を處理することがむづかしくなつたので、特使をグレゴリオの許に遣はし、

厳しき審判を受けねばならぬ。故に自分は自ら才徳の足らざるを知り、其職を奉ずるの意志がなかつたのであるが、最早秘蹟を領けし以上、將來必ず力を竭して其職を守る覺悟である云々」と述べた。

當時シユリアノ皇帝は明かに背教し、臣民に訓示して祖先傳來の偶像教を復興させることとなつた。未だ天主を認識めざる者等は大に喜び、以前の如き迫害の根が萌し、漸々日を経るに従うて聖教を亂し始めたので、公教會は餘程困難の有様となつた。其上アタナスヲオ司教(五月二日)も幾んど殺害されんとしたので、暫く任地アレキサンドリアを離れて他に避難した。グレゴリオは事の危きを見て、一方人をしてバツリオに來り援助けんことを求め、同心協力して内外の敵を禦ぎ、又一方都に居る弟セザリオに書翰を送つて、背教不義なる皇帝に事へ居るを厳しく責め、尙皇帝が全國の學生に、異教の書物や公教を迫害するの詩歌を誦ひ讀む事を命じたので、グレゴリオは、奉教人の少年

國に歸つて輔佐をせよと命じ、全時に皇帝ヲユリアノよりも、特に使臣を遣はして、グレゴリオ兄弟共に都に歸ることを勧め、厚く爵祿を與ふべき旨を告げた。グレゴリオは此兩使を受けても固く辭して歸らず、弟のセザリオのみ故郷を離れて朝廷に入り、皇帝の爲に重く用ゐられたのである。

後ナヴァンズの司教は、グレゴリオの才徳高きを知り、之に命じて司祭の位に就かしめんとした。がグレゴリオは、靈父の職たる、聖祭を獻げ告解を聽き、信者を訓誨する等太だ重き責任あるものなればとて、品級の祿を領くることを望まなかつた。然し司教はグレゴリオに命じて聖堂に入らしめ、即時に品級の祿を授けて之を司祭とした。グレゴリオは心の中に大に畏れ、式が終ると無言のまま、聖堂を出で、五十日間他に隠れて居つたが、誰も其行衛を知る者がなかつた。所が御復活の大祝日になると、忽然として聖堂に入り、彌撒を獻げて説教を爲し、司祭の職分は重く大にして

子弟が之に惑はされて信仰を危うせんことを恐れ、心を單めて晝夜詩を作り書を著し、以て之に對抗した。所が各地方の老幼は先を争うてグレゴリオの書を読み深く之を慕うて信徳を保つこととなつた。其中に弟のセザリオも兄の勧めに従うて國に歸り、兄を助けて善事を行ふやうになり、バツリオも亦グレゴリオと共に筆に口に、到る所異教を駁し公教を説くなど百事心を用ひて働いたので、信者も漸くにして安きを得たのである。

其翌年ヲユリアノ皇帝は流れ矢に中つて死し、其後太平の御代となつた。スルと弟のセザリオは又も都に往つて宮廷に仕ふる身となり、新帝の寵愛を得て厚き爵祿を受けて居つた。グレゴリオは之を悦ばず、頻りに弟に勸めて、世間の榮福を棄て、専ら天主に事へよと云うて居つたが、セザリオは之に従ふ意がなかつた所が此年大地震が起り、數多の人家は破壊し、數多の人々は之が爲に生命を失ひ、セザリオも爲に重傷を負

ふたので、遂に官を去つてナジアンズに歸り、以後其地に留つて罪の補償をなし、善徳を積み祈禱を勵み、身を終るまで熱心に主に事へて居つた。

降生後三百七十年に、セザレの大司教が世を去つたので、各地の司教等はパヨリオを推して其跡を繼がさせた。そして二年の後サマノス市の司教が死なつたので、今度はパヨリオがグレゴリオを推して其補缺とした。が異教人等之を妨害したので、グレゴリオはナジアンズに留まり副司教の職を勤めて居つた。數ヶ月の後父親の司教も亦死去したので、グレゴリオは深く之を憂ひ悲み、續いてまた母親も病氣に罹つたので、其枕邊に於て甲斐なくしく慰め、充分に醫療に手を盡したが、遂にまた歸らぬ人となつた。

愾く後人々はグレゴリオをして父の位を繼がしめ大司教となさんことを望んだが、グレゴリオは斷じて其望みに従はず、市を去つて隱修すること五六年、降生後三百七十九年、セザレ市の大司教聖パヨリオも亦

此世を去り、妹のゴルゴニアも此時に死したので、グレゴリオは多年の友情を憶うて悲哀に堪へず、日毎夜毎に胸を傷めて居つたが、遂に一書を著して友なるパヨリオ聖人の才學を稱賛した。此書を読んだ者は何れも皆二聖人の濃かな友情を羨み、其人と爲りを學び、その文筆の秀でたるに感嘆して居つた。

時にパレンス皇帝は「アリュウス」の異端に信從して、太く公教信者を忌み嫌うて居つた。それでコンスタンチノーブルの都では、公教が大に迫められ、正道を踐む者が日々に減り行き、全市の聖堂は大部分背教者の所領となつて、信者は之を如何ともすることが出来なかつた。乃で竟に人をグレゴリオの許に遣はし、早く來て此難を救はんことを求めた。依てグレゴリオは直に船にて都に上り、親戚の家に假寓して朝夕異教を攻撃し、數日の後其假寓を改めて聖堂となし、之を復活堂と名づけた。そは信徳を此都に復活するといふ意味であつた。背教人等々がグレゴリオの説に従うて、

邪を棄て聖教を奉ずる者が多くなるのを見、如何にもして此事を妨げんと欲し、種々惡辣の手段を以て之を苦め、潜かに匪徒をして聖人の住居を取圍ましめ、危害を加へんとした。が聖人は毫も之を畏懼せず、又其難を避けやうともせざるばかりでなく、聖道を聽く者日に月に増加し、聖人の才徳を愛慕する者ますます多く、遠近風を聞いて來り従ふ者が絶えず、聖イエロニモも亦シリアより此都に來てグレゴリオに面會し、聖書聖傳に就ての難問質疑を尋ねて居つた。其時のイエロニモの書信の中にも、グレゴリオの博學にして教理に明かなる、世に肩を駢ぶる者がないことまで稱賛してあつた。さればグレゴリオは、己が聲名の日々に旺んにして、輒もすれば善徳を破り驕傲の念の生せんことを恐れ、以來益々謙遜卑下して祈禱に勉めて居つた。天主は尙も聖人の功績を高めんと、絶えず惡魔をして聖人の心を誘惑させたので、聖人も一層身を苦め、心身を盡して誘惑の敵と戰うて居られたのである。

越えて二年、パレンス皇帝は聖イザーク修道者の諫言を用ひずして出陣し、遂に陣中に於て無慘の燒死をした(廿七日)。そして明君聖テオドシアは其跡を繼いで帝位に陞られ(十二月)熱心の信仰を以て天主に事へ、國を愛し、民を愛し、尙公教會の隆盛を圖らんが爲め、暴威を逞しうして居つた背教の司教を召し「汝久しく邪教に従うて居るが、今日より改心して聖道に立歸れば可し、さもなければ直に本市を去つて再び來たることを許さず」と嚴命した。頑固なる彼は尙其謬見を改めず、皇帝の命のまゝ他の地方に赴いたので、皇帝は更に命を下し、今迄背教者が使用し居りし各所の聖堂を取戻して、之を悉くグレゴリオに與へて其統治を委かせた。それで信者等大に喜び、皇恩の恭なきを感謝し、グレゴリオ聖人の徳を稱して止まなかつた。

かくて數ヶ月の後、各地の司教數十名集り來て、グレゴリオを推して首都の大司教と爲さんとした。聖人は早く世務をすて、隱修し、善終の準備をなしたき希

望であつたが、如何にせん皇帝を始め、司教信者等皆心を一にして勤め乞ふので、止むなく決心して一時任に就き、大司教の聖職に陞られた。所が背教人等かくと見て心面白からず、終に無頼の徒を語らうて聖人を殺害せんとした。即ち一日一人の悪漢が密に司教の書齋に忍び入り、機を窺うて將に害を加へんとした。所が其悪漢が聖人に近づくと思議にも忽ち心が變り、双膝を地に跪つかせ、自分が此室に來たのは全く聖人を殺さんが爲めであつたことを告げ、涙を流して其赦免を求めたのである。聖人は之を聞いて言葉を和らげ、彼を慰めながら速に正道に立歸るべき旨を諭し勧めた。それで彼の悪漢も眞實の痛悔をなして立派に改心し、誠意より聖人の勧めに従ふやうになつた。

願を聴容れず、再三再四之を思ひ止ませやうとしたが、司教の決心は却々に堅く、到底之を翻へすことが出来ないど知つて終に其願を准された。信者等斯くと聞いて大に心を痛め、尙も種々運動したが其効なく、聖人は直様司教靈父等に別辭を告げ、船にてナシアマに歸つた。

かくて其後十年間郷里に於て、小さき別荘に隠居しつゝ、書を著して教理を説き、苦業大齋祈禱默想到餘生を送り、遂に降生後三百八十九年、御年六十二歳の春病氣に罹つて善き終を遂げられたのである。此聖人の才徳は今に及ぶまで其聞は高く、世を去られて已に千五百餘年にもなるが、今日も尙聖人の著書を読んで敬服し、之を師として従ふ者が多いのである。

默想

良き友を擇むべ
聖書にも「良き友を得る者は眞に福なり」と。

昔時西洋の風俗として、戦場に赴く青年將校は各自皆一人の友を擇び求め、共に告解をなし聖體を領けて後、天主の尊前に出で、相結び、軍中に在つて兄弟たることを約し、戦場に往つて後は互に相提携して危き場合にも離れず、勝てば共に喜び、敗れば共に死すといふ習慣があつた。之を死生を共にするの良き友と稱し、此良き友を得る者は、眞の福なるものであつた。凡そ人各々此世に在るの間は、其靈魂は日々世間と悪魔と私慾と敵とし、之と血戦しつゝ聖徳を保たねばならぬ。若し幸にして良き友の助力を得んならば、此困難な敵に打勝つことが最も容易のである。一人共に心を合せて天主に向ひ、力を協せて善を爲し、一人は愛ふるも一人は樂みて相慰め、一人は疑惑起るも一人は能く悟り居りて信仰を堅め、窄き天國の路を歩むにも、難所ある地に到れば俱に手を引いて相扶け、壯年者は樂みを共にし、老人等は愛ひを共にする、是を靈魂上の良き友と謂ふので、此良き友を得る者は、實に

福なる者ではなからうか。世間の中兎角聖徳を保ち難き者は學生である。殊に十餘歳にして家郷を離れ、獨り都會に留學し居る者等が、慾情が内に起り、邪惡が外より攻め誘うて來た時には、縱令惡を避け善を爲すの意思があつても、之と戦ふことが實に困難で、斯かる場合に良き友があるならば、必ず惡き道に陥らずして安きを得、之と共に心を合せて書を読み文を作り、意を合せて善き行をなすやうになるのである。そして偶々惡魔が來て内外より誘ひ惑はすども、二人が力を協せて之を禦ぐの便があり、而も此二人が逆境の時に順境の時にも互に慰め勵ましつゝ離るゝことがなければ、學問も進み善徳も厚くなり、居常安心立命の地位を得るのである。あゝ是れ眞に福なる者ではなからうか？

聖グレゴリオと聖パトリオとは、眞に好一對の良き友で、智識も德行も等しく、才學が並んで共に進み、二人とも竟に聖會の干城となり、大聖人となられたの

である。人幼年の時、若し此の如き友情を結ぶことが出来なかつたならば、恐らく何人も獨力で善行を爲すことが出来ず、大事も遂ぐる能はず、榮名を後世に垂れることが能はないであらう。グレゴリオとてもパトリオがなかつたならば、パトリオにしてもグレゴリオがなかつたならば、恐らく共に聖グレゴリオとなり、聖パトリオと仰がる、やうなことがなく、其才學は後世を益するに至らず、其德行も萬代に範を垂れるやうなことがなかつたに相違ない。

特に我日本の青年學生諸子の爲に勸む、諸子は右二聖人の友情に倣ひ、互に相勵まし合うて學徳を積み、心を協せて世上の富貴財寶を輕視し、傲慢邪慾を警めつゝ力を竭して聖道を傳へ、以て人々を善く感化せねばならぬ、斯くして若し我邦にても數人のグレゴリオ、パトリオが出づるならば、全國に如何に多くの異端異教徒があるとも、少しも之を患ふるに及ばぬのである。又一般信徒諸子よ、諸子は今日まで如何なる友と交

はり、如何にして之と交はりつゝあるか、其友にして若し艱難に遇はば力を竭して其友を保護し、誘惑に陥らんとする場合には其友を助けて善に導きつゝありや否やを能く顧み、今日以後忠良なる友を擇んで之と交を結び、互に相扶け相勵まして善徳に進まんと望み、肉身の艱難は勿論、靈魂の危険を認めば互に力を竭し心神を盡して之を救ひ、共に手を握つて主を愛し、他人を愛しつゝ、天國の道を歩まんとす……。

五月十日(1) (降生後一三九九年死)

後花園天皇時代

聖アントニノ司教

聖アントニノは伊太利國のフロレンス市に生れ、幼き時より純善の性質で、常に善徳を行ふことを好んで居つた。十六歳の時ドミニコ會に入つたが、會に會院の規則を守つて少しも之を犯さぬばかりでなく、尙艱

難を忍んだ上にも之を忍び、我身を責め苦めることが餘程厭しかつた。即ち其日常の行動は、先づ晝は讀書と工役とを爲し、夜は多くは睡眠を貪らず、寢床を離れて聖堂に入り、修士等と功を通じて夜の課程を誦へ、修士等が去つて眠りに就くも、アントニノのみは獨り居残りて黙想とか讀書をしながら天明に至る事があり、或時は精神が困憊して支ふる事が出来ないうやうな時もあるが、其時は坐りながら牆に凭れて少し許り眠るを常として居つた。又飲食は重病に罹りし以外には決して肉類を用ゐず、腰には細い鐵の帶を結び、尙毎日鐵の鞭を以て自ら身を責めて居つた。

そして二十餘歳に至つて司祭の位に陞つたが、其後益々熱心に善徳を積みつゝ、只管世俗的の務を避け、院修士たらんと望み願うて居つた。其中に會長が其才徳の高きを知り、之を某地の修院長に陞した。かくて彼は二十年間、續いて八ヶ所の修院を管理し、頗る賢徳の開け高く、事實上修院長の職位に居りながら、其

後四十餘歳にしてフロレンス市の大司教に任せられたが、居常謙遜と克己の美徳を守り、力を盡して靈父を勵まし、信者等に教ふべきを勸め、自分は力めて善き範を示しつゝ、衆人を教化し、我儘を振舞ふ者等を制して居つた。或日の事、某顯官が大に怒り、司教に對して讐を復さんと揚言し、或は人をして密に之を殺さしむるか、或は教皇に上奏して之を貶謫せんやと云ひ居る由を耳にした、然し司教は更に恐るゝ色もなく、微笑みつゝ云ふやう、我は重き罪ある身なれば、天主は我に致命の褒美を必ず與へ給ふまじ」と。又教皇に上奏し云々といふ事に就ては「我は豫てより世務を避けて隠修を爲さんことを切に願ひ居るものであるから、若し左様なれば我の爲には貶責ではなく、結局僥倖の至りである」と。

聖アントニノ司教は毎年其得る所の收入金を三分し

て、其一を自己と家僕の日用費を供へ、一を教會の修繕費に充て、一を貧しき者等に施與して居られた。又貧しき者等に只金錢や衣食を施與すの外、日々市中を巡つて貧しき者の病人を慰めて居られた。或年疫病が大に流行し、富める者等は忙て、遠方の地に之を避けしたが、司教は己が身を全ふするの意なく、相變らず市中を往來して病人を慰め勞つて居られた。

其後司教は天主の特恩を蒙り、特に藥を用ひずして病痛を治すの權を與へられ、度々奇蹟を顯はして居られたのである。一日某村の老翁が、司教に一籃の水菓子を贈つた。此老翁は其時心の中に、之を司教に呈上せば、司教は必ず若干の金錢を惠み呉れるならんと豫期して居つたが、司教は此贈物を見て直に老翁に祝福を降しながら、「願くは天主、此禮物に對する御惠を彼に還さしめ給へ」と云ふ。老翁は斯くと聞いて悦ばず、外に出て後、司教は慳吝な人である、祝福を降すは易く、金を出すは難きものであると怨み罵つて居つた。

司教の家僕は之を聞いて早速司教に其旨を告げると、司教は「然らば其老翁を此處に呼戻せよ」と命じたので、家僕は老翁を呼戻し司教の面前に連れ來た。スルと司教は直に筆を執つて半葉の白紙の上に「願くは天主、此禮物に對する御惠を彼に還さしめ給へ」と前に祝福した言葉を書き寫して之を秤の一方に置き、老翁が進めた水菓子も他の一方に置いた。然るに不思議にも半葉の紙を置いた盤の方が重くして下に垂れ、水菓子を載せた盤は軽くして上に揚つた。其時司教は之を指しながら、視よ一籃の水菓子と、一言の祝福とは、孰れが重くして貴きぞ」と云ふと、彼の老翁は面を眞赤にし、頻りに自己の心得違を詫びて歸つたさうである。

また市中に富貴の人にして規誠を守らぬ者があつた。一日側の者が司教に此事を告げて、彼を教會より棄てよと勧めた。其時司教は之に應へて「棄つるといふことは重大の罰であるから、輕々しく行ふことが出

五月十日

(2) 降生後一七〇年死

高倉天皇時代

聖イアドロ農夫

來ぬ」と云ひ、衆人の面前に於て一箇の白き餅を取り、人を買つるの祈禱を其上に誦へると、奇妙にも白き餅は見る／＼うちに黒く炭の如くに變色した。そして少頃の後司教はまた之を赦すの祈禱を誦へられたが、今度は其黒き餅は再び元の通り白き色に變じた。

聖アントニノ司教は斯くして七十歳に達せられたが其年重き病氣に罹られたので、萬事天主の攝理に委し金銀衣服家具をば悉く窮民に頒ち與へ、心靜かに死を待つて居られた。そして終油の秘蹟を領けて後いとも喜ばしげに「天主に事ふる者は王なり」と云ひ、ドミニコ會の某修士が聖人の枕邊に於て、聲を揚げながら臨終の祈禱をなしつゝあるのを聞きながら、聖人も亦心を合せて共に祈つて居られたが、幾もなく目を閉じ息絶えて眠むるが如くに逝かれた。時に降生後千四百五十九年五月、死後許多の奇蹟が其墓前に行はれた。

聖イアドロは西班牙國の人で、幼き時より父親に従うて農事に與はり、曾て讀書などをした事がないが、性質至つて正直にして潔白な心を持ち、父母は貧窮ながらも、篤く之に教へて天主を敬ひ愛させて居つたのである。常に救靈の大切なることを曉り、世渡る業としては一でも多く善行をなすに在りとして之を力めて居つた。そして二十餘歳の時、全し貧しき家の女を娶つて妻となし、俱共に熱心なる信仰を以て善徳を積み、力を協せて稼業を勵み、世の憂き苦勞に心を惱ます不平を唱へず、只管天主に依靠つて主を賛美し、主に感謝して居つた。それ故世俗的の眼より見れば貧しく哀れな一家ではあるが、然し信徳の眼よりすれば、實に尊ぶべき極みであつたのである。

其後イアドロは某富豪の家に雇はれて耕耘に従事す

ることゝなつた。然し其信仰は益々厚くなり、主日祝日には敷臺の彌撒を拜聴し、謹んで説教を聴き、秘蹟を領ける際の如きは、最も恭しき態度で、之を一見しても其信徳の深きを知る位であつた。又平素聖堂を以て天主の御坐所となし、長く香臺の前に跪いて祈禱黙想をなすことを唯一の樂みとなし、毎朝夜の明けぬ中に聖堂に入つて信仰上の勤をなし、夜明けて後家に歸つて業を勵み、身の疲るゝことあるも不平を鳴らさず、冬の寒さ、夏の暑さもよく忍んで働き、身を碎いて主家に忠勤を盡して居つた。

所が世の例に漏れず、某年他の雇人等の中イシドロを妬む者があつて主人の前に往き、彼は神信心にのみ時を費し、兎角農事を怠りつゝありと告げた。主人は斯くと聞き、其實否を查べんとイシドロの動靜を見に行つたが、人の告げたと打つて變つて忠實しく立働き、少しも怠るやうの様がなかつた。一日も主人がイシドロの許に行くと、彼は汗を流しつゝ田を犁いて居

るのを見た、が不思議にも白衣を着けた二人の者が其側に立つて共に働いて居るので、主人は不審に想ひながら近づくと、何時の間にか白衣の人の姿が見ゆぬやうになつた。乃で主人はイシドロに向ひ「今汝と共に働いて居つた者は何人か」と問ねた所が、イシドロは「自若として「彼の御方は天使である」と應へた。又或日暑熱焼くが如き折柄、主人が見廻りに来て渴きを覺へたので、水を飲まんと所々を尋ねたが、一滴の水をも得ることが出来ず、非常に苦んで居つた。イシドロは之を知つて「水がお入用なれば造作もありません」と云ひつゝ、手に持つて居つた鋤を以て地を打つと、直に其處から清き水が滾々と湧き出た(此水は其後も絶えず流れて居る)。主人は之を見て始めてイシドロの常人にあらざる事を知り、以來心の底より彼を愛し敬ひ、家族等の爲に祈らんことを請うて居つた。一年此家の少女が急病にて死去したので、主人親戚等大勢葬式の準備をして居つた。其處へイシドロが来て其棺前

夫農ロドリイ聖



(不思議にも白衣を着けた二人の者が其側に立つて共に働いて居る……(六九頁))

に跪き、頻に祈禱をして居つた所が、奇妙にも己に死した少女が忽にして復活したやうな事もあつた。

寔に、天主を愛する者は必ず人を愛するのである。イアドロは常に他人を己の如くに愛し、言語行爲を以て人を傷けぬばかりでなく、進んで力を盡し之が益を圖り、農夫として僅少の賃銀を得て居る身分でありながら、出来得る限り多くの施與をして居つた。天主は其善き心懸けを愛し、時々奇蹟を顯して之を賞し給ふた。一日の事イアドロは食事をした時、乞食が来て食を求めた。イアドロは妻に向ひ、何か與ふべき物があるかと聞くと、妻は全く何も無しと答へた。其時イアドロは「櫃を開けて能く探し見よ」と云ふと、妻は笑ひながら「最早食したつた空の櫃に何かありません」と云ひつゝ、蓋を取り開き視ると、奇妙にも今食したつた櫃の内に、野菜とパンを盛つた、大きな籃が有つた。如何して斯んな物があるかと驚き訝りながら、之を乞食に施したが乞食は大に喜び、飽くまで之を食し

厚く禮を述べて去つた。

また或る冬の寒き日、霏々として雪が降り積み、一面の銀世界となつた。イアドロは一袋の麥を荷ひ、之を水にて洗ひ麵包と成さんがため或河岸に行つた。其途中路傍の樹の上に、多数の小鳥が寒さに震ひつゝ、頭を縮め飢餓して居るやうに見えたので、イアドロは深く之を憐み、直様手足も凍りたる雪を掻き掃ひ、麥の袋を開いて之を掴み出し、地上に撒き與へた。斯くと見た小鳥は、忽ち群を成しつゝ樹の上より飛び下りて、其麥を啄み盡した。イアドロは傍に立ち、悦びながら之を見て居ると、通行の人々等は「人の食ふべきものを以て野鳥を救ふとは何事ぞ」と嘲ける如く責むるが如くに云ふた。が聖人は之に答へず、良久して小鳥が勇ましく立去るを待ち、麥袋を背に負ひつゝ河岸に往き、之を洗ひ終ると、麥は少しも減り居らぬばかりでなく、却て一倍にも増して居るので、衆人は之を見て、天主が、聖人の愛が禽獸にまでも及ぶのを賞

して、かく禍を降し給ふのであると、皆其徳に感じて

一層聖人を愛慕するやうになつた。

聖イサドローは、卑しき農夫の身を以て斯かる奇蹟を度々行ひ、人々に少かぬら頁き感化を興へつゝ千百七十年五月に善き死を遂げられたのである。そして四十年後に其墳墓を他に遷さんどて之を開き見ると、其屍體の新らしきこと恰も活ける人の如く、尚美き香りが發して鼻を撲ち、之を聖堂に運び入れる時、聖堂の大鐘が自然と鳴り響いた。其時盲者跛者等集り來て聖人の轉達を願ひ求めた者は、何れも即坐に癒れた。そして教皇グレゴリオ第十五世陛下(一六二二年)の時、其名が聖人の冊簿に列せらるゝこととなつた。

默想

破門の罰

ヨハ子聖福音書に、主耶穌が罪を赦すの權を使徒等に授け給ふの時「汝等誰の罪を赦さんも其罪赦されん

表面より見れば何の効驗もないやうに思はれるが、而も其實は決して然らず、其至尊至大なること、世の總ての權の如き逆も比べものにはならぬ。

尚又教皇司教は別に一の特權を有つて居る。开は信者を破門することである、乃ち教皇は全世界の信者を管治し、司教は一教區の信者を管理するの責任があるから、信者にして若しも公教の誡律を犯し、毫も改め悔ゆるの色なしと認められた場合には、教皇は之を全世界の教會より破門し、司教は之を其教區より放逐することを得るのである。

要するに此破門は嚴しき罰である。世の公教信者は悉く一家を成し、天主を父とし、天上の聖靈と、世の信者と、煉獄の苦靈とを以て兄弟姉妹となし、吾主耶穌の功德と、七つの秘蹟と、全世界にて献ぐる聖祭と、各國に於ける幾千萬の信者が行ふ所の善功とを以て家寶とし家業とし、而も皆能く其本分を盡しつゝあるのである。が破門を受くる者は即時此家族の中より

誰の罪を止めんも其罪止められたるなり(二三〇)と。

此尊き權は、今日教皇と各司教とが使徒より之を相續して自ら此權を行ひ、尚司祭にも托して此權の代理を爲して居るのである。それで信者にして若し罪を犯すならば、直に司教司祭の許に往つて之を告白せねばならず、司教司祭にして其罪を赦すべきものと認むるならば其罪が赦されるのである。告解の時には聲を潜めて他に聞ぬやうに爲ねばならぬが、然しそれが爲め効驗が無いといふ事がない。告解に來る時には、己の靈魂が主の尊前に於て甚だ汚穢たものであつても、己に罪を赦されて後は、其靈魂の美麗なること筆紙の能く盡す所ではなく、彼が若し其際に死するならば其靈魂は必ず天に昇るのである。然し司教司祭が、大罪ある信者にして改心の見込なく、秘蹟を領くるの善意なしと見て、其罪を赦さぬ場合には、其靈魂の汚穢は依然として存し、其儘にて死するならば、無論地獄に下るのである。是を以ても司教司祭の有する赦罪の權は、

放逐せられて其數に入るを得ず、吾主の功德を得る事も出来ねば、秘蹟を領くることも出来ず、其儘にして死せば聖會の禮によつて葬むることも出来ないのである。

破門の罰は斯く重く嚴しきものであるから、靈父等輕々しく之を行つてはならず、信者も亦輕々しく之を視てはならぬ。然るに世の人の多くは之を明かにせぬ者があるので、彼の聖アントニオ司教は聖蹟を顯して之を諭されたのである。即ち白き餅を取りて其上に破門の祈禱を誦へると、忽ち變じて其色が黒く炭の如くになつた。是れは破門せられた人の靈魂は、地獄の炭となり、永遠の火に燒かるゝ隣むべき光景を表したものである。

聖人は復た破門を赦すの祈禱をその黒き餅の上に誦へると、忽ちまた元の白き色と變つた。是は靈父等の特權を以て罪を赦されたことを表示したものである。されば信者等にして破門されし者は、秘蹟を領け聖恩

五月十一日 (降生後三三〇年生)

允恭天皇時代

聖エビフハニオ司教博士

を得ることが出来ないが、若し痛悔して靈父の赦を求むるならば、靈父等は必ず之を赦すのである(若し此赦宥を得んと欲するならば、管轄教會の主任靈父に其事情を具申せねばならぬ。靈父が之を赦すの権ありとせば必ず之が赦され、靈父にして若し其權なしとせば、必ず之を司教に求む。さすれば司教は靈父に之を赦すことを委すのである。又信者が臨終の時に際しては、如何なる靈父にても皆能く破門の罰を赦すものである。斯くして赦された信者は、再び教會の數に入り聖事に與り秘蹟を領け、諸聖人と共に通功の恩恵をも獲、死後に於ても亦必ず聖會の禮に依つて埋葬されるのである。

是に由つて見れば、我等若し不幸にして破門せられ、公教會外に放逐せらるゝならば、救靈上の聖恩を斷たるゝ事を明かに知り、常に之を懼れて其不幸に陥らぬやうにし、若し萬一破門の憂目に遭はば、遷善の決心を爲し、痛悔なして赦宥を求めらるやうに努めねばならぬ。

信するやうになり、母親と妹にも勸めて猶太教を棄てさせ、遂に公教信者となされた。そして自分は洗禮を領けて後、堅き決心を以て修道者とならんと望み、田地を分けて母と妹とに與へ、家財を賣拂うて貧しき者に施與し、自身は裸全様何物をも持たず、ルシアノの修院に入り、聖イラリオを師と仰いで居つた。

數年の後ルシアノが死し、聖イラリオが代つて修院長となり、修士等も一層善を行つて其德行を輝かして居つた。其中にもエビフハニオの才徳が優れ、時々天主の恩寵によつて奇蹟を顯して居つた。彼は之に依つて人々より稱讃せらるゝを見、自然傲慢自負の心が生じてはならぬと恐れ、數月の後院長の許可を得て退院し、エルザレムに往つて聖地を巡拜し、それより海岸に沿つて埃及に行き、曠野に住む修士等を訪ねて聖教を聽いて居つた。

時に「グノシス」といふ邪教が東の方に盛んに流行し其徒弟等は表面理論を以て正しく装ひながら、裏面に

降生後三百餘年、羅馬の東國なるシリヤ州に、極めて貧しき生活をして居る夫婦があつて、夫は外に出て田夫に傭はれ、妻は家に在つて麻糸を紡ぎなせして居つた。此夫婦は十餘年前より猶太教を信奉して居つたが、夫は間もなく病氣に罹つて死し、妻は十歳になる兄の子エビフハニオと、八歳になる妹のカリトロアを織弱き女の手一つで育て、居つたが、何分にも生活の道が立たず困つて居つた所、全じ猶太教の信者なるツリホンといふ者が兄のエビフハニオを引取つて我兒となし、之に讀書を授け、舊約聖書とモイゼ教の道を學ばせて居つた。が四年の後養父も此世を去つた。

エビフハニオは十四歳にして養父の業を繼いで居つたが、其後ルシアノと云ふ修道者の説を聽いて公教を

於てひそかに邪慾を擅まにして居つた。エビフハニオは學を好み理義を學んだ人であつたので、全教が異説を唱ふる由を聞き、自ら赴いて質門に及んだ所が全教の教師は此人の尋常人にあらざるを早くも見て取り、如何にもして我黨に引入れんと、故ら善人を装ひ、言語を叮嚀にして萬物の狀を説き、理を盡して天地の微妙を論じた。がエビフハニオの才徳高く、鬼ても辯論のみにては其心を動かすことが出来ぬと知つたので、忽ち一策を案じ、彼は青年の學者にして、久しく修院にのみ居りし者なれば、世間の事などは餘り知るまじ、されば美人を彼に押附けて邪情を起させ、徐々彼の心を亂すならば終に我黨に従ふならんと察し、直様美人に旨を含めて之を攻めさせた。

此命を承けた例の美女は、エビフハニオの説を聽問するが如くに装うて、日々聖人の許に來り、巧言令色を以て只管其心情を動かし亂さうと努めて居つた。がエビフハニオは早くも彼女の卑劣なる心意を悟つて、

一層身を堅固に持して居つた。かくて一日もエビフハニオは彼女に向つて、天主の審判の厳しき事、地獄の永罰の苦しきこと等を説き警めた所が、彼女は微笑みて、「開は全く一種の方便であらう」と云ひつゝ、狼りがましき振舞を以て聖人に近づいて来た。エビフハニオは強く之を斥ぞけ、「我は明かに汝等の教の實情を知つた」と大聲を發して叱り付け、直様其場を逃れ去つた。そして其年書物を著して「グノジス」教の邪道を駁撃し併せて其教徒等の亂暴にして憎むべき舉動を悉く指摘して之を誅した。

某年曠野に於て聖アントニオの名高き弟子なるパフマシオに出逢ふた。互に親しき物語を爲し、やがて別辭を告げやうとする時パフマシオは聖人に向つて「卿は海を航つてシプロ島に往かれよ、天主は卿を選んで其地の司教となし給ふ」といふた。がエビフハニオは之を聞いて怪み「師は我の徳なく才なきを知り給ふにあらすや、怎で天主は我等如きを選んで司教の如き重

き任務に就かせ給ふぞ」と云ひつゝ、其場を別れ、船に乗つて他の方面指して行つた。然し天主の聖旨は免がれず、次の日大風起つて船は進まず、數日の間東に深き西に流れ、遂に或島に着いた。此島は則ちシプロ島で、船の着いた港はサラミナ市であつた。そこでエビフハニオは直に市中に入つて聖堂を訪ねた所が、丁度其時此地の司教が世を去らんとし、多くの靈父等は其後繼について相談中であつたが、折好く名高きエビフハニオが来たので、早速之を推して司教とした。

此サラミナ市の住民は皆能く富み、貿易の爲に四方より集り来る者が多く、自然人々の服装も言語も異なり、隨うて其信仰も種々と異つて居るので、此地の司教の任務は最も困難であつた。が新司教の才徳は決して其位を辱しめず、朝夕内外の事務を理め、心を盡し力を竭して信者の信仰を固め、教外者を感化し、數年の後には其功績が大に顯はれ、靈父信者は勿論異教者に至るまで皆司教の才徳を稱し、之に敬服するやうに

なつた。

復た越えて數年の後、聖イエロニモ博士(九月三十日)が、シリアに遊び、古今の事蹟を探り究むる爲め所所に旅行して居られた。其時偶々此サラミナ市に来てエビフハニオ司教と會見せられた。二聖人は互に交りを厚ふし、相別れて後絶えず書面の往復を爲し、數年の後相共に船に乗つて羅馬に赴き、教皇に謁見して異教に對する方法を協議し、聖人は直にシプロ島に歸られ、聖イエロニモも三年間羅馬に滞在して教身を補佐し、後シリアに赴く途中シプロ島に立寄つて司教に逢ひ、數日の間互に相語り相親み、一層深く相識るやうになつた。

其後エビフハニオ司教は、日々教會内外の事務を執りつゝ、自ら苦業大齋をして徳を積み、口に説き筆に寫し、異教者を導いて居られた。當時聖アタナシオ、聖バジリオ、聖グレゴリオ等の大聖人が世を去り、エビフハニオ司教は聖ヨハネ金口博士等と東の方に於て

其後を繼いで聖道を宣へ傳へて居られたので、聖イエロニモは司教を指して司教等の模範と稱し、アレキサンドリアの大司教も亦大膽に司教を頌めて「エビフハニオは力量も智謀も共に優れた名將である。彼は聖道の爲に數十年間戦を續け、而も連戦連勝せり」と、そして天主も亦司教の徳行を賞で、時々奇蹟を以て人の心の奥底までも見透すの神權を與へ給ふたのである。

其年のこと、二人の惡漢が潜かに謀つて、聖人を欺き置いて笑はんとし、一日司教が外に出る機を窺ひ、一人の惡漢が重病を裝ふて倒れ仆し、他の一人が司教の前に行つて彼の病人を醫さんことを乞ふた。所が司教は威儀を正しながら外衣を脱いで彼に與へて云ふ、「其早く去つて、此衣を以て汝の友を埋葬せよ」と。惡漢は不審に思ひながら其外衣を受け取り、慌て、假病の友の側に行くと、彼は已に死に類みつゝあつたさうである。

聖エヒフハニオ司教は斯くして百歳の時病に犯され最後の秘蹟を領けて後靜かに世を去られた。時に降生後四百三十年であつた。其著書は今日も尙存し、多くの益を讀者に與へて居る。(因に此聖人の祝日は五月十二日である)

黙想

清淨なる心情

聖書に「人の行爲は其心に由つて方向を定むるものである(箴言一)」と。

人には智悟があり、愛慾があり、志向といふものがあつて、物を識り理を窮むるには明悟を用ひ、善惡を分つには必ず其明悟を以てし、善惡が分明すれば愛慾の念が動き、愛慾が動けば志向が定まつてそこに行爲となつて現はれるのである。そして善に向つて善を行ふか、或は惡に向つて惡を爲すかは、其人の自由なる心によつて決行せられるのである。

それで尙し原罪が人の本性を汚さないならば、人々の明悟は善を見れば必ず之を愛し、惡を見れば必ず之を惡むのである。が不幸にも人の本性は原罪の爲に汚され、明悟が昏んだから、善を見ても其美を全ふすること能はず、惡を見ても其醜さを避くること自はず、剩さへ愛慾は原罪によつて倒まとなり、神聖なる靈魂上の福樂を賤み、浮雲の如き肉身上の快樂を重んじ、富貴を愛し、善徳を嫌ふやうになつたので、心清く私慾に打克つの人でなければ、到底惡を避け善徳に進むといふ事がなく、惡行はれて信徳が敗れ望徳が失せ、知らず識らず聖道に背き邪教を奉ずるやうになるのである。現今の英國及び獨逸が、聖教より離反したのも此故ではなからうか? 彼の獨逸のルーテル、英國のヘンリー八世が私慾を繼まゝにし、邪慾に従うて終に正道に背くやうになつたのは全く此故である。

昔し「グノマス」教の教師等が、聖エヒフハニオを邪道に導かんと欲し、辯論を以て之を説伏せて事が能は其心に由つて方向を定むるものである」といふ金言を服膺し、信望愛の三徳を保つは勿論、善惡を辨へて之を勵み、之を避くるは、一に其心の清淨なる否とに由ることを深く記憶し、力を竭して己が心を清淨にし、飽までも邪慾を避けんどの堅き決心をなすやうに爲ねばならぬ。

五月十二日(二世紀)

景行天皇時代

聖ネレオ、聖アキレオ兄弟

聖女ドミチラ等殉教

降生後九十餘年、羅馬皇帝ドミシアノの時、皇族のクレモンなる者が宰相となり、妻と二人の子女と共に公教信者となつて居つた。

其姪にドミチラといふ者があつたが、是も先きの日母親に従うて洗禮を領け、後父母を喪うて獨り家業を承継ぎ、天主を敬ひながら熱心に善業を行つて居つ

はぬと見て、美女に命を含めて之を誘ひ惑はさんとした。其時エヒフハニオにして、若し私慾に従ひ一時の快樂を貪つたならば、必ず不幸な運命に陥るのであつたが、道に聖人と仰がるゝ方だけに、早くも彼等の謀計を曉り、前には辯論舌戰を以て彼等の偽善を破つたが、此美女の誘惑に對しては戰ふことの危険なるを知り、直に逃げて遠くに避けられたのである。

あゝ今日許多の信者の中、聖エヒフハニオの此賢き方法を學ばぬ者がある。彼等け早くより天主を信じ之に事へ、誦律を守つて永遠の福樂を享んと望んで居る。が、常に信望愛の徳を保たうとせば其心情を清淨にせねばならぬといふ理を窮めず、随つて邪慾が心を亂すも之を防がず、人々の誘惑あるも之を避けず、漸々邪慾が萌し燃ひて惡に偏り、竟には信徳を敗り、望徳を失うて自ら地獄に陥るの止むなきやうになるのである。實に嘆はしい次第ではあるまいか。

されば我等は今日以後、聖書の中にある「人の行爲

た。そして家財豊かに富みて僕婢も多く、更に皇族の
女たる故を以て、帝都の大官等之を娶らんと望まぬ者
がなく、中にも高き位を占めて居る人の子オレリアノ
なる者、巧に皇帝に取入り、終に皇帝が彼女の父に代
つて、オレリアノの妻となさんことを許したのである。
此オレリアノは高き身分の者なるにも關らず、性質暴
慢にして毒心を抱き、素行修まらずして公教を嫌ひ避
けて居つた。

かくてドミチラが十八歳の頃、皇帝ドミシアノは公
教の布教を禁じ、次で各地の知事に令旨を下して嚴し
く信者を責め苦しめるやうになつた。之が爲め時の宰
相クレモンも皇帝より「天主を棄て、國神を信仰せ
よ」と説き勧められたが、信仰厚き人のことよて之を
肯かず、却て益々信念を堅めつゝあつたので、皇帝の
怒に觸れ、血族の身にもかゝはらず竟に迫害されて殉
教し、漸にして二人の子兒のみ其難を免かれたが、妻
も亦遠き孤島に流されたのである。

を愛さんと決心し、人を以て此事を詳しく教皇陛下に
上奏し、童貞女たるの准許を得んことを願ふた。

教皇陛下はドミチラの此決心を聞き召し、「汝の決心
は善い事ではあるが、皇帝は之を喜ばず、早晚必ず汝
が公教信者といふ理由を以て生命を奪はるゝであら
う」と仰せられた所が、ドミチラは少しも之を懼れず
「主の爲に致命するは眞の福で、罪人なる妾が全く聖
主に依歸し、以て此洪恩を蒙り得るならば、此上の望
がありません」と再三願ふたので、教皇陛下も其志の
堅きを見、直に祈禱を誦へてドミチラに童貞の服をお
與へになつたのである。

數日の後婿とならうとした彼のオレリアノは之を聞
き知つて大に怒り、人を遣はして種々に説かしたたが、
二ヶ月を経つても其心を改めさず事が出来ぬので、皇
帝に向ひドミチラは天主公教を信じて居る罪人である
と上奏した。乃で皇帝も容易ならぬ事であると、直に
ドミチラを召し、懇々と改宗すべきことを命じ勧めた

さて彼の姪のドミチラの事であるが、此家の僕の中
にネレオとアキレオといふ二人の兄弟があつて、兄弟
ども使徒聖ペトロより洗禮を領けて居つた。此兄弟は
誠意を以て天主を愛慕し、力を竭して主家に忠を勵み、
俱に心を協せて善徳を積みつゝあつた。曾て主人の命
嬢ドミチラが、世間を慕ひ、財物を愛するの状あるを
見て陰ながら之が爲に祈り、又時々之を諫めて、世上
の物を輕んじ、獨り天主を愛するやう、身を清淨に保
つて永遠の福樂を享け得らるゝやうにと説きすゝめ、
或は皇帝が血族の故を以て人妻となることを許したり
ども、眞に望むべき富貴榮譽は貞徳を守り、天主聖子
と神婚を結び、己れをすて、萬事を天主に獻ぐるにあ
る云々と教へ諭して居つた。それ故ドミチラも知らず
識らずの中に本心に歸へり、遂には兄弟の諫言を容れ
て今迄空しく虚榮に憧憧つゝ暮し居りしを深く悔い、
其後叔父なる宰相が殉教せしを見るに及び、愈々心を
堅め人に嫁がすして神に身を獻げ、世に事へずして主

が、ドミチラは少しも之に従はぬので、遂に之をボン
シア島に流罪人とし、其遺産を悉く没取して之をオレ
リアノに與へた。其翌年皇帝は臣下の者に弑殺されて、
敢なき最後を遂げたのである。

かくてドミチラは、ネレオ、アキレオの兄弟を伴れ
て都を去り、船に乗つてボンシア島に赴いたが、島に
着いて後は非常の困難を嘗め、僅に海濱の洞穴に身を
容れ、乏しき衣食を忍び、暑寒の苦を耐へ、ネレオ、
アキレオの二人は力を竭して忠を竭し、互に慰め互に
勞りつゝ、三人心を協せて天主に祈り、之に依歸り、
絶海の孤島に居りながらも天の福樂を望みつゝ四年の
月日を暮して居つた。

四年の後トラファシ皇帝の御代となつたが、先帝の
定めた公教迫害の律例はまだ廢されず、各地に於て絶
えず信者を殺害しつゝあつた。彼のオレリアノは一時
の怒にまかせてドミチラを遠き島に流したが、然し彼
女を慕ふの心が去らず、如何にもして我妻となさん事

聖の地に埋葬した。

聖女ドミテラは二聖人の死せる事情を聞いて一時大に驚いたが、嘗に其心を變へぬのみか、反つて彼等の後を逐うて殉教し、天を昇らんことを望み願うて居つた。彼の異教人の乙女二人はオレリアノとの約束を踐み、朝夕力めてドミテラの心を亂さうとし、オレリアノは唯々善意で御身と結婚を望まるゝのみで、若し之を承諾せらるゝならば、強いて其信仰を妨げぬ筈である等と、頻に説きつ賺しつ勸めて居つたが、聖女は一向に其を聽かず、一日も此二人の乙女に向つて「今假に和女等二人が、國の太子の妻となることを許されたとして置いて、其後に至つて他のつまらぬ者から縁談を申込まれたといふても、和女等は決して太子を棄て、其者に嫁ぐ事を爲ぬであらう、そは何故であらうか？」と反問して見た。スルど二人は笑ひつゝ「素より其通りで、太子に嫁ぐ方は遙に幸福であるからです」と答へた。其時聖女は隙さず「然らば思ひ知れよ、私の決

聖人物語

聖ネレオ、聖アキレオ兄弟、聖女ドミテラ等殉教(五月三日)百九

心堅きは既に天主聖子を以て潔夫とし、之が爲に貞操を守り居る所以である」と告げた。所が一人の乙女は之を聞き「一應御尤ではあるが、然し天主聖子が御身の潔夫と仰せらるゝ一事は、少しも合點が参らず、若し眼に見ぬ主耶穌が、果して潔夫なれば、其妻たる御身は奇蹟を行ふの權能を求めらるれば必ず與へて下さるでせう。幸にして私の兄が幼き時より兩眼共に潰れ、不幸にも不具者となつて居りますが、若し御身の力によつて之が全癒するならば、妾は必ず御身の言を信じ申すべし」と云ふと、他の一人の乙女も傍より、「此女の兄は只今他の地に住居して居るから、直様其效果を知り難いが、幸にも此隣家に一人の幼女があつて、彼は啞にしてまだ一言も發した事がない、何卒先づ此幼女の啞を醫して下されば寔に結構である」と云ふた。聖女ドミテラは自分は奇蹟を行ふの神權があるかないかといふ判断もせず、何か信する所がある者の如く「さらば主に願うて此奇蹟を求め得ません」といはれた

ので、乙女は早速隣家より幼女を連れて来ると、ドミチラは其處に跪いて祈禱をなし、起つて其幼女の口に十字の聖號をすると、奇妙にも其兒は直に舌を動かしつゝ大聲に「天主は天地の主宰者にして、敬ふべき愛すべき御者である」と叫んだ。彼の二人の乙女は此事を親しく観て深く感じ、一も二もなく天主を認識するやうになり、數日の後二人は其一伍一仕の次第をオリアノに報告して後言を改め、自分等二人も此後ドミチラに従うて天主に事へ、終生童貞を守るの決心である旨を告げた。所がオリリアノは大に怒り、官の方を藉つても此讐を返すべしと云ひ、遂に此夜數多の兵を遣はし、聖女の房屋を圍んで火を放たさせた。聖女は二人の乙女と共に、最早逃るゝの途なく、且つ殉教の機を來たのを知つたので、喜び勇んで二人の乙女を屬まし、天國の永福を説きつゝ其處に打揃うて跪き、穩かに死を待つて居つた。

其中に火は炎々と燃上り、見る／＼中に軒も家根も

燒き盡して了ふた。其時補祭のセザリノと云ふ人が直に其處に駆け込み、三人の遺骨を尋ねんとした所が、聖女ドミチラ三人は正しく跪いて居るので、驚きつゝ側に寄つて見ると、最早三人共死して居るが、然し不思議にも、火焰の爲に其一筋の髪も焼けて居らなかつた。セザリノは此日三聖女の死體を棺に殮め、之を羅馬に送つて厚く葬つた、數百年を経て後、教皇は聖子レオ、聖アキレオ、聖女ドミチラ等の聖體を改めて羅馬の大聖堂の中に葬られ、今に尙ほ保存されて居るさうである。

黙想

異教人と結婚させる事に就て

或者の云ふには「聖女ドミチラは入の妻たるべき許嫁であつたのである。されば其約を踐んで結婚を爲るのが當然ではなからうか」と。

抑も此婚姻は乃ち靈魂肉身上に大關係のあるもので或は妻らず嫁がねば心安からずとする者もあらうし、或は妻り嫁げば靈肉共に安からずとする者もあらう。人各々其志が異り、他人が妄りに之を強いてはならぬ。娶ると娶らざると、嫁ぐと嫁がざるとは全く本人の自由意志に任さねばならぬ。

要するに娶り或は嫁ぐといふ事は、能く其對手を擇ばねばならぬ。夫婦匹敵せず、家門等しからず、互の心合はざるものゝ如きは、男女とも婚儀を爲してはならぬ。若し其點に注意を缺けば、恐らくは自ら禍を招くであらう。

凡て婚姻に就ては、軽々しく協議してはならぬ。公會に於ては早く已に規定を設け、父母が其子女と婚儀を相談することを准してない。尤も之を説く時には、必ず一ヶ條の議すべき事がある。即ち二人の子女が成長したる後、雙方とも各々能く自ら考へ自ら其事を定むべく、此時に當つて雙方の親は兒に隨ひ女に隨うて

事を取計ふべく、或は結婚を成さんと云ふか、或は之を止すと云ふも双方の親は之を阻む事が出来ない。此規定は最も當を得たもので、之に従へば兒女等自主の理を全ふるのみならず、父母が其子女を愛するの情にも悖らないのである。

従來日本支那の如きは、所謂許嫁と稱して父母と其子女との間に婚約をなし、以て子女等成長の後強て其約を踐まねばならぬやうになつて居る。此は異教の理にして、天主の正理に合はないのである。それで信者にして若し奉教以前異教者との間に其子女を娶はすの約がある場合には、今日我女が其儘結婚を成すや否やを確めねばならぬ。

此事は寔に重大の事で、其女の信仰の強弱如何を見ねばならぬ。若し其信仰が堅固なれば、異教者の家に嫁ぐも天主の規誡を守つて身を修めるが、一方また偶像を嫌ひ異端を避け、長き年月の間には必ず其家族等と不和を生じ、自分は日夜此事を愁ひ、家族等は異

なる信仰上より一舉一動を見、益々軋轢を生ずるやうになるであらう。且又子女を産むも本夫は之に洗禮を授くることを許さず、自分は之を見て倍々不快を感ずるといふ風に、到底圓滿なる家庭を作ることが不可能であらう。乃で正理を以て之を考ふるに、異教の家に許嫁されたる公教信者の娘は、結婚後其家の両親と別居するのは最も好まき法である。

また嫁すべき本人の信仰が、若しも弱く薄き者であれば大に憂ふべきことである。即ち結婚して獨り異教者の中に居れば、朱に交つて赤くなるの比喩の如く、知らず識らずの中に信徳を失ひ、言行共に漸々と異教者と異なることがないやうになり、終に其靈魂を失ふ虞がある。是が父母たる者、明かに此理を辨へ、愛女の靈魂を滅ぼしてまでも之を異教人の中に放つてはならぬ。

然らば注意深き信者は、斯かる場合に臨み如何に處置すべきか。开は他でもない、信者たる父母は理を述

べ言葉を盡し、以て嫁入先の親達を説き勸めて別居させるやうにすることである。そして其親達が若し賢人なれば、必ず結婚の大事を知り、勤めを待たずして自ら別居するであらう。又其親達が見識少なく、固く執つて別居せない場合には、只管心を竭して嫁に遣るべき娘に對して、堅く信徳を守るやう諭し勵まし、後絶えず天國の正道を踐まねばならぬ理を説き聽かせ、以て愛女の一生を誤らしめざるやうに注意せねばならぬ。斯くすれば、或は其德行の光によつて、本夫を始め其家族等を善く感化し、以て天主を認め識らしむるやうになるかも知れぬ。

往古羅馬に於ては、また天主を認識しない時代、子女が十餘歳になり父母が之に許嫁を定めても、其子女が成長の後は、父母の許嫁したる權を脱れ、隨意に之を定め、或は結婚し或は結婚せざることがある。そして父母も皇帝も之を阻め妨ぐる事が出来なかつた。うれ故聖女ドミチラは結婚を願はず、許嫁の約ある先方

五月十三日 (降生後二二六五年死)

龜山天皇時代

福者エマリオ修士

も之を國法に訴へても結婚を迫るといふ事が出来なない。詮方なく其本夫たるべき者が、惡辣の性を以て聖女が公教信者たるの口託をなし、遂に之を死地に陥れ、國王も亦血族の誼を思はず、慘酷にも相謀つて無辜の聖女を殘害したのである。實に横暴の所業と謂はねばならぬ。

我國の新しい信者にして、若し洗禮以前其子女を異教人の家に嫁がすの約があつても、公教信者となりし以上は輕々しく之を嫁がしてはならぬ。斯かる場合に力を竭して先方の家族と別居の理を説き聞かせ、以て我娘の信仰を保つやうに注意せねばならぬ。縱令先方は富貴なるにもせよ、努めて我娘の永福を享くることを望み、若し別居することを出来ず、且つ爲に其異教者が、我公教に對して害を加ふるの虞あるやうな場合には強いて我娘に干渉をせず、只絶えず其愛女の信仰を堅固にするため、他の善行を以て其靈魂を救ふやうに努めねばならぬ。

聖人物語

福者エマリオ修士(五月十三日)

降生後千二百年の頃葡萄牙國の首都にエマリオといふ貴公子があつた。幼き時より聰明にして學を好んで居つたので、國王も之を寵愛し、某修院の土地を下し賜うて其祿とせられた。此修院は甚だ富裕で、數多の土地山林を有つて居つた。エマリオは此結構な所に住居し、生活の事に心配がないから、修院内の修士に隨うて德行を積み、或時は書に耽り、或時は漫遊し、二十一歳の時、佛蘭西の首都なるパリに赴いて、學を究め見聞を廣めんと望み、某氏に其留守を任せ、佛蘭西に向つて出發した。が行路が却々に遠く二ヶ月もかゝらねば着く事が出来なかつたのである。

途中一日晨早く起きて、獨り歩いて居つた所が、馬に跨つた一人の旅客に出會ふた、漸々近づくにつれて

其容姿を見ると、身の丈高くして物凄きやうな相貌をした人であつたから、エリオは覺ゆる恐気が生じ、自分に危害を加へる者ではなからうかと大に懼れて居つた。やがて件の旅人が近寄つて馴々しく言葉を懸け「御身は何地に往くや」と問ふので、恐怖しながら「巴里へ」と答へると「巴里なれば我はよく之を知つて居る、御身が彼處に往つて學問するならば、醫術を學ばるべし」と云ふた。エリオは奇妙の想ひをなし「自分も其心得である」と告げ、詳しい事を明さなかつたが、其旅人に對して何となく氣味悪く感じて居る所へ、尙其旅人が「巴里には名高い教師も澤山あるが、誰も我に及ぶ者がない、御身若し我に従つて學べば必ず學業大に進まん」と云ふので、エリオは「さては此旅人が悪魔ではあるまいか」と察したので、急ぎ天主の聖名を呼び救ひを求めんとしたが、兎角迷ひの霧に遮ざられ逡巡して居つた。

此時旅人は一層眼を光らし、凄まじき形相をして良

久エリオを見つめ「御身若し我に従はば將來名ある學者となり、富貴榮譽思ふまゝにならん」と云ふ。エリオは斯くと聞いて益々心亂れ、遂に善き志望が失せて名利の念が燃ゆるが如くに起り、種々と思案の末「何卒師よ我を弟子となし給へ」と願ふた。スルと旅人は懷中より一通の起誓文を取り出し、之に血判すべしと云ひつゝ讀聞かせた、が其文に、エリオは今日甘んじ承諾して天主に背き、聖教を棄て、我靈魂をサタンに交付す、願くはサタン我を助けて學者となし、富貴を享くることを得せしめんことを」と。エリオは其起誓文を讀み聞かされ、斯く云ふ者の誰なるかを明かに知つた、が最早邪道に迷つて居るので少しも之を拒まず、小刀を以て手を刺し、其血を以て形の如く血判した。スルと魔鬼は之を受取り喜びの色を呈しながら忽ち其姿を消した。

かくてエリオは巴里に着き、日夜魔鬼を師として書を読み、學問を研究して居つたが(一月十七日魔鬼

に就ての説明参照)後果して種々の學問に通じ、博學多識の者となり、藥を用いて病者を醫せし事なぞ數へ難き程多くなつた。それで幾もなく其名聲が遠くまで響き、財を蓄ふることも多く、快樂を縱まゝにして人々に羨まれる身分となつたのである。が斯く才學優れ、日夜豪遊に耽らるゝ榮福の身でありながら、其容貌には常に何となく愁の雲がかゝり、如何にも不愉快の面持が顯はれて居つたので、心ある人々は何故であらうぞと想ひ疑うて居つた。

然しエリオ自身のみは其理由を能く知つて居つた則ち自分は最早天主に背き、永き魔鬼の奴隷となつて居るので、逆も地獄の永罰を免かれることが出来ぬといふ心の愁ひ苦しきは言語にも盡しがたく、富貴快樂は人々の望む所なるも、然し却てそれが爲に絶えず倦み厭き、寧ろ貧しく暮す方を望むやうになり、只管魔鬼の手より脱れんと苦心し、一方また富貴を棄つるに忍びないが、心の中に天主の義怒に觸るゝを畏れ、

折々は聖母マリアの恩祐を仰がんと努め、十餘年の間種々に心を苦め精神を疲らしつゝ苦悶の中に日を送つて居つたのである。

所が一日奇妙にも急に身体が疲くなり睡氣を催したので、机に凭りつゝ眼を閉ちて居ると或夢を見た。それは葡萄牙にある修院の墳墓で、忽ち其處に人の形をした大きな怪物が顯はれ、ある墳墓に近づいて、墓中の死者に向ひ、大聲で「道を守らず徳を修めざる偽りの修士よ、汝今我命によつて出で来たれ」と云ふと、墓中より一人の亡者が出て来た、怪物は斯くして再び數ヶ所の墓に近づき、一々前の如く叫ぶと、偽善者の亡修士が皆起出で、集り、今度はそれが一團となつて修院長の葬られたる墓地前に往つた。其處にはエリオの墓と書して、既に自分の墓が豫備せられてある。怪物は其墓の前に起つて全しく「エリオよ、汝は天主に背き自ら魔鬼の奴隷となりし者なれば、早く我命に従つて出で来たれ」と叫んで居る。が其墓は空虚で

誰も出て来る者が無い。スルと怪物は冷笑しながら「エマリオよ、汝は偽善の面を被つて今も猶世に在るが、遠からぬ中此所に於て見ゆん」と云ひ、此時従うて居つた衆多の亡者は、怪物と共に飛ぶが如く一齊に自分の側に寄り、醜く恐ろしい姿をして自分の魂を押へ附け、強いて之を身体より離さうとするので、エマリオは恐ろしさと苦しさに得地へず、恰も死した者の如くとなつた。所が亡者等は之を怪物の前に引据ゑ、怪物は鐵の熊手を以て之を掻き殺さうとするので、エマリオも今は絶体絶命となり、思はず聖マリアの御名を高く叫ぶと、怪物を始め衆多の亡者等は皆一散に逃げ去つた。

斯くてエマリオは目醒めて見ると、全身に冷汗が流れ、骨身も碎かれし如くに苦痛を感じるやうになつたので、直に其場に跪いて聖母に、生命を救ひ下されし御恩恵を謝し、深し前非を痛悔して以後之が補償をなさんと決心した。それで先づ醫藥も邪書も盡く之を焼

棄て、今まで住み馴れし家を賣り、金銀衣服等を悉く賣しき者に施與し、後自分は唯一人破れ服を身に纏ふたまゝ巴里を去り、途すがら寒暑風雨饑渴の苦みを忍び、人の輕蔑と嘲笑を受けても怨まず、馬小屋に臥して宿り、食を乞ひつゝ本國に向つて旅立つた。數ヶ月の後西班牙のワレソシアと云ふ市に着いた。其時は身も疲れ、力も乏しくなつたので、路傍に腰を下して更久休息して居つた。所が其處へ數十人の修士等が来て、修院でも建てたのか、各自立働いて居るので、エマリオは見るともなしに遠くより之を眺めて居ると、修士等は、或は石を運び、或は木を伐り土を掘る等、一人として手を空しく居る者がなく、皆額よりに玉の如な汗を流しながらも、必の中の愉快さが面に顯れて居る。エマリオは此体を見て嘆息しながら「あわ此人達は眞に福なる人々である。身窮しても吐かず心を潔くして邪念を避け、主に事へて魔鬼を斥けて居る。然るに我は心汚れて慾に耽り、主に背きて惡魔に

事へ、富み榮ゑるに随つてます。貧り、遂に朝夕心に愁ひの雲が漂ひ、一日も安き心がなから」と獨言の如くに云ひ、續いて想ふやう「然し之を告解するの道もあるから、一心に痛悔して罪を詫びん、さすれば或は天主が我重き罪を赦し、我が痛悔の情を憐れし給ふこともあらん」と決心し、直に其地に跪いて聖母マリアの御恩恵を祈り願ふた。そして某修士に會ひ、謙だつて修院長に面會せんことを求めた。修院長は大徳明才の人であつたから、エマリオの容子を一目視て、此人心の中に非常の苦痛があるぞ知つたので、穩かに慰めつゝ來意を問ふと、エマリオは其前に平伏し、哀みながら「私は大罪人で、今心の中に大なる痛苦を感じて居ります」と涙を流した。修院長はエマリオの肩に手を當てつゝ「卿の罪如何に重く多くとも、天主の御仁慈限りなければ、只管痛悔して眞實に告白せられよ、左すれば天主は必ず喜んで其罪を赦し給はん」と、エマリオ斯くと聞いて漸

く安堵の想ひをなし、包まず隠さず、多年の罪惡を一擧げて告白し、胸を打ち涙を流して痛悔した。修院長はエマリオの眞實の痛悔を明かに知つたので、恰も善き牧者が、失ひし羊を獲た如き心地がして一方ならず歡び、直に主の尊前に其罪の赦しを與へた。スルど其翌日エマリオは復び修院に來て院長に面會を求め、「私は主に背き魔鬼に事へ、多年邪慾を縱まにし、貪り驕つて居りましたが、今回主の仁慈を以て其罪が赦されました。それで今後此修院に入つて苦業を爲し、前罪を償うて主に御託を致し度い考であります。何卒閣下私の大罪惡を嫌はず、此願を聽容れて下さい。そして私を無類の大罪人の如くに見做し、修院内の最も卑き職務を與へられんことを」と願ひ、終に修院長の許可を得て修道士となつた。斯くてエマリオは更久此修院に於て苦業を爲しつゝあつたが、後本國のサンマノナ修院に移り、一層嚴しき苦業と補償をして居つた。七年後の一夜、聖堂に於

て久しく跪き、一心に祈禱をして居つた所が、何時の間にかウツラ／＼と睡つて居つた。が少頃して目醒めて見ると、自分の前に一枚の紙が置かれてある。何心なく手に取つて見ると、奇妙にも其紙は、昔日血判した魔鬼に與へた起誓文であつたから、エジプトは大に歎んで聖母マリアに感謝し、之を修院長に見せた所が、修院長も大に喜び、直に此起誓文を火中に入れて焼き棄て了ふた。

エジプトは嚴しき補償を爲すこと約を四十年、後天主の恩寵を蒙つて病氣を治すの奇蹟を行ふやうになり、修士等を始め一般信者よりも聖人として崇められるやうになつたが、竟に病氣に罹つて世を逝り、葬出度天に昇られた。時に降生後千二百六十五年五月であつた。(因に此福者の祝日は十四日であるが、都合によつて茲に載せたのである)

* * * * *

契約の櫃とエルサレムの聖殿と就て(二)

彼のモイセスが主の命を奉じてシナイ山に登り、石に刻める十誠を領けたが、山上には再び雲霧が深く閉して六日の間散らなかつた。そして第七日に雲の中より聲してモイセスの名を呼び、天主の光榮が火の如くであつた。乃でモイセスが復も山に登り雲霧の裡に入つた。其處で四十日の間、何物をも飲食せず、唯天主の訓誨を拜聴し、之を深く其心に刻みつゝあつた。

イスラエル人は、モイセスが屯營に歸り來ないのを心配し、聖人が何れに往つたのであらうと、其踪跡を探ねんとした。が天主は曾て「普通の人は山に登つてはならぬ。上る者は即死す」と宣ひし事があるので、誰も山に探ね往く者が無い。そして天主を恐れ、天主を恨み、遂にモイセスの弟アロンを伴れ來て云ふには「我等を引いて埃及より此所に伴れ來りしモイセ

スが見ぬす、絶えて其往く所も知れない。されば今より菩薩の像を鑄て、我等を安心の道に導けよ」と。アロンは衆人の怒りを恐れて「然らば其通りになすから各自が持てる黄金の首飾を脱して渡せ」と、衆人其命に従ひ、豫想の外多く集つたので、アロンは其黄金を鑄して小牛の形像を鑄造り、其前に祭壇を築いた。所がイスラエル人等を見て大に喜び「是ぞ我等を埃及より救ひ出し呉れし神なり」と、異端の舉動を爲し、其祭壇の前に平伏して贖を敬禮し、飲みつ喰ひつ騒いで居つた。

天主は此体を見て大に怒り、イスラエル人を滅ぼさんと思召されたが、モイセスは之を知つて大に慟き哭き、主の御前に平伏して朝夕彼等の爲に祈り願うて止まなかつたので、天主も竟に義怒を收めて民を滅ぼさざる旨を約された。

大に怒り、直に其石板を擲り碎き、金櫃を焼きつゝふし、尙命じて異端の像を學ぶ者二萬三千餘人を殺させた。其翌日モイセスは復も天主に召されて山に上つた。そして更に二個の石板を造り、之に天主の十誠を領け尙種々の教訓を承けて四十日の後山上より歸つた。其時モイセスの面貌は光り輝き、額の邊より二條の光が恰も火焰が天にのぼるが如くに發して居つた。がモイセス自身は之を知らなかつた。人々は此を見て心に懼れ、敢て之を仰ぎ見る者もなく、以後モイセスは外に出で民を諭す時も、彼等巾を以て己が顔を蔽うて居つた。

之を要するに、往古天主がイスラエル人に契約し給へる大概で、一面には天主が十誠を授けて、人々に賞報あるを知らせ、一面にはイスラエル人が之を心得て其誠律を守り、尙主の御保護を仰ぎ、永く天に於て之を賞で給はん事を望んで居つたのである。

寔にイスラエル人は、天主が電光霹靂の中にシナイ

山に天降つて十誠を授け給へるを見、切に感じて之を尊び之に従はんと決心した。が数日の後主の洪恩を全く忘れ、剩へ偶像を造つて之を敬うて居つたといふ事は、實に惡むべく憐むべき事である。が我等は果して如何であらうか、主の洪恩を受くることイスラエル人よりも多く、而も亦之に報いんとして却て日々主の命に背き悖つて居らぬであらうか、モイセスが永く山上に往居して後、主の光榮に照され、其面貌には火の如き光が發して居つた。信者にして心を穩にし、熱誠を籠めて主を愛するならば、主は其靈魂内に住居して、其中を太陽の如くに光り照し給ひ、天使は之を見て歡び樂み、魔鬼は之を見て驚き畏れるであらう。我等は宜しく自分の靈魂が、今光明であるか暗黒であるかを能く省みねばならぬ。

うして今より以後、イスラエル人が天主を怨みて之に背きしを深く想ひ、自ら誓めて私慾に耽り罪を犯さざるやうに努め、尙モイゼスの面貌が主に光り照され

人々が之に當ることが出来なかつた事に思ひ及ぼし、毎に力を竭して自分の心情を平和にし、清淨にし、以て天主をして我靈魂内に宿らせ參らせるやうに勵まんと堅く決心せねばならぬ。(未完)

五月十四日 (降生後三百年死)

應神天皇時代

聖ボニファシオ殉教

聖女アグラエ痛悔女

第四世紀の初め、羅馬の都に信者なる某官の女アグラエと云ふ者があつた。性來容貌美しく、智慧も亦敏き者であつたが、何故か人に嫁がず、早くより父母に死別れて後は、兄もなく弟もなき獨者なれども、都にも有名き富裕な家業を承繼ぎ、數多の土地家屋を管理し、數百人の僕婢を使用して居つた。

く、萬事を家人のボニファシオに托せて經理せしめ、自己は富めるがまゝに、日々驕奢と贅澤三昧に耽り、遊び樂みつゝ日を過して居つた。家人のボニファシオは性來至つて快活な男で、身体が太く逞しく、之も亦日々酒色に耽り、竟にアグラエと主従の隔てがありながら、早くより私通して邪慾の道に荒んで居つたのである。が此事はいつとはなく公けとなつて、アグラエの評判が悪くなり、全く上流社會に顔出しも出来ぬやうになつた。

アグラエは自己の非過の重きを知らぬでもなく、毎に良心の阿責に咎められて居つたが、何分にも邪情が深く肺腑に浸み入つて、斷然之を制へ避けることが出来なかつた。また一方ボニファシオも朝夕歡喜の色を顯して、心配の氣色もなく良心の咎めも全く無きもの如く、相變らず我儘の振舞をして日を送つて居つた。然し此ボニファシオは何故か貧窮者を受するの心深く貧しき人を見れば毎時之を家に入れて、寒き時には火

を焚いて温め、暑き時には涼しき室に憩ませ、手づから之に食物を與へ、言葉盡して之を慰め勞るなど、其愛情の深きこと不思議な位で、自分け之を以て心の底より悦び樂みとして居つた。それでアグラエも此事を能く知つて居つたから、甘んじて多額の金錢や衣食をボニファシオに與へ、彼が之を以て思ふまゝ貧しき人を濟ふやうにと計うて居つた。寔に天主の悦び給ふ所は、世の人々が難に遭ひ苦みに陥つて居るのを見て、互に相助くることである。それ故彼の二人が邪淫の大罪を犯しつゝありながらも、斯くの如き深き愛情と慈悲の心があるのを見給ひ、竟に其昏迷を治み、特別の恩寵を賜うて彼等兩人の靈魂上の病を醫し給ふこととなつたのである。

一日アグラエはボニファシオに向つて云ふやう「數年來お互に斯く惡事をなし居るが、若しも此儂死して天主の審判を受くるならば、實に由々敷一大事である。之を思ひ考へると誠に吾ながら淺猿しく思ふのである

それで今より以後心を改めて正道に立歸り、再び罪を犯さない決心であるが、御身は如何に思ひ給ふか」と、ボニファシオは之を聞いて大に覺り、私も今後改心して善に向ひませうと誓ひ、其後二人は互に堅き決心して、全く悪事を棄て、善徳に進むこととなつたのである。

其後アグラエは復もボニファシオに向ひ「我等の決心は良いが、猶今日まで犯せし罪を償ふやうに努めねばならぬ。それで我は今日より日頃の汚穢を滅ぼし、之が償ひを爲さんと思ひ立つたのであるが、聞けば今東方の國に於て、熱心なる公教信者が迫害に遭ひ、數多の信者が殺害されて居るさうである。然るに信者の中、或者は、此等の殉教すべき信者を慰め勵まして、其信仰を堅めさせて居る者もあり、或は慘殺されし信者の死體を拾うて葬むる者もあつて、是等の人々は其功業を以て自己の罪の補償となし、死後殉教者と全様に天國の永福を享くるさうであると、我も亦何卒して

左様の働をなし、補償を努めたく望むも、纖弱き女の事なれば兎ても一人にては力及ばず、幸ひ御身は男子にて膽も太く力も強ければ、早く東方の國に往つて此功績を樹て給へ。若し御身が迫害のある地に往き、衣食や醫藥を以て聖人方を慰め、愛と善き言を以て殉教者の信念を壯ならしめば、其功績によつて前罪を償ふべく、斯くて迫害が止めば、官吏に金を與へて殉教聖人の遺物を購うて此地に歸り來れよ、然すれば我は聖堂を造つて遺物を其内に埋め、朝夕聖人に祈つて天主に轉達を求め、以て罪滅ぼしとなさん。此方法如何にや」と。ボニファシオは一任一什を聽き終り、如何にも良き思ひ附きなりと膝を打つて喜び、直様之を承諾して東方に赴く決心をした。

アグラエはボニファシオの早速承諾せるを大に歡び之に數多の金銀寶物を與へて東方の信者を慰め濟はせ、殉教者の遺物を購はせて後事を圖るの便に供した。ボニファシオは之を辭退し、笑ひつゝ「私が御委任を

受けて行き、聖人の遺物を携へ歸つて來た後には、如何様とも御心を盡されよ、然し場合によつては私が致命し、他人が私の骨を携へ歸るかも知らぬから、金銀等は持参するは無益である旨を語ると、アグラエは「我等は今日の機會を以て痛悔と補償を爲さねばらぬのであるから、誠意誠心此功績多き務めを盡されよ」と云ひ、長の旅路なればとて駕籠三挺を用意し、駄馬十二頭に行李を積ませ、尙人足二十人を與へたので、ボニファシオは勇み進んで羅馬を出發し、東方に向つて行つた。

途すがら各地の風聞に耳を傾け、シリシア州のタル市にては迫害が殊に甚だしく、信者に對する暴虐を極め、男女老幼を分たず慘殺する由を知つたので、ボニファシオは海を航つてシリシアの港より上陸し、路路前罪を痛悔し、天主に寛恕を願ひ、殉教の御恩寵を施されん事を祈り求めつゝ、タルン市に着いた。

ボニファシオは市中に住居を定めて後、一日從者に

向ひ「汝等は暫く此家に居れ、我は先づ此地の様子を探らん」と言ひ殘して家を出で、有名な基督教信徒の刑場へと赴いた。見ると今しも二十餘名の信者が刑を受けつゝある真最中で、群衆は黒山の如くに其周圍を取巻いて見物して居る。ボニファシオは直に其人垣の中を潜つて刑場に入り、密に様子を見て居ると、或者は地に倒されて鞭たるゝもあり、或は逆に吊されて煙に臭薫れ居る者、或は兩手兩足を堅く縛られ、鐵棒にて骨身を叩き碎かれつゝある者、或は劍にて身を斬らるゝ者、或は手足を斬放されて死を待つ者もあつて、見物人は孰れも其慘酷しき光景を見て驚き呆れざるはなく、且つ其熱心の信仰に感嘆せざる者はない。ボニファシオも之を見て日頃の惻隱の情が物々として起り吾知らず刑場の中央に進み出で、殉教者の側に立ちながら聲高く之を慰め勵まし、自分も頓て殉教の榮冠を享け、共に昇天の寶を得るやう天主に轉達を給はんことを請ひ求めて居つた。

ボニファシオは生來向く大きな身体の上、紅き上衣を着けて居つたので、早くも官吏等の目に留まり、「彼は何人にして、又何處に來たりし者なるか」を問はしめた所が、刑吏之を尋問せし上、「彼はボニファシオと呼び、遠國より來たりし者にて、現在口に天主を讚美し、國神を侮辱し、信者に勸めて天主の爲に死すべき事を勵まし居れり」と復命した。スルも官吏等直に命じて之を捕へさせ、「汝重き刑罰を免かれんとせば、國神に焼香をなすべし」と云ふと、ボニファシオは官吏等をハタと白睨み「我は已に公に言ひし如く天主公教信者であるから、禮拜するの價値なき偶像をいかに敬ふべき、最早我身命は汝等の手の裡にあれば、思ふがまゝに處分せよ」と、官吏等之を聞いて大に怒り、命じて之を倒さに吊り、鐵の熊手を以て身体を掻き扱らせた。ボニファシオは刑吏の爲すがまゝに任せ、自ら目を開いて天上を仰ぎ、其苦痛を耐へ忍んで少しも聲を出さなかつた。上官は更に鉛を鎗きて其口に注ぎ

入れよと命じた。ボニファシオは此言を聞くや、大聲に祈つて云ふ「主耶穌、此卑しき僕に主の御受難の如き苦みを與へ給ひしを感謝し奉る、願くは主我力を壯にし、我心を堅からしめ、我をして此忤逆の惡徒等の爲に信徳を敗らざらしめ、我に終りまで規誠を守り得るやう守護し給はんことを一と。又衆くの殉教者に向つて「主耶穌の忠僕なる諸兄よ、何卒我を助くるの轉達をなし給へ」と叫んだ。時に多くの信者も亦苦しき責に遭うて居つたが、其中の一人が之を聞いて「蔑もなく御主は必ず御身を救ひ、惡魔の手より脱れしめ、直に天國の福樂を得せしめ給はん」と云ひ終るや、衆信者は聲を合せて「アーメン」と唱へた。

今まで傍で觀て居た數百の異教人等は、此時心の中に大に感動し、大聲に「公教信者が敬ふ所の天主は眞の神である。彼等を救へ、彼等を救へ」と口々に喊びつゝ、刑場内に亂入し、中央に設けたる神の祠を取つて投げ棄て、偶像を打碎き、各々手に木や石を取つて官

吏等の前に迫つた。茲に於て官吏等急に信者を纏めて監獄に送り、自分等は命からく駕籠に乗つて官舎に引揚げた。

そして其翌日朝早く、數多の兵を遣はして刑場の内外を嚴しく衛らせ、然る後ボニファシオを引出して種種責め苦めたが、如何にしても彼が改宗せぬのを見て取り、今度は大鍋に松油を注ぎ入れ、其中にボニファシオを投げ入れよと命じた。刑吏等急ぎ準備に取懸り、松油のブツブツと煮初めし時、聖人を抱へて鍋の中に入れんとした所が、奇妙にも其鍋は突然大きな響を發して破れ碎け、煮返へる松油は四方に逆しつて傍に居つた刑吏等を燒き傷つけた。がボニファシオのみは獨り無事であつた。官吏等此体を見て大に駭き、半响ばかり身動きもせず之を見て居つたが、遂に「羅馬人なるボニファシオは、皇帝の命令に背きて公教を信じ、改宗の見込なき者なれば、彼を斬罪に處す」と宣告した。

ボニファシオは之を聞いて地に跪き「全能の天主、聖子耶穌よ、願くは主の僕なる我を助け給へ。主よ天使を呼び來つて我靈魂を受けさせ、至惡なる魔鬼をして主の僕の天國に進むを阻めざらしめ給はん事を。また主の聖公會を救ひ、惡徒の毒害より脱れしめ、主の僕等を殉教聖人の列に置き、主よ、主の聖子、及び聖靈を世々に讚美せしめ給はんことをアーメン」と禱り終つて後、除かに刑吏に向ひ「いざ吾を殺せ」と、未だ言ひ終らぬ中、刑吏は劍を揮うて聖人の首を斬り落した。此時忽ち大地が震動したので、見物の異教人等口々に天主の尊嚴を讚め頷へつゝ、右往左往に逃げ散じた。

さてボニファシオが召連れて來た人足等は、皆異端を信する者で、主人が公教信者なることを少しも知らなかつたのである。そして主人が家出したまゝ歸つて來ないので、多分何處かに往つて遊興にでも耽つて居るのであらうと思つて居つた所が、人々の噂によれ

主人に匹敵せし人が、昨日刑場の露となつたといふので、好奇の心に動かされて刑場に行つた。丁度刑吏に出逢ふたので、「羅馬より来た斯々の者で、昨日死刑に處せられた者を見て頂きたい」と云ふた。スルと刑吏は人足等を刑場内に入れ、ボニファシオの死體を見せ、尙斬落した首をも見せると、人足等は驚き見て其主人なることを識り、大に驚きつゝ一人の者は其屍體に取絶り「私等は、主人が例の遊興にでも耽つて居らるゝことと思ひ疑うて、誰も主人が斯くの如く信仰の爲に潔き最後を遂げられたとは思ひませんでした。何卒私等が勿体なくも主人を悪く疑ふた時を赦して下さい」と涙ながらに詫び、改めて刑吏より甚壯烈な最後の模様を聴取り、今更の如く深く感動した。そして數多の金を刑吏に與へて其屍體を購ひ、貴重な薬を塗つて腐敗を防ぎ、之を包んで羅馬に持歸つた。

さて羅馬に在りしアグラエは、ボニファシオ出發後、三月の間の消息もなかつたが、自分は日夜罪を悔

い、償ひに努め、心を竭して善業を勵んで居つた。一日ボニファシオが立派な殉教を爲し、人足等が其遺骸を持歸りつゝある由を、不圖耳にしたので、且つ驚き且つ喜び、直様數名の靈父に願ひ、全行して之を迎へた。靈父等は其遺骸を羅馬の或聖堂に入れて數日間禮を行ひ、アグラエは此聖人の爲に立派な墳墓を作り、時々其墓に行つて祈禱黙想をして居つた。時は降生後三百年であつた。

其後アグラエは益々熱心に徳を積み功を樹て、家財を賣拂うて病院を建て、施薬院を造り、其餘は盡く之を貧しき者等に施與し、只管善業を行つて居つた。斯くて尙十三年間此世に生存し、主の特恩を蒙つて竟には奇蹟を行ふの權能をも賜はるやうになつた。後病氣に罹つて平和の中に此世を去り、死後も人々より少からぬ尊敬を受けて居る。

尙聖ボニファシオの遺骨は、今日羅馬の聖アレキヤオ聖堂内に保存されてある。

黙想

契約の櫃とエルザレムの聖殿と就て(三)

太古天主は、イスラエル人が常に異端に傾き、動もすれば偶像を信じ、之に拜禮するのを知り給ひ、深き恩寵を垂れて彼等の大なる罪を寛恕し給ひ、尙他に一の聖物を與へ、人々をして親しく之を見て天主を想ひ起させ、之を崇め之に靠絶らさせやうとし給ふた。即ちモイセスがシナイ山に於て十誠を授からぬ前、天主はモイセスに命じて宜はく「汝セテムと名づく樹を以て、長さ五尺二寸、幅三尺、高さ亦三尺の一の櫃を作り、黄金を以て其内外に着せ、四隅に黄金の環を穿ち、それに黄金を着せたる二本の柄を附けよ。又長さ五尺二寸幅三尺の黄金を以て其蓋を作り、之を贖罪所と稱し、其上に天使の像二臺を鑄て之を立てよ、其像は互に顔を見合はせ、羽翅を兩方より交り合ふやうにして贖罪所を覆ふやうに爲せ、將來我より示し諭すこ

とあれば、必ず此櫃の上なる二天使の中より聲を發すべし」と。

モイセスは十誠を受けて後、聖旨を奉じて右の櫃を作り、主の命を受けて天主より給ひし十誠の石版と、イスラエル人が毎日天主より降り賜ひし彼のマンナを金の器に入れたものと、アローンの權杖とを其櫃の内に藏め、之を契約の櫃と名づけて聖の聖なる所に安置した。

天主は更にモイセスに命じて一の大きな聖帳を作らしめ給ふた。此聖帳は聖堂の形に似て、金銀の柱を建て、屋根は四重となつて、下の二重は布、上の二重は紅と黄の毛皮とを以て雨もりを防ぎ、四方の壁には天使、蘇鐵、美しき花等の形を織込みたる美はしき幕を張り、別に極めて美しき幕を以て二室に分ち、奥の室を聖の聖なる所と稱して、前の契約の櫃を安置してある。

イスラエル人が荒野の旅を續けて、此處彼處と移り

行く度に、此聖帳を其地に立て、天主に祭禮を献げ行
うて居つた。そして他に移らんとする時には、此等の
物を丁寧に包んで持運び行くといふ風になり、自然此
等の聖物を見て、心の底より天主の存在を認め、漸く
にして偶像を拜し異端に傾かぬやうになつたのであ
る。

想ふに天主の授け給ひし十誠の石版は、黄金を以て
作らしめ給ふたのは之を以て十誠の尊貴と、天主が其
櫃に臨んで示し給ふ威嚴とを明かに表はして之を敬は
しめ給ふのである。我等信者は度々聖體を拜領し、天
主降つて我心の中に臨み給ふのである。されば我等は
黄金を以て自分の心を飾るの必要があるまいか、黄金
は清浄と熱愛の表象であるから、此清浄熱愛の信者は
聖體を領くるも差支ないが、性情、不潔にして聖愛な
きは決して之を領けてはならぬ。我等の必情は今果
して如何なる状態であらうか。

我心は眞に是れ契約の櫃にして、全能なる天主の住

オは親しく之を見聞して大に感じ、如何なる人々なれ
ば斯くも愛情深く、國家に對して誠忠あるぞ」と不審
に想うて居ると、或人が之に應へて「此地の人々は、
他の者等とは違つて種々の神や偶像を拜せず、唯天地
萬物を造り、且つ之を主宰し給ふ唯一の天主を信じ、
三百年前に此世に降誕せられし其獨子が、柔和、謙
遜、貧窮の徳を示して我等に倣はんことを説かれ、遂
に人々の罪を贖はんが爲め、あらゆる恥辱と苦難とを
受けさせ給ひしを感謝しつゝ、日々力を竭して其徳に
倣ひ、心を盡して天主と人とを愛し、以て死後永遠の
福樂を得んと望んで居る人々である」と告げた。バコ
ミオは天性徳を愛し、善を好むの人であつたから、此
を聞いて覺ゆる感涙に咽び、其れ以來毎に此天主公教
の道を想ひ、愈々眞理なるを覺つてよりは之に従はん
と努め、度々歩みを停め目を擧げて天を仰ぎながら、
「天地を造り給ひし大主よ、我は不肖なれども、獨り身
を終るまで主に事へ奉らんとす、求むらくは主の善美

み給ふ所なるを能く辨へ、以後絶えず力を竭して、
清浄と熱愛の黄金とを以て之を裝飾るやうに努めねば
ならぬ。(未完)

五月十五日 (後生後二九二年生)

仁徳天皇時代

聖バコミオ修士

聖バコミオは羅馬所屬のエラフト州の人で、降生後
約二百九十二年頃、中等の生活をして居つた異教人
の家に生れたのである。二十歳の頃、國家の爲に從軍
し、所々に轉戦して勇氣を顯して居つた。
一日自分等の軍隊が途中に於て糧食が乏しくなり、
數日の間空腹のまゝ進軍し、漸くにして或小邑に着い
た所が、その邑の人々は早くも其情狀を知つて歡び迎
へ、各自先を争うて飲食物を給し、懇に之を款待した
上、言葉を盡して兵士を慰め勵まして居つた。バコミ

を我に顯はし、我をして主を認め、主を崇め尊ばしめ
給はん事を」と祈つて居つた。

そして其後は力を竭し心を盡して他人を自己の如く
に愛し、常に主に向つて心の底より祈つて居つたが、
戦ひ果て、後家に歸り、某信者に就て教理を學び、洗
禮を領けるの恩寵を得た。所が其夜、自分の手の上に
露の如き水が落ち、之が蜂蜜の如くに變る夢を見、全
時に奇妙の聲がして「心を此事に留めよ、之れは天主
が特別の恩恵を垂れて汝を助くるの徴候である」と。
バコミオは大に歡び勇み、愈々志を立て、世俗を棄
て、終身道を修めんと決心した。折よく其附近の曠野
に、バレモンといふ徳高く、有名な隱修士があるとい
ふことを聞いたので、即時に尋ね往つて面會を求め、來
歴を告げて其弟子たらん事を願ふた。(時に彼の隱修士
の首たる聖アントニオ、聖ボロ等も尙ほ存命せられ
て居る時代であつた 一月十七日) バレモン修士は之を
聞き「其志望は良いが、逆も自分の如き嚴しき苦業は

出来まい」と告げると、バコミオは「私は唯一生懸命に師の命に従ひ申さん、惟々弟子と爲し給はれ」と。其決心の堅き様が充分に見えたので、パレモンも「然らば」と、答へて早速弟子となし、其時よりバコミオの高き志を嘉みし、我子の如くに愛し、力を竭して訓へ導いて居つた。

此師弟の生活の様は、相共に席を編んで其日の業となし、晝は心を亂さずして手工を勵み、時に善き言を以て慰め樂みとし、時に聲を擧げて聖歌を謳ひつゝ、主を讚美し、日没後は一切沈黙を守つて祈禱、黙想をなし、夜半に至つて方に地に臥して眠り、翌早朝目醒むれば直に起き出で、復も心を主に向けて祈禱をなし、酒は勿論肉類魚類を喰はず、唯麥餅と鹽とを食し、清き水を飲みて生命を繋ぎ、編みし席は毎月之を賣却し、其代金を以て、足に任せて所々を歩きながら貧しき人を濟ひ助けて居つた。越えて數年、バコミオは大きき其徳功を積み、主の命を奉じて大事を擧ぐべき時機

が来た。

此曠野の中に大きな河があつて、ナル河といひ、其河中にタベンナと云ふ地がある。某日バコミオは其地に於て祈禱をして居つた所が、何者か自分の心に囁く如く「此地に修院を造り、此處に移つて修道せよ」と告げ、續いて又も黙示によつて、其修院の修士の守るべき規則を知つた。乃でバコミオは急ぎ歸つて師のパレモンに此事を告げると、パレモンも「开は天主の御命令である、予も偕に往かんことを願ふ」と云ひ、兩人全行して河を航り、タベンナに往つて一の修院を建てた。是が昔し東方の信者が、全居して修道する最初の修院であつた。其以前の隱修士等は、何れも皆名目人里離れた地に往き、手業をなすも祈禱を誦ふるも單に一人のみであつた。が修院は之と異り、修士等は祈禱、黙想、作業を爲すには、すべて皆全時になさねばならず、尙相互に其長所を發揮して徳を行ひ之を利用し、其短所を補ひ、難きを治し得る等、善に進み徳を

操るには好き方法であつて、修道士中完徳に達する者が數限りもないのは、誠に故あることである。

バコミオは其時三十三歳であつた。修院が完成する間もなく自分の兄が來て修道志願をしたので、バコミオは欣んで之を迎へ、親しく之に教へ、之を導いて居つたが、其兄も日々徳行が進み、善き生活を續けるやうになつた。

其後バコミオの名聲は四方に傳はり、來つて弟子たらんと望む者が多くなつた。師のパレモンも此修院の基礎が定つたのを見て、以前の地に歸り單獨で道を修めて居つたが、一年も経たぬ中平和の死を遂げた。

バコミオは日々弟子の多くなるのを見、心の中に益徳表を修士等に示さんと欲し、以來一層さびしき苦業を行ひ、熱心に祈り、十五年の久しき間、床に就いて眠りし事なく、夜間倦れて睡眠を催すと、直様冷かな石の上に坐り、首を屈め、壁に靠れて眠り、毎に絶えず主を讚美すること能はざるを遺憾として居つ

た。それで修士を始め雇人に至るまで、皆師の徳風に倣うて善良となり、互に競うて善徳に進むやうになつた。又此修院の規律は至つて厳しく、身体の強壯なる者でなければ之を守る事が出来なかつた。然しバコミオは体弱き者にして修道者たらんと望む者をも棄てず此等の者に對しては特別の規定を設けて居つた。そして常に修士等に向つて「苦業大齋をなして身を修めんとする者は、各自其力相應に之を行へ、強き者は嚴しく身を懲らし、弱き者は其度を緩ふして病に罹らぬやうになすべし」と。

バコミオに又一人の胞妹があつた。彼女は久しく兄の面貌を見ないので、曠野を尋ねてタベンナの修院に辿り着き、兄に面會せんことを乞ふた。取次の者がバコミオに向ひ、「令妹様が門前に來て、是非一度御面會が願ひ度い」と申して居らるゝ旨を述べると、聖人は「令妹に歸れよと傳へよ、我身は安く心は樂し、必ずしも對面するに及ばず、修士等の首位に居る我は、

自ら現世の安慰を棄つるの善表を行ひ、以て之を修士等に示さねばならぬ」と。取次の者之を令妹に告げた。令妹は之を聞いて大に哭き、唯一度の面會を再三再四嘆願したが、聖人は斷じて之を允さない。乃で令妹は最後に「罪人なる我の此院に來たりしは、我兄に道を修むるの法を問はんが爲めである。ざるを何故に斯く罪女を棄て給ふぞ」と、聖人之に應へて云ふ「汝が眞實修道の法を求むるならば、我は汝の爲に新に一の修院を造つて與へん、宜しく安心して家に歸り、吉報を待つべし」と。流石の妹も之には返す言葉もなく、泣くく家に歸つた。聖人は直に約を踐んで、河を隔てた所に小さな修院を造り、工事が竣功すると其旨を妹に傳へた。乃で妹は數人の全志を伴れて其院に住み、其後許多の貞女が來て従ふやうになつたので、更に大童貞院を造り、聖人の令妹は其院で善き生活を送り、終に立派な死を遂げたのである。

聖バコミオは斯くの如く力を竭して徳を修め道を守

り、人々の救靈の爲に心を傾けて居つたので、魔鬼も力を盡して之を妨げ害せんと圖り、或時は數人の形像を以て顯はれ、バコミオの進み歩まんとするを待ち、大聲に叫んで「路を讓れ、聖人のお通りなるぞ」と、是は魔鬼がバコミオをして自ら殆らしめんと圖つたのである。又或時はバコミオの祈禱黙想に乗じ、奇怪の姿を顯はして聖人に見せ、以て彼を驚かせ、其心を亂させんとした。又或時は妓女に装ひて聖人の周圍を取巻き、以て善き思を妨げ、邪念を起させんとした。が聖人は少しも此等の誘惑に陥らぬので、魔鬼は益々怒り、果ては時々棒を以て其身體を打ち、之を傷つけ血を流させた。が聖人は其都度天主に倚絶つて少しも懼れない。斯くの如く數年の間、悪魔は種々の手段を以て烈しく聖人を誘ひ害せんとした。が聖人の忍耐強くして、天主に信頼するの力を減ぐ事が出ないのので、其後遂に再び聖人を誘惑せぬやうになつた。時に天主は聖人の功績を賞で、悪魔を除き、病氣を醫し、

豫言をなす等の外、尙種々の奇蹟を行ふの神權をお與へになつたので、其聖徳は愈々輝き、善き名聲は倍々遠くまで傳はり、ケレキサンドリア市の司教聖アタナ

オオも、時々バコミオと面會し、互に相愛し共に祈り、難に遇ふと慰めあうて居つた。

數年の後には此タベンナの修院も手狭となり、年々修院を造つて六ヶ所にも及び、修士の數が千餘名にもなつた。バコミオ聖人は漸々年老いたが、院規を守ることに最も嚴重で、巧に修士等を導き訓へて居つた。修士等は日々課程として一枚の蓆を編むの規則があつたが、某日一人の修士は特に勵んで二枚の蓆を編み、之を殊更人々の目に附く所に置いた。聖人は其卑しき心想を悟つたので、直に其修士を呼んで「卿は魔鬼の爲に弄ばれ、無益の方に心を費し力を勞したが、其力を正しき道に用ひざりしは實に惜むべき事である」と厳しく警めて後之を罰し、以て修士等に傲慢虚榮の奴隸とならぬやうにと諭した。

また年幼き修士の母親が、我子を修院より出して還俗させんと望み、司教に嘆願した上、その許可を受け、修院に往つて司教の許可状と共に其子を修院より出さんことを願うた。バコミオ聖人は一伍一什を聽取つて後、其幼き修士に此を傳へ「母親に面會して家に歸るべし」と命じて其場を去らうとした。所が其修士は「何卒小弟を一生涯此院に置いて下さい」と泣繼り、家に歸ることを肯かない。乃で聖人は「司教の命に従はねばならぬ」と云ふと、彼は「院長にして小弟の將來の救靈を保證して下さるならば家に歸ります、院長が若し之を保證せずと仰せらるゝならば、小弟は此院を去る事が出来ませぬ」と告げた。聖人は「我は何して左様の事を保證することが出来やうぞ」と云ふをも待兼ね「既に保證が出来ぬと仰せらるゝ以上、私は如何にして此院を離れ申さず」と其處に泣き崩れるので、聖人もそれは尤もであると察し、改めて母親に向ひ「卿身は此事を保證し得るか」と尋ねた所が、母親は心に

懼れながら「罪女は兎も請合ふ事が出来ませぬ」と答へ、自ら其錯りを悟り、我子に勸めて院内に於て善き志を遂げよと云ひ聞かせ、涙ながらに生別れを爲し、後河を航つて聖人の令妹の居られる童貞院に入り、多年身を修め徳を積み竟に善き終を遂げたさうである。

また此修院に、過分に己を信じて居る修士があつて、常に「自分は殉教して大なる功績を樹てん」など、揚言して居つた。聖人は屢々之を責め誠めて居つたが、少しも聽容れなかつた。或日の事聖人は彼に「某の山中に往つて薪を伐り出せよ」と命じ、尙ほ「彼の山中には無頼野蠻の徒が多いから、能く注意して必ず其害より避けよ」と附け加へた。が彼は想ふに「これは殉教するに最も好き機會である。恠で之を避くべきぞ」と。次の日朝早く山に行つた。所が果して數名の野蠻人が不意に顯はれ出で、逃げんとする彼を捉へて嚴しく打撃し、手足を細つた上山深く連れ行き、偶像の前に引

黙想

聖バコミオの夢

マテオ聖福音書に「我に來れ、總て勞苦して重荷を負へる者よ、我は汝等を回復せしめん(二八)」と。

聖バコミオ修士は、洗禮を領けし夜、自分の手の上に露の如き水が落ち、之が蜂蜜の如くに變り、夢を見たまさうであるが、是は如何なる意味であらうか? 露水は夜間大より地上に落ちて草木を潤ふすもので、此露水なるものは、常に天主の聖恩が人の心の中に降つて之を益するを表はし示し、また此露水は至つて冷かなるもので、宿るに家なき旅人に取っては、一夜の露も苦しく、斯る場合には此露水が常に人が天の路を歩むの辛苦を表はすものである。

又世の職人や農夫は、各自其働きを爲すには全く手にて之を行ひ、兵士が軍に従うて敵を禦ぐも手にて軍器を執り、名士の著述も亦手にて之を寫すに由る。さ

据ゑて之に燒香せよと強ひた。彼は始め其命に従はなかつたが、野蠻人等刃を以て首刎ねんとするので、俄に銳氣挫け信仰が暗み、恐ろしさの餘り燒香すると叫び、終に淺猿しくも偶像に燒香した、そして後隙を偷んで野蠻人の手より逃れ、急ぎ修院に逃げ歸つた。バコミオ聖人は之を見て其事情を察知し、嚴しく其罪を責め諭して罪を補償はしめ、此機に乗じ、修士等に過分に自己を信するの罪を避くべきことを警めた。

聖人は斯くして七十歳の長壽を保たれたが、降生後三百六十二年五月に病氣に罹り、到庭快復の見込なきを悟つたので、善終の覺悟をなし、修士等に此修院の規律を守つて死後の永福を得よと勸め、最後の祝福を領けて後安らかに此世を去つて天に昇られたのである。

れば手の一字を以て世上種々の動作の意を指し示すのである。

蜂蜜は乃ち甘き食物で、常に此二字を以て人の心の悦樂を表して居る。

聖バコミオは公教に従ひ洗禮を領けた。是は聖軍に投じて神の伍に従ふ者と謂ふべく、及吾主を拜禮して之に師事する者と謂はれた。そして主に従うて天國の險しく苦しき路を歩み、身を終るまで主に離れまじと望み願うて居るのであるから、主も亦之を賞せられ、夢に身体の中の手を表はし示し、以て「汝が既に此路を歩みたいと望むならば、當に肉身の安逸快樂を棄て、只宜しく勤め働いて善功をなすの覺悟をせよ」と諭し、又其手の上に露水を落して「若し汝忠實に天主に事へんとせば、須らく心を用ひ力を竭して善事を行ひ、艱難辛苦をも辭せず、憂へ悲みをも忍べ、さもなれば心亂れて得る所なし」と。

少頃して又其露水を蜂蜜と變らせ、「若し汝恒に天國

五月十六日 (降生後一六五五年死)

龜山天皇時代

聖シモン、ストック修士

の険しき路を志して歩むならば、一時苦しくとも、其苦みが長からず、又其努力が久しからずして天國の福樂を享け、露水が變じて甘き蜂蜜となるが如くに悦び樂しまん」とこの意を教へ諭されたのである。

聖バコミオは此深き意味を會得したので、洗禮を領けて後は、肉身の快樂を全く棄て、辛苦艱難を忍び、只管善を操り功を樹つるに努めた。それで其辛酸が僅か數十年にして、今日永遠無窮に福樂の身となり得たのである。

我等は此默想により、常に天國の永福を願ひながら、辛苦をも忍びず、善功をも努めず、肉身の快樂を逐ひつゝ、日を送つて居りはせぬかと能く考察し、以來聖バコミオの徳に進みしを倣ひ、一心に力を竭して天主に事へ、天國に入るの路を歩み、以て死後の榮福を得るやう堅き決心を爲ねばならぬ。

し品級の秘蹟を領けて司祭となり、尙も餘念なく獨り修道して居つた。

カルメルは乃ち昔しユデア國の山の名で、其山上に有名な修院があり、其院の修士は世々特に聖母マリアを尊敬して居つた。當時此地は同々教徒の爲に蹂躪され、信者等靈肉共に云ふべからざる患難を受けるやうになつたので、多くは其地を離れて他方へ赴き、修士等も其多くは西の諸國に往つて修道の地を尋ね求めて居つた。そして其中の數人が英國に來たので、シモンは之に従うて其會に入つた。其後數年も経たぬ中、多くの英國人が此會に入らんことを願ふやうになつたので、此地に一の修院を造ることとなり、シモンが其取締を委託された。が其後尙漸々と月日の経つに従うて入會を望む者が殖へて來たので、終に數ヶ所に修院を造り、シモンは會長の補佐に任命せられた。

此時東方諸國は回々教徒の爲に益々亂れ荒され、カルメル山に居る修士等の生命も旦夕に迫るやうになつ

たので、會の總長はシモンに向ひ「海を航つてシリアよりカルメル修院に往き、修士等と共に其院を離れて西の方に来たるべき旨を勸め説き來たれ」と命じた。それでシモンは事急なりと知り、即時命を奉じて東に向つて出發した。

かくてカルメル修院に着いたが、麓より此名山を見て忽ち心の中に、往古ユリア聖人が顯した奇蹟の事(七月一日)を想ひ起し、尙無數の修士等が世々修め積みし所の徳行を慕ひ、心靈上の好き感懐が渾然として心の中に燃え、良久仰いで修院を眺め、俯しては默想して居つたが、漸く山に登つて修院に入り、自分の使命を告げて西の方に往くべきことを説き勸めた。

ところが衆多の修士等の意見が紛々として合はず、或者は西に行かうと云ひ、或者は此地は本會の根原地であるから、輕々しく之を棄て去るに忍びぬと云ふ者もあつて、意見が纏らず、數日に涉つても解決が出来なかつた。折から忽ち回々教徒が此院に押寄せ來たの

で、修士等は如何ともする能はず、各自修院を逃れ、海邊を指して避難した、が其中の數人は逃げ遅れて暴徒の爲に殺害され、續いて他の者も追跡され、今も薩殺にされんとする刹那、全能なる主の御手によつて奉教軍が繰出して来た。そして回々教徒を撃破り、修士等を保護して無事カルメル修院に還らせた。其後シモンは此修院の山中に大きな巖洞のあるのを見出し、其巖洞で六ヶ年も獨修し、全く肉身のなき天使全様の清き生活をして居つた。そして六年の後復も回々教徒が襲ひ来たので、聖人は數人の修士を引連れ、船に乗つて英國に歸り、翌年總長が死去したので推されて其後繼となつた。

其後數年の間に、此カルメル會は佛蘭西、西班牙等の諸國に興り、聖人聖人が各所に顯はれて聖教は益々旺盛に行はれて居つた。總長のシモン、ストックは八十餘歳の時、最早臨終の近づきしを知り、愈々熱心に善徳を行つて居つた。一日祈禱の時聖母マリアは多く

の聖女を隨へて御出現になり、御手にカルメル會修士の聖衣一重を執つて之を聖人に與へながら「我愛するシモンよ、汝此會衣を受けよ、是は我名の號衣なれば、之を以て能く人を兇惡より保護し得る。凡そ此衣を身に著けて死する者は、我必ず其靈魂を永遠の火より救ひ遣はさん」と仰せられ、其儘御姿が見ゆるやうになつた。(今日公教會に於て聖衣を授けるのは之より始まつたのである)。其時聖人は大に喜び、厚く聖母の御慈仁を感謝した。

此日シモンは、市に行きて司教に面會し、教皇陛下に此事を奏上せんことを乞ふ爲め一人の修士を伴つて市中に行つた。所が此市の某富豪が、響人の爲に重傷を負はされ、一命も覺束なき有様であつた。此富豪は平素より其身持が悪く、常に公教に背いて惡魔の奴隷となつて居り、今臨終に迫つて居りながらも改心せず、尙も公教に對して種々と嘲り罵つて居つたのである。然し其富豪の弟なる人が懇父で、兄の重傷の報に驚き

直に現場に往つて改心させんと努めたが、其甲斐もないので、急ぎ自分の室に歸り、主の尊前に跪いて一心に救ひを祈り求めて居つた。スルと奇妙な聲が三度も聞けた。それは「外に出て我僕シモンを尋ね、救ひを乞へ」といふのであつた。靈父は是れが誰の聲であるか分らないが、直に馬に乗つて外に出た。所が折好くシモン聖人に逢ふたので、委細の事情を述べて聖人を兄の家に導いた。此時兄は最早人事不省となつて居つたが、聖人は祈禱をなして後聖衣を取出し、之を兄の身體の上に載せ、一心不亂に、聖母に此大罪人の改心するやう、其恩祐を願ふた。スルと幾もなく其大負

傷者が正氣附き、全時に奇妙にも自ら前非を痛悔して告解を爲し、信望愛の至情を以て其夜呼吸絶へた。そして其死後兄弟等に現はれ、自分は聖母の御轉達に依つて地獄の苦罰を免がれた旨を語つたさうである。之によつても吾々信者は、聖衣の効能が如何に力あるかを知り、切に之を戴くやうに願はねばならぬ。

シモン、ストック聖人は、其後尙數年世に存へ、所へ修士を遣はし、修院を建立し、力を竭して信者に聖衣を戴くやうにと勧め、自分も一層厚く聖母の御保護に寄籠つて居つた。後英國を以て各國を巡つて修院を視察し、佛國のポルド市に行つた時病氣の爲に倒れ、遂に善き最後を遂げられた。時は降生後千二百六十五年、御墓に於ても數多の奇蹟が顯はれたのである。

默想

カルメル聖衣會

(一)

カルメルは乃ちシリアの山で、地中海より之を視ると、東南より西北に延び、其頂上は百八十餘丈あり。そして之を登つて見ると、東北の方面は斷崖絶壁といふ有様であるが、山脚は地平にして小川が其中を曲り流れ、西南の方は一帶に樹生々草繁り、松青く白き海邊に接して居る。また山の傍には美しき巖洞が

多く、真に天然の絶景である。此地は昔ユデア國の所屬で、其幽雅の景色を賞でし之を「カルメル」と名づけて居つた。其意味は天然の樂園といふ事で、當時ユデア人は、總て美麗なることを語る時には、毎時此「カルメル」を引合に出すので、聖母の讚美する聖歌の中にも「爾の頭は「カルメル」に似たり」といふ句がある。

舊約聖書に載つて居る所の聖后は、公教會と聖母マリアの意を表したものである。當時カルメル山の幽雅美觀は稱するに足るものであつたが、御子基督が救世の大功業を遂げられてより後、此山の美と貴きとは一層光り輝くやうになつた。即ち此地は天主が聖母に與へ給ふたものと見做すべく無数の人々が此地に住居して善を行ふたからである。實に彼等の人々は天使の如く、否、食物を用ひ睡眠に就くので天使には及ばない点もあるが、然し性慾を制へ、辛苦を忍ぶ点から見れば、天使にも勝つて居る人々であつた。

此時のカルメル山と、其處に住居する人々とは實に美妙であつて、地は春夏秋冬の別により、其美を變へて人の目を悦び樂ませ、人は四季を通じて公教會の聖事に従ひ、救世主と共に或は苦み或は樂み、或は哀願し、或は讚美し、天主聖子の思、言行を以て自己の思、言行に照らし合せて居つた。實に此神たる美、其姿とは、山水の美も遠く及ばぬ所である。

寔に此地と此人々とは美妙であつた。此山に居つて種々の樹や草花を見ると、恰も天主の肖像が善人に現はるゝこと、昔日此世に在りし時の如くに霞、風の聲、鳥の啼きを聞くも、天の祕言密語を聴くに似て、人の心情を惹くこと肉眼を以て視るべからざる所にまでも及ぶのである。また人々の誦ふる讚美歌が石洞の邊より響くのを開けば、至善至美なる萬物の王は、地中より聲を發して其見る所を述ふるに似て居り、其聲は朝な夕な絶えず續いて居る。また聖堂に於ては常に香爐を用ひて禮を行ふが、カルメル山は數百年來の善

き香爐で、聖詠の聲が之に由つて出で、絶妙の薰香が朝夕天に向つて慢々として上り、以て主の聖心を悦ばせ樂ませるに似て居る。

然るに此美妙なる地も、回々教徒の爲に敗滅した。主耶穌が會て弟子等に訓へて「世の終に當つて我は再び降り來らん、汝その時我は猶信仰を世に見出すべしと思ふか(ルカ一)」。宣ふた如く、公教會の旺んに興る各地は、將來必ず屢々サタンの領となるのである。是に由つて考ふれば、信仰は各所に於て將に滅びんとし、天主の聖子が天降り給うて、生ける人と死せる人とを審判せんとする際には、人々の多くは肉身の慾に耽り、魔鬼の奴隸となるであらう。思うて茲に至ると、公教會の旺盛なる地に住居して信仰を有つ者は寔に幸で之に反して天主に背くの地に住居する者は禍である。乃で我等は山水の美よりも人靈の善なるを賞で、常に己が靈魂を善くすることに努め、幸にも信教の自由なる我邦に住居し、早くも洗禮を領けて永生に入る

べき者となし給はりし主の洪恩を感謝するやうにせねばならぬ。(未完)

五月十七日 (降生後一五四〇年生)

後陽成天皇時代

聖バスカル、バイロン

聖バスカル、バイロンは十六世紀の初め西班牙國に生れた人である。家道貧しかつたから、幼き時より他家に雇はれて牧畜に従事して居つたが、心様正しくして信仰厚く、力を竭して業務に勵んで居つたので、全業者よりも敬愛せられ、主人も亦世嗣の無い所から、彼を養子となし、家業を擧げて悉く彼に與へんとしたが、バスカルは謙遜を以て之を辭退し云ふ「主耶穌の此世に在せし時、富貴を輕んじ貧窮を愛し給ひしゆゑ、私も之に倣ひ従ひたい望みであります」と。

かくて二十歳の頃郷里を離れてワレンシアの地に移

り、フランシスコ會に入つて修道者たらんことを願ふたが、院長が准さないで、已むを得ず暫く復た某金満家に雇はれて牧畜に従事して居つた。そして天主を愛するの情極めて熱く、主日祝日には必ず修院に行つて彌撒を拜聴し、聖體を領け、主人には忠實に事へて満足させて居つた。一日も朝早く羊の群を引いて山に行つたが、聖堂の大鐘が遠くより鳴り響くので、今司祭が彌撒中聖體を奉擧せらるゝの時であらうと知り、直に聖堂の方に向つて跪き、遙に此を拜禮して居つた。スルど何時の間にか一位の天使が祭服を着けた司祭の姿をなし、手に恭しく聖體を捧げながら、忽然として自分の前に現はれ起つて居るので、バスカルは且つ驚き且つ喜び、其場に跪いて聖體を領け、終つて平伏した。主の洪恩を謝し、主を讚美した。そして二十四歳の時多年の希望が叶うて修院に入るの准許を得終に修道士となつた。

このフランシスコ會の規律は至つて厳しく難くあつ

たが、バスカルは之をも難しとせず、院内に於て最も卑しき務を選んで之を行ひ、尙私に嚴しい苦業をして居つた。そして祈禱と黙想の外には暫くも作業を止めず、作業中にも絶えず心を天主に向けて居つた。飲食は清水と麥麵と野菜とのみを用ひ、身には粗き毛織の衣を着け、鐵の鎖の帯を締め、地を床とし、木を枕となし、毎夜幾に二三時間より眠らず、其餘は黙想をなし讚美歌を誦へて居つた。

後命により所々の修院に移された。それで時には此處に在り、時には彼處に在つて定まらなかつたが、自分は特に旅に在る者の如くに見做して、少しも世間の物事に愛着せず、何處に居るも樂んで住み喜んで去つて居つた。そして毎も門番を爲し食堂の係に命せられて居つたので毎日貧しき者が食を貰ひに来ると、バスカルは喜んで之を迎へ、厚く慰め勞つて後食物を與へて居つた。院長は此體を見て餘りに厚きに過ぐるを責め、人を濟ふ爲に此修院を顧みないのは不都合であると戒

めた。バスカルは言葉を卑ふしながら一私は、吾主耶穌は常に貧窮の様を借つて人の心を試み給ひしと聞いて居ります。それ故貧窮の者を見る毎に、私は或は是れがキ耶穌ではなからうかと想ひ、かく爲すのであります」と、院長は財答へを聞いて復び責めぬやうになつた。

また彼は或時は菜園に働き、或時は病者を看護し、或は種々の事を爲しながらも、毎も其心の愉快さは面にも言にも現はれ、之を見る者も覺えず樂しさを感じて居つたと云ふ。又彼は事毎に細心の注意を拂つて居つたが、折々院長に責め罰せらるゝ事もある。然し其程度彼は謙遜と従順とを以てその責罰を受け、全輩の者が之を慰めると、彼は少しの辨明もせず、只「長上の言は天主の言である、一句の言も能く道理に合ふのである」とのみ答へて居つた。

此時代背教の徒が佛蘭西に入込み、所々の都市を亂し騒がせ、特に靈父修士等を見れば必ず之に害を加へ

て居つた。其時此フランシスコ會の總長がパリ市に住居して居られたが、此騒動の爲め所々との文通が絶え萬事に不便であつた。某時バスカルが命を奉じ、數ヶ所の修院よりの書翰を携へて總長の許に贈り届け、其歸り途心の中に、何うか背教人に出遇うて殺害さるゝ事とならば、實に幸であるかと思つて居つた所が果して某所で背教の徒に出會ふた。然し唯罵り辱かじめられ、僅かの傷を負はされたのみで殉教するに至らなかつたから、心の中に面白からず思ひつゝ歸つて來た。

其後バスカルは、其功德の賞報として天主より聖學に通ずるの資を與へられた。それでフランシスコ會でも有名な修士等は時々來てバスカルと問答したが、孰れも皆其妙論に感せぬはなく、其後總長は彼に書物を著して人々に誨へよといふ命を下したが、バスカルは快く之を承知した。勤き時より會て書を読み文を學んだ事がないが、其書物を見ると、文法に誤りがなく、

記述せし意味が深く廣く、讀み行く中に知らず識らず書中の人となつて了ふやうである。ワレンシアの大司教が之を讀んで驚き訝り云ふには「吾等平素腦を疲らせ目を害しつゝ學を修め書を讀みながら、一農夫の祈禱や黙想を爲せしにも及ばぬ。成程此著者は才學なく智識なき者ではあるが、一度其著書を讀むと、云ふべからざる妙味を覺ゆ心が高く飛んで天に近づくやうな感想がする、然るに我等は之に反して自ら其學に傲り其智に矜つて居る、恐らくは天國に入り難からう」と。

聖バスカルはまた奇蹟を行ひ豫言を爲すの特恩をも與へられ、度々疫病を滅ぼし、傷を治し、不具者を醫して居られたので、後には遠き地よりも病人を運び來るやうになつた。

一日聖人は某所に於て人々を集め、教理を説き聽かせて居つた。之れが終ると、其地の二人の富豪が聖人を招待して饗應をした、其席上聖人は一人の富豪に向ひ「御身は近き中に必ず天主を見奉るやうになる宜

く善く靈魂肉身の事を辨へられよ」と告げた。其富豪は素よりバスカル聖人が能く豫言せらるゝ事を知つて居つたから、其言葉を信じて少しも疑はず、熱心に善終の準備をして居つたが、果して數日も経たぬうち中風の爲め俄かに死去した。また一日聖人は某司祭に向ひ「貴下は今日此世を去るから、速く善終の用意をせられよ」と、乃で司祭は告解と聖體の兩秘蹟を便けて死を待つて居ると、其豫言の如く數時間も経たぬ中平和の死を遂げた。かくの如き事は良々で、聖バスカルが人の生死を豫言して、未だ曾て間違ふた事がなかつた。

聖人の徳行が斯く輝いて來ると、悪魔は之を誘ひ害せんと種々に力を竭し、或は邪淫の法を取り或は傲慢の道に導かうとするなど、手を替へ品を代へて迷はさんと居つた。一日容貌美しき女を教唆して聖人の許に遣り人無き折に乗じて之を誘はさせやうとした、が聖人は直に棍棒を執つて起上り、狂犬を逐ひ拂ふ如

聖バスカル、バイロツの祈禱



く其女を去らせた。悪魔はまた天使や聖フランシスコの姿を真似て顯はれ、良き言葉を以て其徳を讃めた。が聖人は直様悪魔の謀計なるを覺り、但に於らぬばかりでなく、却て益々自ら卑下し、自らを苦めて居つた。一日悪魔は又も吾主が十字架に懸り給ふの御姿を以て顯はれ、バスカルに向つて「汝は我愛する弟子である、それ故、我は特に顯はれて汝を慰む」と、聖人は之を悪魔の所爲なりと知り、嚴しき聲を以て「汝悪魔よ、如何なれば天主の羔たる御姿を借つて來りしぞ、主耶穌は永世に汝に勝ち給へるを知らざるか、無用の業を爲さずして疾く去れ、主耶穌の苦像を敬愛する者は汝を懼れず」と。悪魔は之を聞いて大聲に叫び吼つゝ逃げ去り、以來再び聖人を誘ひ害せぬやうになつた。聖人は平素特に聖體を愛慕するの情が烈しく、聖堂に入る事が、恰も親友の室にでも入る如くで、其處に天主を見るが如くに拜禮し、祈禱をして居つた。そして聖堂の外に在つても、聖愛の情が盛んに燃ゆ、所構

はず平伏して敬禮して居つた。尙聖體の外聖母マリヤを愛して之に依靠り、絶えず善き臨終の恩寵を願うて居つた。

聖人五十歳の頃には、其徳望が遠近に傳はり、來つて道を聴く者が多くなつた。聖人は謙遜を以て之に應へ、心を盡して正道に導き善を行はせて居つた。また靈父等が來て道を聴く時には、聖人は之に應へ勸むるに「凡そ天主の聖教を説き、救靈の道を宣ふる時には、必ず語を飾つてはならぬ、唯天主が心の中を照し給はんことを祈り、十字架や聖櫃の御前に於て正しき道を默想し、自ら其心情を動かすやうに爲ねばならぬ。既に自己の情緒が動けば、一層の謙遜を以て人を導き人に訓へるのである。斯の如くにして始めて他人を感化させて善に向はしめる事が出来る。然もなくば縦令如何に能く辯論をなし多言をなすとも、只人の耳を榮ましむるのみで、其心を開らざり照らす事が出来ない」と。實際靈父等の中此奨勵に従ふた者は、果して人を感化

魂を永遠の火より救ひ遣はさん」と仰せられたのであ
る。我等は今此黙想によつて熱心なる信者は、絶えず
大聖人の妙徳を追念し、其舊蹟の地を愛し慕ひ、度々
其地に行つて其轉達を求め、自ら心を勵まして其善徳
に倣ふやうに心懸けねばならぬ事を知つたから、今よ
り後常々是を黙想して靈魂上の利益を得るやうに努め
ねばならぬ。(未完)

五月十八日(1) (第三世紀)

應神天皇時代

聖ベナンシオ少年殉教

第三世紀の中頃、羅馬皇帝が厳しく公教信者を迫害
して居つた際、今は伊太利の所領となつて居るカメリ
ノ市に、ベナンシオと云ふ少年があつた。年齢僅に十
五歳ではあるが、智慧優れ信仰厚く、常に熱心に天主
を敬ひ愛して居つた、一日總督が駕籠に乗つて市外に

樹に吊下げ下より火にて焚殺さんとして居つた。スル
と復も天使が顯はれてベナンシオを救ひ助けた。某將
校は一度ならず二度までも此奇蹟を見て大に感動し、
一面には兵卒をして復び少年を害せぬやうにさせ、一
面には自らホルフヒリオ靈父の所に走り行きて洗禮を
志願した。此將校は後に洗禮を領けて好き信者となり、
終に殉教の榮冠を得て天に昇つたさうである。

羅馬の總督はベナンシオ少年が天使に救はれたとい
ふ事を聞き、餘りの不思議さに之を信することが出来
ず、今一度彼を捕へよと命じ、自らベナンシオに向ひ、
「富貴を興へ安樂の生活をさせてやるから、今より皇帝
の旨に従うて基督教を棄てよ」と言葉巧みに説きす
すめた。がベナンシオは少しも懼れ憚からず、尙眞理
を以て基督教の眞の宗教なる事を述べたので、總督は
怒つて之を監獄に入れ、數日の後アツタナと云ふ辯士
を遣はして之を説諭させた。

出た、其時ベナンシオは市外に於て路の傍に立ち、唯
獨り大聲を擧げて「あゝ憐むべきは迷信である。異教
徒の敬ふ所の菩薩なるものは、皆昔日の男女にして、
罪に穢れた者ばかりである。如何して之を聖なる神と
崇め得るぞ、賢人君子は決して之れを信じ之に従ふべ
きものではなく、惟宜しく無二の天主、即ち天地萬物
を無より造り給ひ、後聖子耶穌基督を天降らせて人と
成らせ、以て萬靈を救ひ贖はせ給ひし御方のみに拜禮
すべきである」と憚りなく公言した。基督教迫害の嚴
しき折柄とて、總督は此言を聞いて其少年の大膽なる
に驚き、直に部下に命じて之を捕へ、苦痛を加へさ
せた。

兵士等命に依り、少年ベナンシオを引捉へて樹に縛
りつけ、手痛く之を打擲して居つた。所が奇妙にも一
位の天使が何處よりともなく顯はれ来て、兵士等を逐
拂ひ、ベナンシオの縛を解いて其儘姿を消した。少頃
すると兵士等復も集り来てベナンシオを捉へ、今度は
ンシオに面會し、卿は總督の厚意をも容れず、自ら死
地に陥るのは如何にも氣の毒である。我は御身の爲を
思ふの餘り、其不心得を忠告に來たのである」と等と甘
く説き、尙進んで「我も以前基督教を信じ、死後天国
の永福を望んで居つた者であるが其後熟く研究した結
果、此等の望みは誠に虚しくして、憑むべからざるも
のなる事を知つたので、遂に聖教を棄て、矢張先祖傳
來の信仰に立歸つたのである」と述べ、續いて公教に
對して種々と批難攻撃し、只管少年の心を迷はし亂さ
んと努めた。がベナンシオは斯かる淺薄な理屈や陋劣
な手段には迷はされず、寧ろ一句一句彼の錯謬を責め、
明かに自分の信仰の理由を述べたので、流石の辯士も
顔色なく、這々の体で歸り去つた。

總督は再び少年を法廷に呼入れ、種々糾問した上其
齒牙を悉く抜かしめ、之を縛つたまゝ、市外の泥池の中
に投げ込まさせた。が天使は復も顯はれて、此少年を
救ひ助けたので、總督も手の下しやうがなく、部下の

判事に命じて其罪を判定させた。判事はベナンシオに對し、國法を犯し邪教に從ふの罪を責めた。然し少年は威儀正しく「既に度々述べた如く、今國民の崇拜して居る菩薩なるものは、人間の未來に於ける賞罰を掌る者ではない、惟唯一の天主のみ生死を審き、善惡を判じ、善人に對して天上の窮りなき福樂を得せしめ給ふのである」と答へて居つた。所が其時判事は、奇妙にも高き臺の上より地上に轉げ落ち、倒れたまゝ大聲に「ベナンシオが敬うて居る所の天主こそ眞の神である。吾等は菩薩を棄て、天主を拜禮せねばならぬ」と叫び、其儘遂に死去した。茲に於て總督は、ベナンシオを圓戲場(二月一日參照)に入れよと命じ、新に飢ゑたる獅子數頭を其内に放たせた。然るに獅子は皆に聖人を害せぬばかりでなく、恰も飼犬が主人の足の許に眠つて動かないやうに、能く聖人に馴れ親んで居る。そしてベナンシオは好き機會として數多の見物人に向ひ、公教の教理を説いて

其時傍に於て、兵卒等は身體疲れ、力減り、咽喉が濁いて呻き苦んで居つた。ベナンシオは之を見て直に其處に跪き、彼等の爲に熱心に祈つて後、十字架の記號を爲しつゝ、足許を掘ると、清き水が滾々と湧き出た。之を見た兵卒等は、嬉し涙を流し、地に伏して飽まで之を飲み、終つて一同が今迄の無禮の罪を謝し、堅き決心を以て洗禮を領けんことを望み、遂にベナンシオの手より洗禮を領けて芽出度信者となつた。總督は之を聞いて烈火の如く憤り、最早あらゆる手段を盡した後であるから、直にベナンシオを始め彼等一同を市外に送り、斬首の刑に處せよと命じた。聖人は之を聞いて大に歡び、道々新洗禮者を勵まし、身命を抛つて永生を圖れよと諭し、刑場に着くと一同が地に跪いて死を待ち、聲を揃へて主の聖名を誦へて居つた。そして

少頃すると一同が及にて首刎ねられ、其靈魂は相共に天國指して昇つた。之と全時に俄に雷が轟き地が震ふたので、人々は大きに駭き、是は無辜者を殺した爲であらうと互に嘔き合つて居つたが、數日の後其首謀者なる總督は、急病に罹り、悶き苦しむつゝ敢なき最後を遂げられたと云ふ。

五月十八日(2) (後生後三百年)

應神天皇時代

聖テオドト、並に童貞女七名の殉教

降生後三百年、羅馬カラシア省のアンシラ市に、テオドトといふ信者があつて、宿屋を開いて渡世して居つた。當時テオクレシアノ皇帝は、全國に命を下して、天主公教を信じ之に従ふ事を禁じ、若し此命令に背く者は嚴しき罰に處すべき旨を傳へた。アンシラ市

に暮させやる旨を聞いた。が聖人は少しも懼るゝ色なく、聲朗かに天主の尊大無比なることを讃め頌へ、其善美の無限なる事を説き、自分の堅き信仰を表はした。官吏等大に怒り、直に命じて聖人を刑場に縛らせ、鐵爪を以て其身体を搔き爛らせ、酒と酢を其傷口に注ぎ、火を以て其胸部を焼き、石を以て其面を亂打し、其齒牙を打碎させた。其時テオドトは「尙我舌をも割け、信者は默然として語を發せずとも、天主は猶其聲を聞き給はん」と叫んだ。

やがて刑吏等聖人を一先づ監獄に入れたが、聖人は其途々自分の傷を指しながら人々に向ひ「昔日天主の聖子が致命して我等を贖ひ救うて下さつたのである。されば信者たる者將に此理に由つて機に遇へば殉教するのである」と、五日の後テオドトは再び監獄より引出され、紅く焼きたる瓦の上に於て責め打たれ、後また鐵爪を以て其肉を搔き爛され、終に斬首の宣告を受けた。聖人は大に歡び、刑場に行くに聲高く天主に向

つて、今日までの洪恩を謝し、死後の榮福を享くるの恩寵を願ひ、終つて見物の信者等に向つて「御身等我死を悲まず、我をして魔鬼に勝たしめ、信仰を保たしめ給ひし主の御恩を感謝せられよ。我主の仁慈を蒙つて天国に昇らば、必ず絶えず御身等の祈禱を轉達がんと。言終ると同時に首斬られて其靈魂は天に昇られ、其屍體は、生前自分が某靈交に願うて造つて貰ふた聖堂内に殮めらるゝことゝなつた。

黙想

天主に對する内外の敬禮

聖テオドトは苦しき刑に處せられながら官吏等に向つて「尙我舌をも割けよ、信者は默然として語を發せずとも、天主は猶其聲を聞き給はん」と。寔に此言葉の通り、天主は至尊なる神であるから、少しの勞もなくして絶えず萬靈の思ひ考ふ秘密を視給

ふので、言語の發ないうちに早や豫め各人の意中を知り、笑聲が聞ぬうちに各人の心の中の喜びを知り、哀泣のまだ聞ぬうちに各人の胸中の憂ひを明かにし給ふのである。

或者の中には公教會にては信者をして明かな聲で祈禱を誦へさすのは、如何なる意であるかと問ふ者がある。是は他でもない、人は各々肉身と靈魂とより成り、二つながら天主の造り給ひしもので、また將來天主の永賞を受くべき筈となつて居る。それ故肉身も靈魂も共に天主を崇め其御恩を感謝せねばならぬ。乃ち靈魂は能く信望愛の徳を思ひ、肉身は能く地に跪き平伏して祈禱を誦ふる譯で、二者共に其當を得た禮儀ではあるまいか。

然し肉身の顯はす敬禮は、必ず心の底より出るものでなければならぬ。縦令地に跪き疊に平伏して祈禱をなすとも、心の中に天主を愛し慕ひ、之に信頼するの意思がないならば、开は全く虚禮で、天主は見て之を

納れず、聞いて之を允し給はない。倘し或は心美しからずして地に跪き叩頭して祈禱をなすの虚禮をして、其心が天主の方に傾かず、只他人の爲に其見榮を飾るやうでは、天主は實其所禱を聽容れて下さらぬばかりでなく、實に其虚偽虚榮を憎み厭ひ給ふのである。公教信者が靜寂な地に獨り居て、誠心より仰いで主を愛慕し、默然として其善美を頌へ、其聖徳を感佩し、其福樂を希なれば、舌を動かさず聲を發せずとも、天主は實に能く之を聽き給ふので、是こそ神と人との心が相通づるの玄義で、信者の歡樂苦愁は主の苦愁歡樂と相通じ、主の聖心の限りなき慈愛が、極まりなく寛容し給ふのである。乃ち主は信者の誠意を聞き給うて暫しも捨置き給はず、其樂みを見ては共に樂み、其憂ひを見ては共に憂ひ、其需むる所を見ては之を施し、其畏るゝ所を見ては之を拒ぎ給ふのである。

彼の電線は少時間を以て能く、言を萬里に通するが、而も其れが見ぬないのである。また其事が不思議では

あるが、然し人の心が主の聖心に通ずるの玄妙とは比べることが出来ぬ。まして世の人々は此電線が百般の事を通じて能く人を益することを甚だ貴んで居る。我等信者も主の御教に通じて善を行ふならば、其貴さが之に百倍するのではないか、されば之を以て善き生活を爲し、善き終を遂げ、終に永福永貴を得るに至つては此上もなき妙法であらう。

我等は此黙想によりて、地に跪き叩頭し、聲を發して祈禱を爲すは、乃ち肉身上の敬禮を示すもので、其禮は真情より出るものでなければならぬ。さもなくば虚禮となり、或は人に頌められたさに之を爲すならば、天主は之を憎み厭ひ、常に益なきばかりでなく、却て害があるといふ事を知り、尙信者は誠心より主に向ひ、沈黙して主に叫ぶならば、其心の密なる聲は即時主の聖心に通じ應へるのである。是が無上の寶で永貴永福を得るの基であるといふ事を知つた。されば我等今より以後、恒に誠意誠心を以て肉身上の敬禮をつくし、

力を竭して其靈魂を潔め正しくし、以て主の聖心に結び合はさんと努め、日夜我心の憂ひ樂みを主の聖心に通じ、以て主と共に生き、主と共に死なんことを心懸けねばならぬ。

五月十九日

(降生後二二九四年即位)

伏見天皇時代

聖ペトロ、セレスチノ第五世教皇

降生後二百餘年に、伊太利國の某村に中等の生活をして居つた農家があつた。夫婦の中に子女があつて第十一人目の子をペトロと名づけて居つた。母親が此兒を産む時、夢に此子が成人して後、修士の如き服装をして往來して居るのを見心の中に、此兒が將來必ず家を出で、修道に身を委ぬるならんと樂んで居つた。數年の後、ペトロの父親が死去したので、其後母は女の纖弱き手にて子女を教へ育て、居つたが、特に此べ

トロのみには費用を惜みず勉學させ、以て將來の幸福を望んで居つた。兄や姉は、母親が特に弟を可愛がるのを見て、心の中に不快を感じて居つた、然し是を別に言語には出さなかつたのである。

却説ペトロは其後漸次成長するに隨ひ、其徳も亦日を逐うて進み、心潔白にして質樸であつた。一日母親に向つて云ふには「私が祈禱を爲すとき、時々聖母マリアと天使の御姿を見る」と、母親は再三再四其事の眞偽を問ひ試みたが、其都度ペトロは眞實である旨を應へるので、母親は半信半疑の中に彼に向ひ「目下麥苗はまた青くして穂も出ない時季ではあるが、私は新麥が喰べたいから、何卒何處かに行つて新麥を持ち歸つて呉れ」と云ふた。ペトロは「何うか今一二ヶ月待つて頂きたい、今何處に行つても新麥などは有りませぬから」と願ふたが、母親は之を聽かず、お前は既に異常の御恩寵を蒙つて聖母マリアの御姿を拜する程であるから、何卒聖母にお願しては呉れまいか」と云ふ

ので、孝心深きペトロは實にもと思ひ、快く承知して袋と鎌とを手に執つて家を出た、そして途々母の望みを協はさせるやうにと聖母に願ひながら、自家の麥畑に行くと、奇妙にも一畝の麥が早くも熟して居るので、ペトロは嬉し涙を流しつゝ聖母に感謝し、之を持つて家に回へつた。母親も今更の如くに驚き感じ、以來我兒の徳行の非凡なることを知つて益々歡び樂んで居つた。

斯くてペトロは二十餘歳の時、家を出て山に入り、或洞内に住居して獨り道を修め、昔のアントニオ聖人の所業を模範とし、力を竭して之に倣ひ従うて居つた。そして三年の後羅馬市に行つて品級の祕蹟を領け、終ると原の山に歸り、以前の如く心靜かに獨修をして居つた。

某年黙想中、偶々司祭がミサ聖祭を獻げ行ふの責任の事に思ひ及ぼし、我知らず叫んで云ふには「吁卑しき我は司祭の聖職に墜り斯かる重く尊き任務を果し

得るであらうか」と、次で又想ふやう「數多の聖人中
 致て司祭の位に陞らなかつた方もある、然るに徳功乏
 しき我は如何して此聖き職責を盡し得やうぞ、此任を
 運くるには今日以後ミサを行ふ事を中止しやう」と、遂
 に意を決して彌撒を献げず、惟毎日日課を誦へ、祈禱
 黙想して天主に黙示を祈り求めて居つた。

所が其近くの某修院の院長が病氣に罹つて死去せら
 れたが、一日ペトロに現はれて「御身疑を去つて、常
 の如く日々彌撒を献げられよ」と、ペトロ答へて云ふ
 「許多の大聖人すら、司祭に陞り祭を献げざる者もあ
 るに、我等如きものは何して之を献げることが出来や
 うぞ」と、院長の靈之を聞いて「若し司祭の職責の重
 く大切なることを論ずるならば、天使等は如何なる感
 應を起されるであらうぞ、慈愛深き天主は人をして之
 を行はしめ給ふのであるから、人は宜しく之に従はね
 ばならぬ。御身之を辭するなく、毎日謙遜を以て主の
 尊前に在る如くに祭を献げ、以て主を悦ばせ人を益す

るやうに爲ねばならぬ」と、ペトロ靈父は之を聞いて
 大に感じ、厚く教訓を謝し、以來日々充分の覺悟をな
 し、熱心なる信仰を以て彌撒聖祭を献ぐるやうにな
 った。

三十歳の時になつて二少年の弟子を得た。それでマ
 セラといふ山に住むこととなり、偕に祈禱を唱へ、讚
 美歌を誦うて相互に功を通じ、日々厳しき生活をして
 居つたが、某心の安樂は譬へやうもない。そして鐘が
 無いが毎日耳に鐘の聲が聞へるので、其時に三人が心
 を合せて聖母を讚美し、大禮日になれば數人の聲が自
 分等の聲に合せて天主を讚美して居つた。其美しき聲
 其調子よき曲は未だ嘗て耳に觸れない美妙な響であつ
 た。

遠近の人々は此師弟三人の徳行を慕ひ、常に此山中
 に來てミサを拜聴し、終つて各自多少の金錢を義捐し
 て居つたが、後此金錢を以て一の聖堂が建ち、全時に
 弟子が多くなり、各自其聖堂の側に小舎を作つて住み、
 親しく聖人を召して厚く其勞を稱ひ慰められた。

聖ペトロは身に餘る光榮に浴したので大に歡び、急
 ぎ山に還つて會を興した。所が數年ならぬ中に好き結
 果を擧げ、三十六座の修院と六百餘人の修士を得た。
 彼等は日夜天主を讚美し、絶えず外に出て士民を導き
 諭し、主を悦ばせ人を救うて居つた。聖人は之を見て
 一段落とし、自分は弟子等に分れて曠野に入り、只一
 人隠修して居つたが、其名は久しからずして各地に傳
 はり、遠近の信者等來り訪ふ者斷ねぬので、聖人はム
 ロマといふ修院に入つた。

降生後千二百九十二年ニコラス第四世法皇が逝去せ
 られた。樞機官等が集つて新教皇を選ばんとしたが、
 二十七ヶ月餘も議が合はなかつた。ペトロはムロマ修
 院に於て、日夜天主に祈つて其後繼の誰なるかを示さ
 んことを願うて居つたが、一日黙示を蒙けて「若し早
 く新教皇を推し選ばぬと、天罰必ず近づかん」と、聖
 人此言葉を主の命の如くに見做し、直様手紙を認めて

師の徳行に倣うて居つた。ペトロは馬の尾を以て衣を
 作り、其上に或は粗き鐵の鎖、或は鐵板を腹に巻きて
 帶に代へ、食物は毎日一度野菜とパンのみを用ひ、
 毎年御復活前の四十日、聖母被昇天前の四十日、諸聖
 人の祝日前四十日、御降誕前の四十日間は一層の厳し
 き苦業大齋を爲し、三日の中に只一食を取るのみであ
 つて、是の如く二十年間も續けて居つた。

聖人は日々弟子の多くなるのを見て、規則を設け會
 を興さんと思ひ立つた。然し斯ることは先づ教皇の許
 可を得ねばならぬので、其機を待つて居つた。所が當
 時教皇は司教等をリオン市に聚め、聖議會を開かれた
 ので、聖人は山を出で、佛蘭西に赴き、教皇に謁見し
 て「今回新しき會を興し、此に入る者は聖ベネチクト
 の定められた戒律を守らせる考へであるから」とて其
 准許を願ふた。時に聖人年五十三であつた。教皇は豫
 てよりペトロの大徳を聞きつて居られたので、快く之
 を聽容れ、新に會を興し、弟子を納るゝ事を准され、

某樞機官に贈り、此默示の旨を傳へた。丁度此日樞機官等が其事に就て會議を開いて居つたので、某樞機官は直に起つてペトロより寄せられし手紙を讀上げて後、「吾等廿七ヶ月餘もかゝつて向心を全ふして一人の教皇を選ぶ事が出来ない、就ては此ムロヌ修院の聖人を選んで如何であらうぞ」と述べた所が、一同も開は適任者であるご全意し、一議にも及ばず全聖人を選ぶこととなり、古禮に照してペトロを教皇となし、人を遣はしてムロヌ修院に聖人を迎へさせた。

聖人は使に接して大に驚き、固く之を辞らんとせしも既に當選した後であつたから、己を得ず修士等に別辭を告げて山を離れ、恭謙の態度を以て驢馬に乗り、アクイレアに向つて進んだ。シ、リアとハンガリアの二王は駕を送つた。沿道の人々等之を見て、昔日主耶穌基督が御苦難の數日前、驢馬に跨がつてエルザレムに進み給ひし事を憶ひ出さぬ者がなかつた。聖人はアクイレアに着くと司教に降り、次で即位の大禮を

行ひセレスチノ第五世として教皇と爲られた。時に御年七十三歳であつた。

教皇の位は公教會最高の位で、太だ重く聖とき職分であるから、聖徳も才學も兼備はつた者でなければ其任に堪ゆることが出来ぬ。セレスチノ第五世教皇は、其聖徳の方面より見れば充分に備つて居られたが、其學識に至つては充分でなかつた。何分にも幼き時より世を避け隠修して居られたので、世態人情が明かでない、胸中に一片の至誠を以て事に當られたが、在位僅か五ヶ月にして自ら其任にあらざるを覺り、遂に教皇の聖位を避け、修院に回つて修道せんと決心せられ、宰相等の阻むるをも聽かれなかつた。

かくて降生後千二百九十四年十二月三日、セレスチノ教皇は樞機官會議に臨み、一通の親書を示した、其書中に「我れセレスチノ第五世は、老年にして體弱く、繁雜なる事務を執り大業を經理し難く、且つ靜寂の地に於て徳を修め、平和なる餘生を送り度き希望なる故、

今日甘んじて教皇の位を避けん事を願ふ、望むらくは衆宰相商議して別に新教皇を選ばん事を」と。樞機官等之を聞いて感動を禁せず、皆其決心の堅きを知り、協議して後其辭位を承認した。聖人は早くも粗き修道服を着けて人々に別辭を告げ、飄然として故山に歸られた。樞機官等は更にポニファシオ第八世を選んで教皇とした。

聖人は教皇の位を去つて後、直に修院に歸らんとしたが、新教皇は其徳風を慕うて之を放さないで、一夜潜に逃れて或山奥に走つた。そして此地で十餘月の間隠修して居られたが、聖徳益々輝いて未來を豫言し、病者を醫す等の奇蹟を行つて居られた。一日新教皇は三人の樞機官を遣はして、親しく聖人を慰問させた。三人は山上に進み聖堂に入ると、聖人は彌撒を獻げてをられるので、一同跪いて聖祭に與つて居つた所が、彌撒中聖人が聖體を奉擧する際、聖人の身体が空中に浮び、兩足其地上を離れ、良久して後徐かに地に下り、

默想

公教會の階級に就て

我等が聖教と稱して居るのは、主耶穌基督の國とい

ふことで、洗禮を領け、天主を崇め尊び、聖會の全道

を信する者は皆此國の民である。世の大小各國には、君民士庶の別があり、官吏にも上

下數段の階級がある。公教會に於ても亦其如く、主耶

之を委ねると委ねざるに由るのである。司祭も亦聖

は不滅にして自ら之を棄つることも出来ねば、他人も

之を削ることが出来ぬ。それで司教となりし者は、縱

令教皇は能く其職を罷めさせて之を用ひざる事があつ

ても、其司教たる品級を去らせることが出来ず、司祭

となりし者も、縱令司教は能く其職を削ることも、其位

階を削ることが出来ないのである。つまり司教となり

命に由つて一堂を理むるやうになつて、始めて位階と

權柄とが全うなるので、此等の事は世間と公教會と同

じであるが、次に全じからざる所を少しく述べやう。

乃ち世間の大小官吏の位階は、其内容が虚にして實

がない。何となれば君王は隨意に能く官位を陞して普

通人民の上に居らしむるも、亦隨意に能く其官職を削

り、之を貶して普通の民と爲すことが出来るのである

から、位人臣を極むる者と雖も一度其職を削られて後

五月二十日 (降生後一三八〇年生)

後花園天皇時代

シエナの聖ベルナルヂノ修士

ベルナルヂノは降生後千三百八十年に、伊太利國

エナのマツサといふ市に生れたので、世之を呼んでシエナの聖ベルナルデノと云ふ、名高き家に生れたのであるが、不幸にも三歳の時母を喪ひ、七歳の時父を喪ひ、叔母の手に引取られて教養されたのである。

幼き時より天主を崇め敬び、聖母を愛し敬ふことを學び、聖堂内の聖事に與ることを樂みとなし、彌撒答を爲すを喜び、柔順にして愛情深く、一日も叔母が貧しき者に施與を爲さざるを見て、「叔母さん何卒主の聖愛によつて此者を濟うてやつて下さい、さもなければ私は食事も爲難い」と云ふた。叔母は之を聞いて悦び、直様其者に食を與へ、ベルナルデノに向つて、人を愛するの徳を勵むやうにと説いた。ベルナルデノは八歳の時より土曜日毎に大齋を守つて聖母を敬ひ、死するまで之を堅く實行して居つた。

十一歳の時シエナに行つて勉強した。其學徳が日増に進み、信仰が熱く燃ゆ、特に貞潔を其生命の如くに愛し、一句の穢れた語を聞いても憎悪の念が面に顯はれるといふ風であつたから、友人等もベルナルデノに接する時には、特に其言行を慎んで居つたといふ、そして十七歳の時聖母會に入り、放課後病院に行つて患者に服藥を進め雜用の爲に動いて居つた。三年の後此地に疫病が大に流行し、病院内に於ても毎日二十餘名の死者があつた。其時ベルナルデノは身を惜まず、日夜病院に在つて内外の事務を經理しながら病人の肉身と靈魂とを救はんと努め、大に好き結果を擧げた。そして疫病が終滅した後、自分が病氣に罹り、四ヶ月の間起居も出来ぬ位に重くなつたが、能く病苦を忍び、他人の償罪の爲に之を犠牲として居つた。

病氣全快後、益々徳を操り苦業を勵んで居つた。一日主の苦像の前に跪き、熱心に默想して居ると、奇妙の聲が心の底に響いた。それは「ベルナルデノよ、汝我を見よ、萬物を棄て萬苦を嘗めて十字架に釘つけられしにあらすや、汝も今より真心を以て我を愛し、世務を棄て、自ら我十字架に釘つけられよ」と。ベルナル

ルデノ之を聞いて大に感動し、直に命に従はんと、家を出でてフランシスコ會に入つた。時に年二十二であつた。

此フランシスコ會の修士等は、特に貧窮と謙遜の徳を尊んで、最も賤しき服裝を爲し、最も薄き食物を用ひ、而も此等の物は皆丐食し來つたものである。ベルナルデノも命を奉じて、粗末の服を纏ひ、洗足となつて食を乞ひつゝ市中を巡つて居つた。兒童等之を見て譏り笑ひながら跟き従ひ、親戚の者等之を見て悦ばず、自重せずして家名を辱しむるなぞ、罵つて居つた。然しベルナルデノは喜んで其侮辱を甘んじ、益々堅く會則を守つて居つた。

數年の間斯かる嚴しき修行を爲して後司祭に陞つた院長は其後ベルナルデノに命じ、世間に出て布教させた。ベルナルデノは性來咽喉に病氣があつて、聲氣があまり明かになかつたから、此時より聖母に祈願を籠め「私は命に由つて、以後布教に従事せねばならぬや

うになりました。何卒聖母の御力により我咽喉の病ひを治して下さるやうに」と願うて居つた所が、奇妙にも急に聲氣が明かとなり、數千の人々も能く其聲を聞取ることが出来るやうになつた。ベルナルデノは數十年の間専ら此務に任じ、到る所人々先を争うて來り聴き、改心する者が夥しき數に上つた。

一日一人の者が此會の修士に向つて「布教の爲に働いて居られる司祭にして、才學も辯舌もベルナルデノ師に勝れた人も多數あるが、然し人々を善に導き惡を棄てさせるの枝備に於ては、ベルナルデノ師の右に出づる者がない、是は如何なる故であらうか」と訊いた。其時修士が之に應へて云ふ「ベルナルデノは内心熱切にして、吐く所の言語は火の如くであるから、聞く者は何しても之に燃されずには居られぬ」と。又同會の一修士はベルナルデノに向つて、道を説き人を感化するの秘法を尋ねた所が、聖人の云はれるには「只天主の光榮を求め、事々に人を己の如くに愛し、絶えず自ら

其を實行せよ、此法に従へば聖神が必ず降つて其者に賢智を賜ひ、以て人を感化させるから、聞く者之に感ぜざるなく、又善に向はざるを得ないのである」と。

此時ベルナルヂノは奇蹟をも行うて居られた。一日瓦匠が高さ屋根の頂に上つて居つたが、此人素と信仰なく、折柄ベルナルヂノは例の粗服を纏ひ裸足のまゝ其下を通り過ぐるのを見て、之を譏り笑うて居つた。所が幾もなく其瓦匠が過つて頂上より轉び落ち、骨を碎いて死にかゝつて居るので、人々は急ぎベルナルヂノの跡を逐ひ、此事を告げて救助を求めた。聖人は快く立歸つて其側に行くと、瓦匠は聖人を見て涙を流し這は自分の罪の罰であるから、到底助かる事は出来ぬと、深く痛悔して罪状を告げ、臨終の覺悟をして居つた、聖人は厚く之を慰めて後、十字の聖號を書くと、不思議にも其瓦匠の傷は忽にして全く癒れた、又多年不治の病に罹つて居つた某婦人は、一日聖人の通行を聞いて室を出で、密に路傍に坐つて聖人の衣に觸れた

所が、即坐に無病の身となつた。又某日聖人が、黙示録にある「天に大いなる微顯はれたり云々」(十一章)といふ言を題として説教して居られたが、其時人々は星の如き火の球が天上より下り、聖人の説教中絶せず其頭上の周圍に輝いて居るのを見たといふ。

此等の奇蹟によつて聖人の名が日増しに高く、連年伊太利國に遊説したが、到る所の地聖人を歡び迎へ、多衆の男女老幼は其説教を聴いて罪を悔い心を改めた。聖人は人々より無上の敬意を拂はれたが、謙遜の態度を少しも改めなかつた。此謙遜貞潔といふ事は至つて守り難き徳で、世俗に居り魔鬼の誘惑に遭ひつゝある者は、身を終るまで絶えず善功を積み之を戦ふやうにせねば、到底自己本能の力のみにては之を保ち守ることが出来ないものである。聖人は身東西に奔走し、朝夕道々を説き福音を宣べ、随分煩雜な任務を爲しながらも恰も曠野の如き無人の地に獨り居るが如く、毎日靜に祈禱黙想を爲し、人々より師として仰がるゝやうになつ

を享くべく天に昇られた。時に降生後千四百四十四年であつた。

死後多數の奇蹟が顯はれた。それで六年の後教皇ニコラス第五世陛下は、其名を聖人の冊簿に列せられた。

* * * * *

黙想

聖愛を心に養ふ事

吾主耶穌人に訓へて宣はく「我は地上に火を放たんとて來れり、其の燃ゆる外には何をか望まん(ルカ二)」

此處に宣ふ所の火といふのは、即ち聖愛である。耶穌御降生以前、此火は地上に少く見られて、只ユデアの小國のみ、世々微々として存して居つたのであるが、天主はアブラハムより以下、各豫言者に黙示を以て相繼がせ、特に聖愛を其心に燃やせ養はせて、之を

ても、細心の注意を以て會の戒律を堅く守り、苦業大齋を怠りなく勤めて居られたので、聖龍が日に加はり、信仰が益々燃ゆる、流石の魔鬼も之を攻め之を害するところが出来ないやうになり、聖人の謙遜、卑下、貞潔の徳は光り輝いて、一點の瑕もなかつたのである。

斯くてベルナルヂノは五十八歳の時、伊太利に於ける各所の修院の總長となつた。乃で力を竭して戒律を興し、修士等を導いて徳功を樹てさせ、並に新に修院を造つて少年の者を入らしめた。教皇は屢々ベルナルヂノを司教に陞さんとしたが、聖人は只身を終るまで院修せんことをのみ望んで之を斷り、更に各地を遊歴して吾主を讃め頌へ、人々の救靈の爲に盡して居られた。

六十四歳の時アキラに行つたが、其地で重き病氣に罹り、自ら不日此世を去つて主に見ゆるといふ事を知つたので、平和の中に善終の準備をして居られたが、御昇天の祝日の翌日、眠るが如く安らかに永遠の福樂

世々の人々に通せんことを望まれたのである。彼の高德のエリア聖人の如き、聖愛の烈しき火の示す所に由り、洗者聖ヨハチが將に生れんとするや、母の胎内に踴躍し、生れて後世を避けて野に棲み、唯救世主を慕うて切に人々に勧め力めて居つた、此行爲は主として聖愛の引く所に由つたからである。又聖母マリアは、エリア、ヨハチに比ぶれば愈々尊く、日夜天主に救世主の來られんことを祈り、甘んじて聖子を獻げて大功業を成されたのであるが、聖母の此行ひは聖愛の異烈の致す所ではなくして何であらうか？聖母より上に、吾主耶穌は貧窮に生れ、苦楚に活き、刑戮に死し給ふた。吾主の此行爲は聖愛の無限無量の火の成す所に由らずして何であらうか？

主耶穌の聖愛は實に海の如く、洋々として天下に溢れ漲つて居る。それで世界各國の奉教人中より數へ難き程多くの聖人聖女が輩出し、彼等は家を離れ世を避けて獨り天主を慕ひ、世事を見ること幻の如く、死を

見ること生の如く、或は天主を愛すること、己が性命に比べて愈々重く粉骨碎身して以て之に背かない。此等聖人の行爲は全く聖愛の然らしむる所ではあるまいか。實に主の聖言の如く、主は仁慈を顯はさんとして來つて火を地上に放ち、之を普く地上に燃さんとせられた。それで二千年前東より西に、其後西より世界各國に流れたが、能く之を止め妨ぐる者がなく、人心性來の昏迷、惡王惡官の暴虐、魔鬼の仇恨等、皆俱に其に力を合せて此火を撲滅せんと努めて居るが、竟に能く其目的を達せないのである。

尙大聖人以下、普通の信者の中にも亦聖愛が大に行はれて居る。乃ち許多の男女等、別に奇蹟を顯はさず聖品にも登らないが、然し常に聖愛を其心に燃やし、子女の父母を慕うが如くに天主を仰ぎ慕ひ、恒に大徳を持して死するまで之を保つて居るのである。

此聖愛を信者の心に養ひ育つ者は誰であらうか、云ふまでもなく天主の聖寵は自然聖愛の本となるのである。

るが、また聖人方の善き模範も與つて力があるのである。某修士の云ふには「ベルナルチノは内心熱心にして、吐く所の言語は火の如くであるから、聞く者は何しても之に燃されずには居られぬ」と。寔に其言の如く、大聖人の世に在るは、聖愛の爐の如きもので、常に火を世間に放つて之を燃やすのである。主耶穌は火を地上に投ぐるや、使徒等は之に燃やされて四方に散り、以て其聖愛を各地に傳へ、使徒以來今日に至るまで、世々の聖人は、只吾主耶穌に代つて火を世間に放ち、以て其燃ゆるをのみ願はれたのである。

シエナの聖ベルナルチノは、乃ち聖愛を人々の心に投げられた方であるから、宜しく其法を學ばねばならぬ。各靈父や吾等は、特に主に愛し選ばれたのは、全く火を地上に投げる爲である。されば勉め勵まねばならぬ。聖師の云はれるには「只天主の光榮を求め、事に人を己の如くに愛し、絶えず自ら其を實行して善き鏡を示せよ」と、我等は須らく此言を心に記し、行に

顯すならば、吾主耶穌と使徒に繼いで、聖愛が必ず發し、多くの者を天に昇すことが出来るのである。

之を要するに天に昇るには必ず聖愛を心に有たねばならず、信者たる者は力を竭して聖愛を本心に燃やし以て之を地に投げねばならず、聖人は乃ち吾等の良き師にして、能く聖愛の火を地に投げて之を燃やすといふ事が明かに分つた。されば常に思ひを此点に留め、我等靈父の命を奉じて布教を爲す場合には、必ず聖人等の此妙法に學び、力をつくして聖愛を心に燃やし、心を盡して之を地に投げねばならぬ。

五月廿一日

(後生後一三三〇年生一三三三年死)

後龜山天皇時代

聖ヨハチ、子ボムセノ靈父殉教

告解の祕密を守つて殉教せられた靈父聖ヨハチ、子ボムセノは、降生後千三百三十年、今の埃太利國のボ

ヘミ州の子ボムセノに生れたのである。家計が中等であつた。生れて數日の後大患に罹り、今にも死なんとして居つたが、父母はシトー會の某修院に連行し、熱心に聖母の恩祐を願ひ、遂に無事なることを得、其後壯健に育つた。

そして十餘歳の頃、父母は我子が學を好み徳を愛するの傾向あるを見て大に喜び、良久其修院の側に住居を定めた。ヨハネは毎朝早くより修院に行つて、數臺の彌撒答へをなし、修士等に從うて讀書し、數年の後、アラグ市に往つて勉學し、遂に業を卒へて歸つたが、其學問辯才が優れて居るので、廿五六歳の時品級の秘蹟を領けて靈父となり、命を奉じて教理を説き聽かせ居つたが、其成績が頗る佳かつた。

時の國王グエンセラスは、人と爲り暴虐にして色を好み、佞人を近づけて政事を疎にして居つた。偶々ヨハネ靈父の聲名を聞き、特に使を遣つて説教を聽かんことを求めた。靈父は國王の人と爲りを能く知つて居

つたが、少しも懼れず、直に召に應じて宮廷に入り、度々教理を説いた。國王は其都度悦んで耳を傾け、漸改心の萌が見え、當時某市の司教が逝去せられたので、國王は此ヨハネ靈父を司教に陞し、其跡を繼がせんとしたが、靈父は推して之を辭退したが、其年司教は此靈父を宮廷の主任靈父に任命したので、宮廷の人人は大に歡んで居つた。

此國王の改心は誠心よりではなかつたと見ゆ、其後幾もなく性來の暴虐が發して、我儘の振舞が多くなつた。皇后は賢明にして、常に王の舉動を見て嘆き、度之を諫めて居つたが、其都度却つて怒を招き、竟には佞人の爲に不正の罪ありと讒言されたのである。所が國王は輕々しく之を信じ、一日ヨハネ靈父を召して「朕は久しく皇后の行爲を疑うて居るが、如何なることか明かでないから困つて居る。就ては靈父は常に皇后の告解を聽いて居るから、自然其思ひ行ひを能く知つて居らるゝであらう。何卒包み隠さず之を告げて貰ひ

たい」と。ヨハネ靈父は之を聞いて大いに驚き「皇后の品行端正にして、心情の潔白なるは、朝廷の者等皆能く之を知つて居ります。陛下の此疑惑は、必ず佞人輩の讒言より起つた事であらうと思ひますから、何卒左様の御心配なく、以前の如くに皇后を愛されよ」と奏上した。

スルと國王は少しく怒を含み「敢て戯れに聞くのではない、朕は皇后に私心の有るのを知つて居るが、念の爲め靈父に皇后の告解の秘密を聞かうとするのである。」と靈父は威儀を正しながら「靈父として信者の告解を聽かば、直にまた聞かざる如くにして、之を他に漏らしてはならぬ、のみならず法官も之を問ふ事が出来ず、國王も之を探ることが出来ず、靈父も亦告解を爲せし者が、明かに此罪無しと知つても、決して之を説いてはならず、何事も知らずと答へねばならぬ旨を詳しく奏上した。スルと國王は「既に告解をなせし者に此罪無しと知りながらも、尙之を説く事が出来ぬ

か」と反問するので、靈父は之に答へて「告解をなせし者に此罪無しと告ぐるは、罪有り」と説くに異ならず、例へば靈父は某官吏の告解を聽きしと假定せん、其時陛下は靈父に向ひ、彼者が國王を謀殺せんとの罪あるかと問ふ、其時靈父は斯かる事なしと答へ、次に國王は再び靈父に向ひ、彼は清廉潔白の者であるかと問ふ、其時靈父は此者が利を貪り不義を働く者なることを知つて國王に何とも返答せぬ場合は如何であらうか、靈父は之が爲に別に何事も説かぬが、陛下は必ず此官吏の不正なる事を明かに知らん。故に特に教理上靈父が告解を聽く以上は、人の好悪を言ひ、痛悔せし罪を説く事を厳しく禁じてある。今陛下臣に向つて皇后の告解の事を問はるゝが、臣は唯公教の戒律に基づき、一言一句も之に答ふる事が出来ぬ」と復奏した。國王も此理を聞いて返す言語もなく、其儘内殿に入つた。越へて數日、此國王は食物に就て不滿の事があり、大に怒つて食事係を斬らんとした。侍従の者等只驚き